

杉田東漸寺貝塚本発掘調査報告 2

－横浜市立杉田小学校校庭整備工事に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書－

2006

横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団

2006

横浜市教育委員会
財団法人横浜市ふるさと歴史財団

杉田東漸寺貝塚本発掘調査報告 2

—横浜市立杉田小学校校庭整備工事に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書—

2006

横浜市教育委員会
財団法人横浜市ふるさと歴史財団

例 言

- 1 本書は、平成17年度に横浜市教育委員会総務部施設管理課が実施した市立杉田小学校校庭整備工事伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は平成17年4月12日より平成17年6月30日まで実施した。また、資料整理及び報告事業は平成17年11月30日より平成18年2月24日までに実施し、その成果物が本報告書である。
- 3 本書の遺構・遺物挿図の指示は下記の通りである。

[挿図縮尺]

遺 構	試掘溝 1：80	竪穴住居址 1：80	竪穴状遺構 1：80
	溝状遺構 1：80	土坑 1：40	その他 スケールにて表示
遺 物	実測土器 1：4	土器拓影 1：3 (1：4)	瓦 1：4
	石器 1：4 (1：2)	金属器・古銭 1：4 (1：1)	

[遺構挿図]

- ◎挿図中の方位はすべて真北を示す。
- ◎水系レベルは標高を示す。水系レベルは標高を示す。
- ◎竪穴住居址などのピットの深さは、床面からの換算値として図中に表記した。
- ◎その他の遺構内のピットの深さは、周辺の遺構確認面からの換算値として図中に表記した。
- ◎遺構内・その他、特徴のある部分についてはトーンを用いて表現した。

[遺物挿図]

- ◎出土遺物番号は3桁の数字をもって表わし、その頭に実測対象土器・拓本土器はPを、瓦にはKを、石器にはSを、金属器はIを付して区別した。

- 4 本文中に記載している遺構の記述のなかで、() 付きの数値については、現存する大きさを表わしている。
- 5 本文中に記載している遺物の記述のなかで、() 付きの数値については、復原推定径ないしは、現存する大きさを表わしている。
- 6 石器の石質同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 7 鉄器の成分分析については、株式会社日鐵テクノロジーに依頼した。
- 8 自然遺物の分析同定については、松島 義章氏に依頼した。
- 9 人骨の部位同定については、聖マリアンナ医科大学解剖学教室に依頼した。
- 10 遺物の整理および図版の作成作業は埋蔵文化財センターにおいて鹿島・橋本が行ない、執筆・編集作業は鹿島が中心に行なった。
- 11 遺物の写真撮影は、橋本が行なった。
- 12 調査組織

調査担当 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 理事長 高村 直助

(平成17年6月30日まで平野 邦雄)

埋蔵文化財センター所長 坂上 克弘

調査第二係長 鈴木 重信 調査第二係員 鹿島 保宏・橋本 昌幸
調査協力者

[発掘調査] 石船 康晴（國學院大学）・伊藤 秀和・武田 芳雅（國學院大
学大学院）・山本 裕志

[遺物整理] 荒井 サチ子・石船 康晴（國學院大学）・今泉 静子・栗原 江
美子・越 喜久子・斉藤 三千代・武田 芳雅（國學院大学大学院）・
長谷川 孝子

13 本遺跡の出土品、記録図面および写真等は財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターに
おいて保管している。

14 発掘調査および出土品の整理作業に際しては、次の諸氏・諸機関にご助言・ご協力を賜った。ここ
に芳名を記し、深謝の意を表する（敬省略・五十音順）。

姉崎 智子・神奈川県立生命の星・地球博物館（大島 光春・田口 公則・樽 創）・株式会社横浜技
術コンサルタント・川名 ひろみ・呉地 英夫・長岡 朋人・平田 和明・松島 義章・皆川 貴史・
有限会社アーク・フィールドワークシステム・横浜市立杉田小学校

目 次

例 言	i
目 次	iii
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査経過	2
第3章 発見された遺構と遺物	4
(1) 基本層序	4
(2) 本発掘調査	5
1 トレンチ	6
2 トレンチ	6
3 トレンチ	6
4 トレンチ	7
・ 9号溝状遺構	7
5 トレンチ	9
6 トレンチ	10
・ 10号溝状遺構	10
7 トレンチ	12
8 トレンチ	12
・ 12号溝状遺構	13
・ 13号溝状遺構	14
9 トレンチ	14
・ 13号溝状遺構	14
10 トレンチ	16
・ D貝層	19
・ 3号竪穴状遺構	20
・ 4号土坑	21
・ 5号土坑	21
・ 8号溝状遺構	22
・ 1号墓	23
11 トレンチ	23
12 トレンチ	25
・ 1号遺構	25
13 トレンチ	26
・ 1号溝状遺構 [A貝層]	26
14 トレンチ	29

・ 1号竪穴状遺構	30
15トレンチ	30
・ 1号溝状遺構 [B貝層]	31
16トレンチ	32
・ 2号竪穴状遺構	33
・ 1号土坑	34
・ 2号土坑	35
17トレンチ	35
・ 2号溝状遺構	35
・ 3号溝状遺構	38
18トレンチ	38
19トレンチ	38
20トレンチ	39
・ 3号土坑	39
21トレンチ	42
・ 5号溝状遺構 [C貝層]	43
・ 1号住居址	45
・ 2号住居址	47
・ 4号溝状遺構	49
・ 7号溝状遺構	49
22トレンチ	49
23トレンチ	51
・ 6号溝状遺構	52
(3) 遺構外出土遺物	53
第4章 まとめ	54
付編1 杉田東漸寺貝塚出土鉄製品の成分分析調査	57
付編2 杉田東漸寺貝塚(横浜市)出土人骨	61
付編3 杉田東漸寺貝塚出土脊椎動物遺体	63
付編4 杉田東漸寺貝塚出土の貝類について	73
写真	95

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	1	第5図 遺構分布図2 [体育館裏部分]	6
第2図 試掘溝配置および調査区相関図	2	第6図 3トレンチ	7
第3図 土層模式図	4	第7図 4トレンチおよび9号溝状遺構	8
第4図 遺構分布図1 [校庭部分]	5	第8図 5トレンチおよび10号溝状遺構	9

第9図	6トレンチおよび10号溝状遺構	11	第27図	15トレンチおよび1号溝状遺構 [B貝層]	31
第10図	7トレンチ出土遺物	12	第28図	16トレンチ	32
第11図	8トレンチおよび12・13号溝状遺構	13	第29図	2号堅穴状遺構	33
第12図	9トレンチおよび10～13号溝状遺構	15	第30図	1・2号土坑	34
第13図	9トレンチ出土遺物	16	第31図	17・18トレンチ	36
第14図	10トレンチ	17	第32図	2・3号溝状遺構出土遺物	37
第15図	10トレンチ出土遺物	18	第33図	20トレンチ	40
第16図	D貝層	19	第34図	20トレンチ出土遺物	41
第17図	3号堅穴状遺構	20	第35図	21トレンチ	43
第18図	4号土坑・5号土坑	22	第36図	5号溝状遺構 [C貝層]	44
第19図	8号溝状遺構	22	第37図	C貝層出土遺物	45
第20図	1号墓	23	第38図	1号住居址	46
第21図	11トレンチ出土遺物	23	第39図	2号住居址	48
第22図	12トレンチおよび1号遺構	24	第40図	22トレンチ	50
第23図	12トレンチ出土遺物	25	第41図	22トレンチ出土遺物	51
第24図	13トレンチ	27	第42図	23トレンチ	52
第25図	1号溝状遺構 [A貝層] 出土遺物	28	第43図	遺構外出土遺物	53
第26図	14トレンチおよび1号堅穴状遺構	30			

写真目次

扉写真	貝層調査風景	95	写真27	D貝層 (北より)	100
写真1	校庭部分調査前全景 (北東より)	97	写真28	D貝層遺物出土状況 (東より)	100
写真2	体育館裏調査前全景 (北東より)	97	写真29	3号堅穴状遺構 (東より)	100
写真3	調査区設定風景	97	写真30	3号堅穴状遺構P030出土状況	100
写真4	表土除去作業風景	97	写真31	4号土坑 (南より)	100
写真5	遺構確認作業風景	97	写真32	5号土坑 (北より)	100
写真6	測量風景	97	写真33	1号墓 (北より)	101
写真7	1トレンチ (北より)	97	写真34	10トレンチ西側ピット (西より)	101
写真8	2トレンチ (南東より)	97	写真35	10トレンチ中央ピット (西より)	101
写真9	3トレンチ (北より)	98	写真36	10トレンチ完掘状況 (東より)	101
写真10	4トレンチ (西より)	98	写真37	11トレンチ (北より)	101
写真11	9号溝状遺構 (西より)	98	写真38	12トレンチ中央 (東より)	101
写真12	5トレンチ地業面 (西より)	98	写真39	12トレンチ東側 (東より)	101
写真13	10号溝状遺構 (南より)	98	写真40	1号遺構 (南より)	101
写真14	5トレンチ完掘 (西より)	98	写真41	12トレンチ西側 (東より)	102
写真15	6トレンチ (西より)	98	写真42	13トレンチ西側 (南より)	102
写真16	10号溝状遺構 (南より)	98	写真43	13トレンチ中央 (南より)	102
写真17	7トレンチ (西より)	99	写真44	1号溝状遺構 (北より)	102
写真18	8トレンチ (東より)	99	写真45	A貝層堆積状況 (西より)	102
写真19	12・13号溝状遺構 (東より)	99	写真46	14トレンチ [1号堅穴状遺構] (西より)	102
写真20	9aトレンチ (北より)	99	写真47	15トレンチ [1号溝状遺構] (北より)	102
写真21	9cトレンチ (西より)	99	写真48	B貝層堆積状況 (西より)	102
写真22	10号溝状遺構 (北より)	99	写真49	16トレンチ (東より)	103
写真23	11号溝状遺構 (東より)	99	写真50	2号堅穴状遺構 (南より)	103
写真24	12号溝状遺構 (西より)	99	写真51	1・2号土坑 (西より)	103
写真25	13号溝状遺構 (東より)	100	写真52	2・3号溝状遺構 (北より)	103
写真26	10トレンチ遺構掘削前 (東より)	100	写真53	18トレンチ (北より)	103

写真54	19トレンチ（東より）	103	写真69	見学会の様子	105
写真55	20トレンチ遺構掘削前（北より）	103	写真70	クジラの下顎骨出土状況（南より）	105
写真56	20トレンチ完掘状況（南より）	103	写真71	クジラの下顎骨取り上げ状況	105
写真57	3号土坑（南より）	104	写真72	出土遺物保管状況	105
写真58	21トレンチ（東より）	104	写真73	出土遺物1	106
写真59	C貝層検出状況（北東より）	104	写真74	出土遺物2	107
写真60	5号溝状遺構（西より）	104	写真75	出土遺物3	108
写真61	1号住居址（南東より）	104	写真76	出土遺物4	109
写真62	1号住居址カマド（南より）	104	写真77	出土遺物5	109
写真63	2号住居址（東より）	104	写真78	出土遺物6	110
写真64	7号溝状遺構（南より）	104	写真79	出土遺物7	111
写真65	22トレンチ遺構掘削前（南より）	105	写真80	出土遺物8	112
写真66	22トレンチ完掘状況（南より）	105	写真81	出土遺物9	113
写真67	23トレンチ（南より）	105	写真82	出土遺物10	114
写真68	6号溝状遺構（南より）	105			

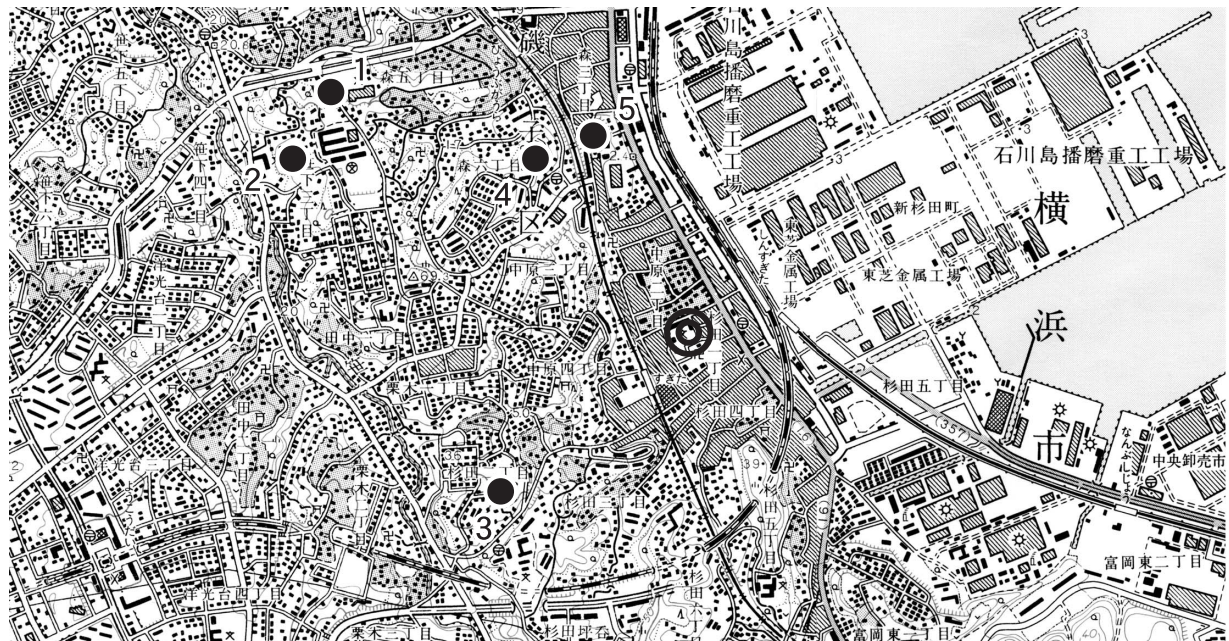
第1章 遺跡の位置と環境

杉田東漸寺貝塚は、京浜急行杉田駅の北東約0.2km、JR根岸線の新杉田駅の南西約0.3kmに位置し、2つの路線に挟まれた横浜市磯子区杉田一丁目8-1に位置する。また、その絶対位置は、北緯35度23分07秒、東経139度37分00秒である。

遺跡は、根岸湾に臨む沖積低地に立地し、標高4～5mを測る。西側の丘陵地から流れ出る数条の小河川のうち、河口付近で分流する注入川が形成した三角州上にあたる。また、歴史的環境としては、このあたりは臨濟宗「建長寺」の末寺である霊桐山東漸寺の旧寺域にあたっている。横浜市域では海浜部に立地する遺跡の発掘例はほとんどないため、本遺跡の調査は希少な事例である。

本遺跡の西側には、大岡川の支流である笹下川によって画される標高50～70m程度の丘陵が北西から南東方向へと連なっている。この辺りは、地形的には多摩丘陵と三浦丘陵との境にあっており、複雑に解析された丘陵地形を呈している。

周辺には、縄文時代中期の集落址を主体とする左藤内遺跡や縄文時代中期の峰ヶ台貝塚、同じく後期の森町貝塚、また、縄文時代中期後・晩期の杉田貝塚などの貝塚群が知られている。また、学史的にも著名な杉田遺跡などの遺跡が存在している。また、古墳時代の遺跡では、先にあげた左藤内遺跡および屏風ヶ浦小学校の斜面部には横穴墓の存在が知られている。



- | | | |
|-------------|---------|--------------|
| ◎：杉田東漸寺貝塚 | 1：左藤内遺跡 | 2：峰ヶ台貝塚 |
| 3：杉田貝塚・杉田遺跡 | 4：森町貝塚 | 5：屏風ヶ浦小学校横穴墓 |

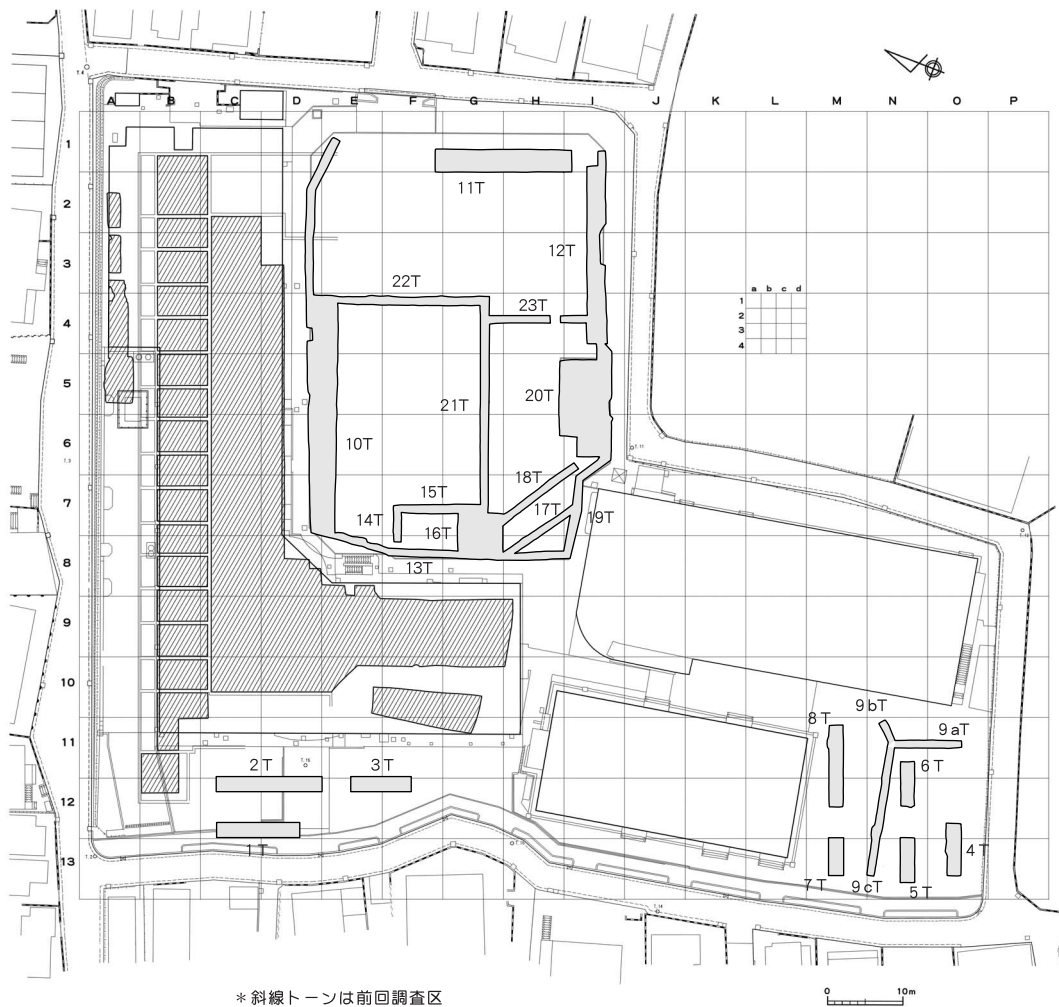
第1図 周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

第2章 調査経過

調査にあたっては、平成14・15年度調査時に設定した調査用グリッドを踏襲することとした。このグリッドは、校舎改築に伴う測量に利用したトラバース点を用い、調査エリアを網羅するように1辺8mの方眼をかけた。このグリッドの北東より南方向にA～P、西方向に1～13のグリッド番号を冠した。さらに調査にあたっては、このグリッドを1辺2mのグリッドに細分し、a～d、1～4の呼称で細分を行なっている。

現地調査は、平成17年4月25日より開始した。発掘調査用の仮設事務所を校庭内に設営し、翌26日に発掘機材搬入を搬入した。翌27日より調査区の設定等の具体的な調査に取りかかった。

試掘溝（以下トレンチ）の掘削については、安全性を鑑みて黄金週間明けを待って5月9日より開始した。今回の調査は、本発掘対象部分（校庭）と確認調査対象部分（その他）とに大きく分けられた。確認調査実施部分については、遺構が検出された場合、本発掘調査を実施することも考えられ、調査期間が不確定であった。そのため、まず、確認調査部分より調査を実施することとし、遺構が検出された場合調整に入ることとした。確認調査部分のトレンチは5月12日に調査を終えた。その結果、確認調査



第2図 試掘溝配置および調査区相関図（縮尺1/1,000）

部分のトレンチから溝状遺構などが検出されたため、本発掘調査の必要があることが判明した。このため、文化財課を通し本発掘調査範囲を検討したところ、事業（上物）の設計を変更することで全域の発掘調査の必要はなく、校庭部分と同様にトレンチ内のみ本発掘調査を行なうことでまとまった。

そこで、体育館裏の4～9トレンチ部分はひとまずそのままにしておき、引き続き本発掘調査部分（校庭）の表土除去に取りかかった。

本発掘調査部分の表土除去作業は、学校関係の予想外の地下埋設物の存在が作業能率を妨げ、5月23日まで行なった。トレンチ調査終了後、同日よりただちに遺構調査に取りかかった。遺構調査は校庭部分より行なった。この校庭部分の調査が終了したのち体育館裏部分の遺構調査を行ない、13号溝状遺構の実測図作成の6月20日をもって現地調査は終了した。翌21日より撤去に伴う準備を行ない、24日に調査用品の撤去、27日に仮設事務所の撤去を行なった。その後埋蔵文化財センターにおいて概報作成作業を実施した。

また、調査中には、クジラの下顎骨が出土した。そのため、自然遺物の専門である神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員等の協力を得て、遺物の取りあげを行なった。また、期間中に横浜市立杉田小学校の全校児童（578名）を対象とした見学会を実施した。

遺物整理は、調査終了後の平成17年11月30日から平成18年2月24日の期間で、横浜市都筑区勝田町にある埋蔵文化財センターにおいて実施した。

第3章 発見された遺構と遺物

(1) 基本層序

本遺跡は、調査以前から小学校の校舎やグラウンドとして使用されていた。そのため、もともとの表土は存在せず、堆積土の最上層は学校関係の造作に伴う新しい整地層となっていた。表土の層厚は区々で、グラウンド部分は10cmほどと薄く、現在の校舎の裏や体育館の裏手では厚くなっている。また、場所によっては整地層（攪乱土を含む）のみの場所も存在している。

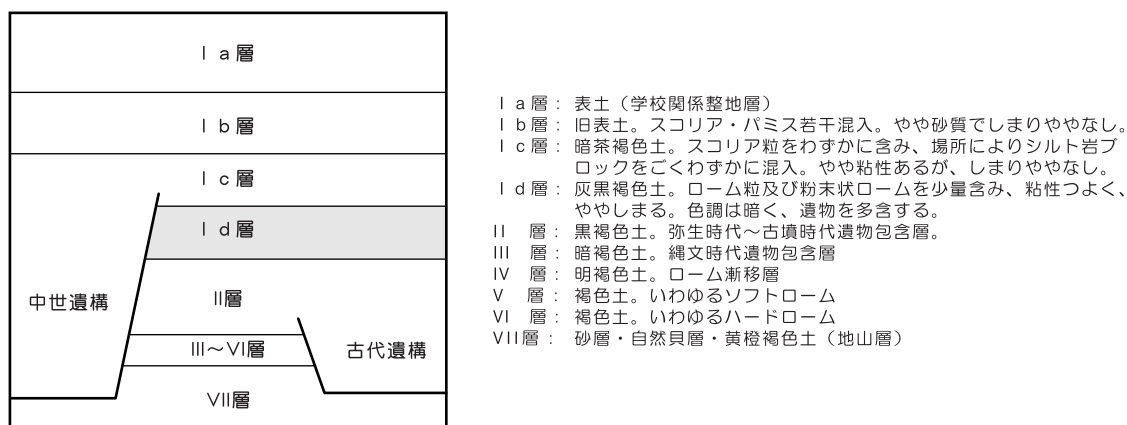
全体的に度重なる配管等埋設の改変によって乱されているせいもあって、市内の多くの遺跡においてよく認められる耕作土や、表土下堆積しているいわゆる旧表土については、場所によっては確認できなかった。

この旧表土層の下は中世の遺物包含層となっている。中世遺物包含層はおおむね3層に分層が可能である。そのなかでも、最下層のI d層は中世地業層で部分的にはシルトブロックを多く混入し、また、シルトブロックのみの地業を施しているものも存在する。この地業層は、体育館付近においてはほぼ全域で確認されている。

II層はいわゆる弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。黒味が強くやや砂質で、層厚は厚い。他の遺跡で一般的に見られるパミスの混入は少なく、かわりにシルト粒子の混入が認められた。竪穴住居址付近などではこのII層を掘り込んで構築されるが、覆土の上面にもII層が堆積していることから2層に分層が可能である。しかしその差は微妙で、遺構が存在していない部分においては、肉眼による分層は不可能であった。

本遺跡では、III層IV～VI層は確認されていない。一部にローム層に相当するものが確認されたが、かなり砂質で、他の遺跡で確認されるローム層とは異質なものであった。

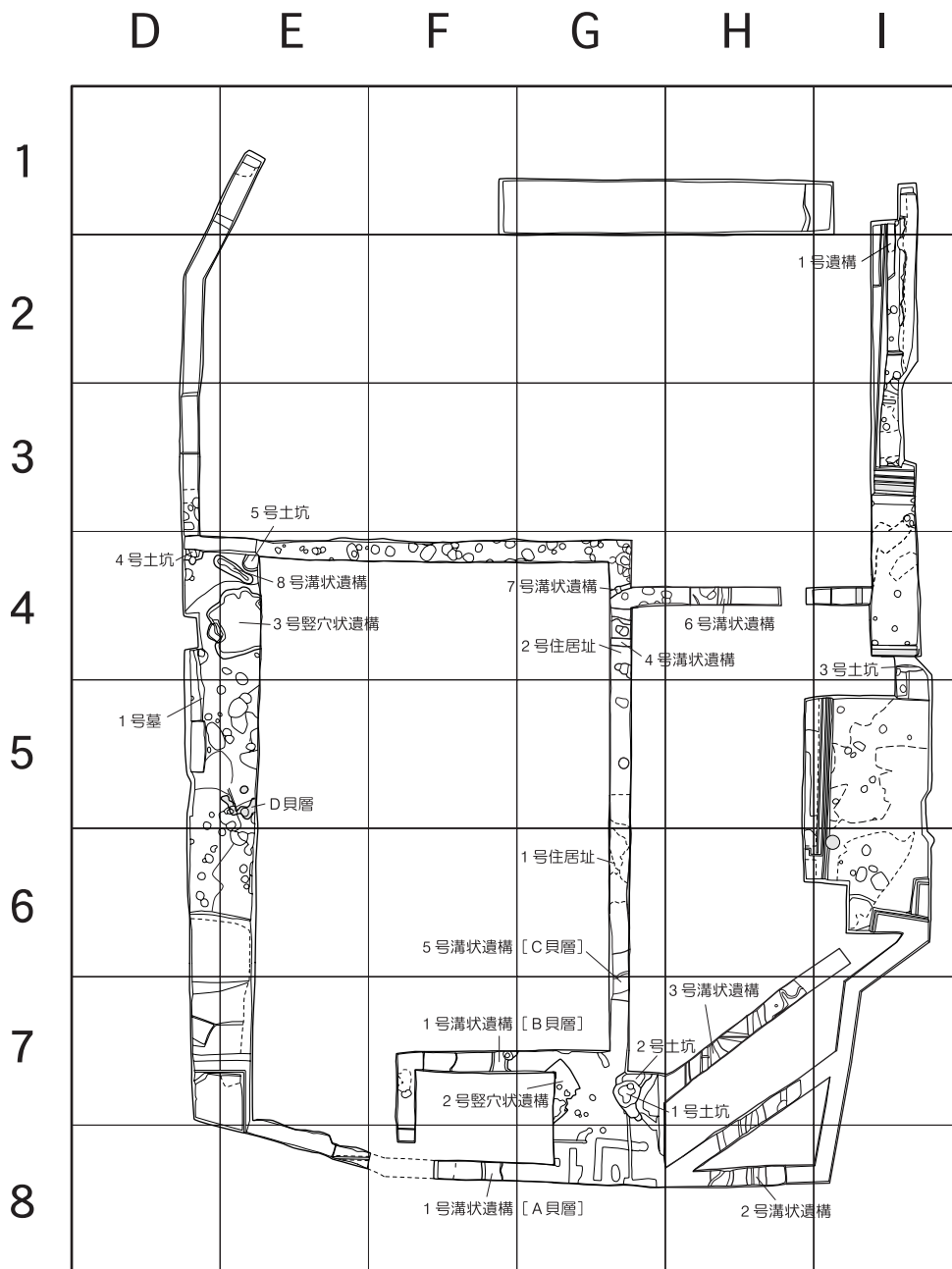
VII層は地山層である。この遺跡周辺では弥生時代以前では海に没していた。縄文時代前期に地球的規模で温暖化が進み海進していたが、その後気温の低下に伴って、海退が始まり、それまで海であった部分が陸化する。その際に潮だまり的に自然貝層が形成されたと推測される砂層と自然階層が、まだらに露呈している。また、南西部では、黄橙褐色のシルト質の砂層と粘土層となっている。



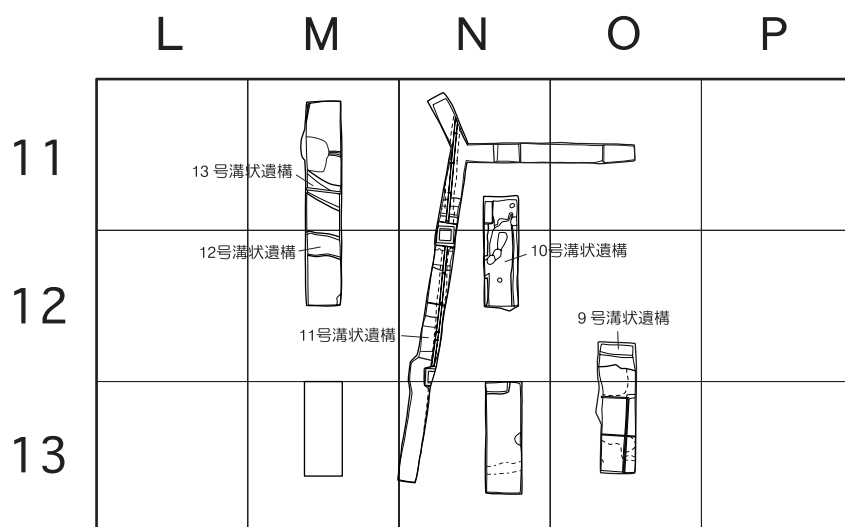
第3図 土層模式図

(2) 本発掘調査

今回の調査では、その多くが配管等に伴う調査であったため、それぞれのトレンチの掘削面積は非常に狭くなっている。また、確認調査によって検出された遺構についても、トレンチ内のみ本発掘調査を実施した。その結果、ごくわずかの検出面積にとどまるものが大半であった。また、同一の遺構が複数のトレンチにわたり検出されるものもあり、時代や遺構の種類ごとの記述はむいていない。そのため、トレンチごとに遺構の表記を行ない、複数トレンチにまたがっているものについては、最も遺存状況が分かるトレンチにおいて説明を行なっている。



第4図 遺構分布図1 [校庭部分] (縮尺1/400)



第5図 遺構分布図2 [体育館裏部分] (縮尺1/400)

1 トレンチ

本トレンチは校舎の西側に設定したトレンチで、11m×2mの規模のトレンチである。前回の調査で遺構が確認できる深度以上の1.10mまで掘削調査を行なったが、トレンチ内はすべて旧校舎によるものと思われる攪乱によって遺構は確認できなかった。一部はさらに地表から2.25mにまで掘り下げたが、攪乱は下部にまで達し、遺構は確認されなかった。出土遺物は皆無であった。

2 トレンチ

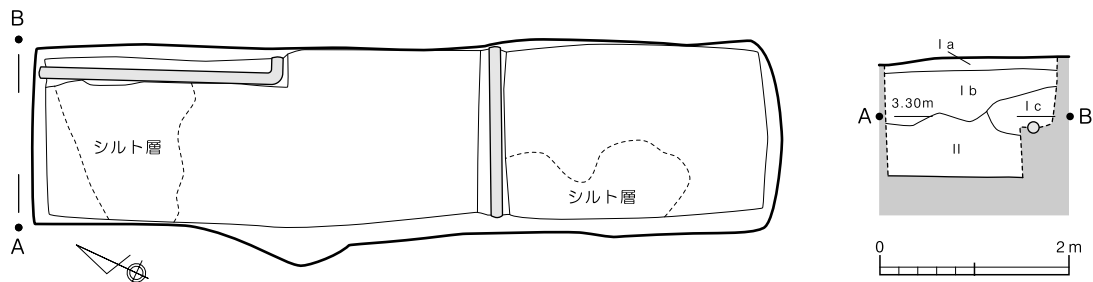
本トレンチは校舎の西側に設定したトレンチで、14m×2mの規模のトレンチである。設定当初、14mの長さまで掘削する予定であったが、攪乱を受けていることと公道への土砂の流出を考慮して長さを短くして調査を行なった。

1トレンチ同様、前回の調査で遺構が確認できる深度以上の1.10mまで掘削調査を行なったが、トレンチ内はすべて旧校舎によるものと思われる攪乱によって遺構は確認できなかった。出土遺物は皆無であった。1・2トレンチについては、堆積土がすべて攪乱土であり、遺構も検出されていないことからあえて図示は行っていない。

3 トレンチ (第6図)

本トレンチは校舎の西側に設定したトレンチで、8m×2mの規模のトレンチである。1・2トレンチがすべて攪乱によって破壊されていたため、このトレンチも同様に攪乱を受けていることが危ぶまれた。しかし掘削を行なったところ、地表より1.25m掘削したところで幸いにも地山と考えられる、灰色シルト質土が検出された。

この地山層はほぼ平坦で、トレンチの南側ではやや性質が異なっている。この地山層にて遺構確認を行なったが、遺構は検出されなかった。トレンチ内の堆積土の大半はやはり攪乱土で、出土遺物は皆無であった。



第6図 3トレンチ

4 トレンチ (第7図)

本トレンチは、体育館裏側のエリアの最も南寄りに設定したトレンチで、7 m×2 mの規模のトレンチである。地表より0.50m掘削したところ地業面と考えられる平坦な灰黒褐色土層が検出された。

この地業面上のトレンチ南寄りでは0.40×0.70mの範囲に人骨が確認された。検出された人骨は、周辺の粘土質の土壌の影響も受け遺存状態はきわめて悪く、取りあげ時には原形をとどめない程脆かった。この人骨周辺の土質は地業面とは異なっていたものの、明瞭な掘り込みを確認するには至っていない。

また、トレンチの東側では9号溝状遺構が検出された。

出土遺物は大半は9号溝状遺構からのものでトレンチからの出土遺物は少ない。P002はII層中から出土した略完形の土錘である。長さ4.3cm、幅、2.5cm、重さ(18.5)gを測る。管状を呈する。P003もII層中から出土した土錘の1/4片である。長さ(2.9)cm、幅(2.9)cm、重さ(9.4)g測り、管状を呈する。P005はII層中から出土した甕形土器の底部片である。厚さは1.5cmを測り、外面はハケのちミガキ。内面はハケ目の調整が施される。

K001は覆土出土の宇瓦の瓦当部破片である。陽刻の上向き剣頭文を配し、外区の上部は継ぎ目できれいに剥がれている。K002は平瓦の破片で、厚さ1.5cmを測り、わずかに離れ砂が付着している。K003はII層中からの出土で、厚さ1.6cmを測る丸瓦の玉縁部の破片である。両面ともに横方向の調整痕が認められる。K004は平瓦の破片である。厚さ1.6cmを測り、端部のケズリは不明瞭で摩耗が著しい。K003はII層中からの出土で、厚さ1.6cmを測る丸瓦の玉縁部の破片である。両面ともに横方向の調整痕が認められる。K004は平瓦の破片である。厚さ1.6cmを測り、端部のケズリは不明瞭で摩耗が著しい。

I001は元豊通宝である。錆が著しいが、篆書体であることが読み取れる。

・9号溝状遺構 (第7図)

本址は、トレンチの短軸方向(南北)に走行している溝状遺構で、検出部での溝幅は1.10~1.30m、深さは0.70mほどとなっている。

溝の掘り込みは、地山層のVII層を深く掘り込み、その断面形状は底面から緩やかに立ち上がり、確認面付近でわずかに段状をなす。この部分の地山は、オレンジ色の鉄錆状に変色しており、おそらく、溝内に水がはっていたことが推測される。また、水面の揺れによって柔らかい部分が浸食されたためにおきたものとする。また、底面の東側ではわずかに一段深く造られている。

けの底部片である。器高は（1.2）cm、底径は（6.5）cm底面に回転糸切痕およびスノコ痕が残る。P004は甕形土器の胴上部片である。厚さは0.5cmを測り、外面はハケ目、内面にはナデ調整が施される。

K001は覆土出土の字瓦の瓦当部破片である。陽刻の上向き剣頭文を配し、外区の上部は継ぎ目できれいに剥がれている。K002は平瓦の破片で、厚さ1.5cmを測り、わずかに離れ砂が付着している。

本址は、出土遺物の特徴や中世地業面から掘り込まれていることを考慮し、中世の溝状遺構であるものとする。またその性格については、おそらくは寺院内の区画および排水に使用されたものとする。

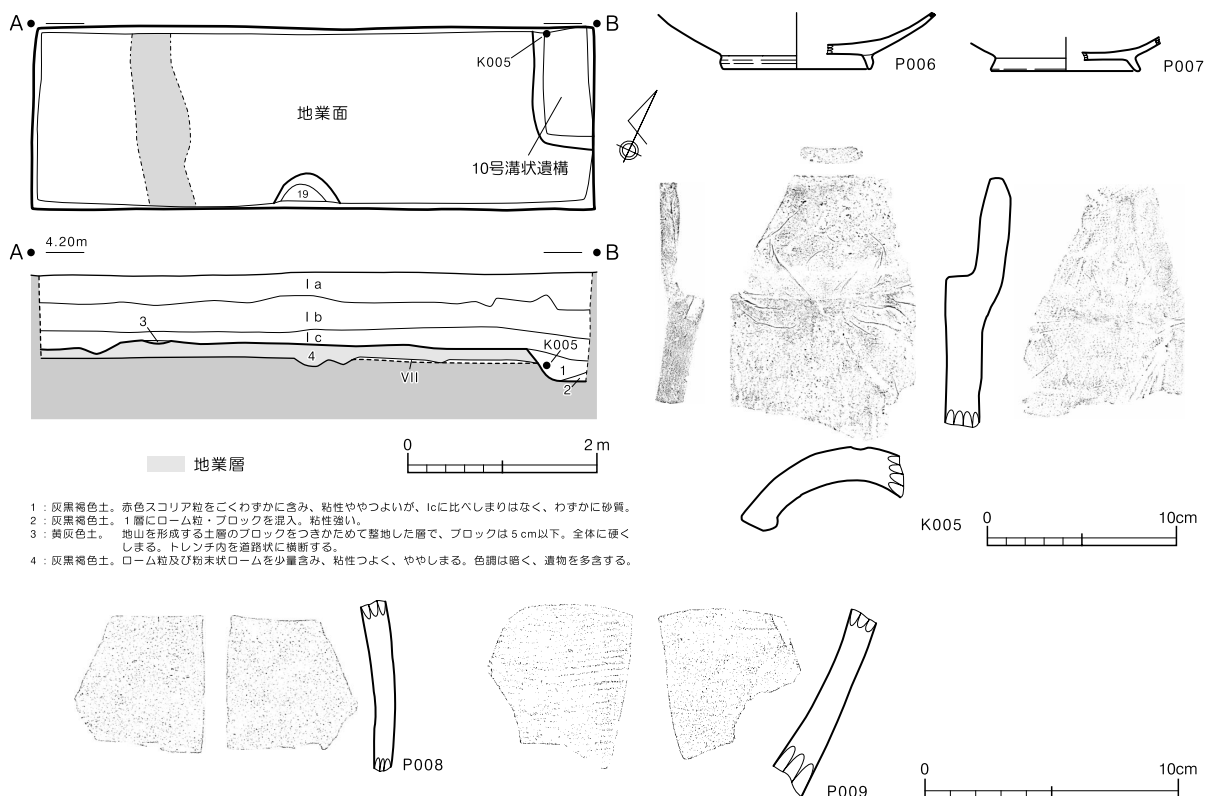
5 トレンチ（第8図）

本トレンチは、体育館裏側のエリアに設定したトレンチで、6 m×2 mの規模のトレンチである。地表より0.80m掘削したところで4 トレンチで検出されたものと同様の地業面と考えられる平坦な灰黒褐色土が検出された。この地業面上では、トレンチの西側寄りでシルトブロックを主体とした帯状の版築面が確認されている。幅0.55mほどの帯状を呈し、トレンチの短軸方向へと走り抜けている。この帯状の版築の延長と思われるものは4・7・9 トレンチにおいては確認されていない。

この他に、トレンチ東寄りで10号溝状遺構および1穴のピットが検出された。なお、10号溝状遺構については、6 トレンチ内にて確認された溝状遺構の端末部分にあたり、西側の立ち上がりはやや角度を持って立ち上がっている。このトレンチ内での掘り込みは最大で0.18mを測る。

出土遺物は少なく、いずれも地業面中から出土した遺物である。

P006は陶器碗の底部破片である。底径は（8.0）cmを測り、付高台で内外面ともに施釉される。P007



第8図 5 トレンチおよび10号溝状遺構

は磁器碗で底部約1/5の破片である。底径は(8.0)cmを測り、付高台で内外面ともに施釉される。P008・P009は須恵器で、P008は甕形土器の胴部片である。内外面ナデともにナデ調整が施される。厚さは1.0cmを測る。P009は須恵器の甕形土器胴部片で、外面がタタキ目、内面はナデ調整。厚さは1.5cmを測る。K005は10号溝状遺構覆土から出土した丸瓦の玉縁部付近の破片である。厚さ1.9cmを測り、端部のケズリは明瞭で、凸面には縄目痕、凹面には布目痕が着けられている。

6 トレンチ (第9図)

本トレンチは、体育館裏側のエリアに設定したトレンチで、6m×2mの規模のトレンチである。

このトレンチについては、トレンチ内の大部分が遺構であったため、4・5トレンチで確認できた地業面で一旦とめることができず、トレンチ調査と遺構調査を同時に行なった。

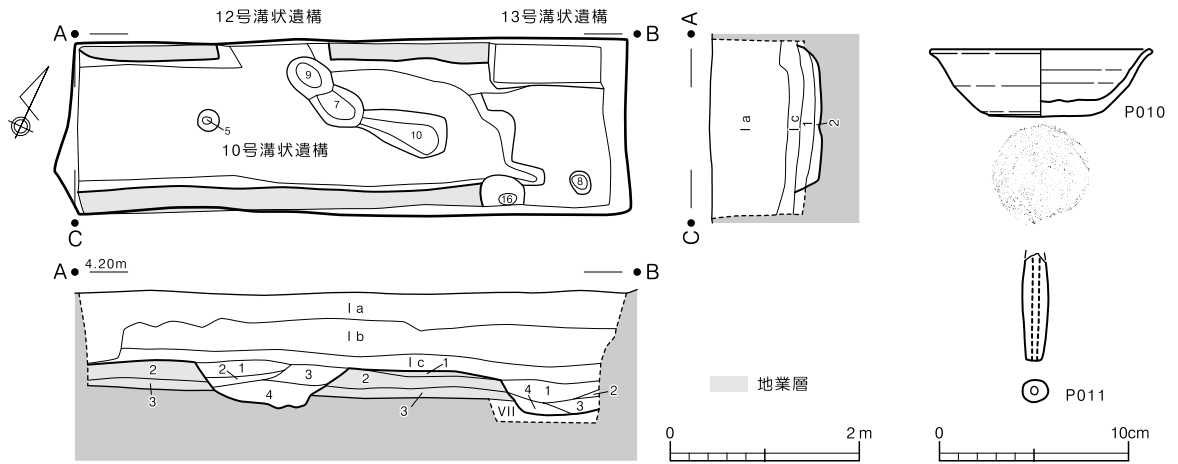
遺構確認は、地表より1.10mほど掘り下げた地山面で行なった。トレンチの断面で確認したところ、地業面は4トレンチや5トレンチで確認されたものよりは弱く、ややしまりが劣っている。ただし、一部においては、5トレンチで検出されたのと同様のシルトブロックを突き固めたような箇所も確認されている。

調査の結果、10・12・13号溝状遺構の3条の溝状遺構が検出された。12・13号溝状遺構については次の8トレンチにおいてその詳細を記載する。

P010はⅡ層中から出土した須恵器の坏形土器である。口縁から底径にかけて1/4残存しているもので、口径は(12.0)cm、底径は5.6cm、高さは(3.6)cmを測る。内外面ともナデで、底部に回転糸切痕が認められる。P011は10号溝状遺構の覆土中より出土した土錘で、片端部が欠損している。長さ(5.7)cm、幅1.4cm、重さ(8.7)gを測り、細管状を呈する。P012はⅡ層から出土した甕形土器の口縁部片で、厚さは0.5cmを測り、内外面ともにハケ目調整を施す。P013はⅡ層出土の坏形土器の口縁部破片である。内外面ともにナデ調整を施す。厚さは0.5cmを測る。P014はⅡ層出土の須恵器甕形土器の胴部片である。厚さは1.3cmを測り、外面はタタキ目、内面はナデ調整を施す。K006は10号溝状遺構覆土から出土した丸瓦の玉縁部の破片である。厚さ1.5cmを測り、端部のケズリは明瞭で、離れ砂が若干付着している。K007は10号溝状遺構覆土から出土した平瓦の破片である。厚さは2.0cmと厚めで、凹面に格子状のタタキ目、凸面に縦方向の調整痕が認められる。K008はⅡ層出土の丸瓦の玉縁部の破片である。厚さ1.8cmを測り、端部のケズリは明瞭である。凸面には縄目痕、凹面には櫛歯状の調整痕が着けられている。若干離れ砂が付着している。K009はⅡ層出土の丸瓦の玉縁部の破片である。厚さ1.3cmを測り、端部のケズリは明瞭である。凸面が横方向の、凹面には縦方向の調整痕が認められる。K010はⅡ層出土の平瓦の破片である。厚さ1.8cmを測り、両面とも縦方向の調整痕を有する。K011は10号溝状遺構覆土出土の平瓦の破片である。厚さ1.8cmを測り、両面ともに縦方向の調整が施される。

・10号溝状遺構 (第9図)

本址は、東西方向に走行している溝状遺構で、溝幅は確認面で1.35～1.40m、溝底で1.15～1.20mを測り、掘り込みは最大で0.15mを測る。西側の5トレンチ内においてこの溝状遺構の突端が検出され、さらに逆の東側9aトレンチ内でも検出され、さらに東側へと延びていることが判明している。

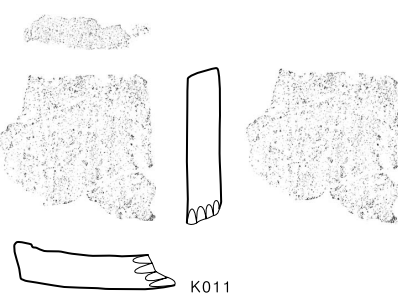
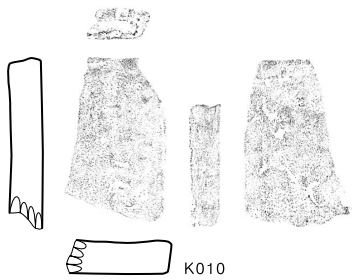
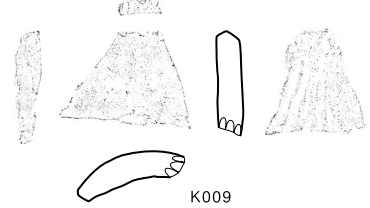
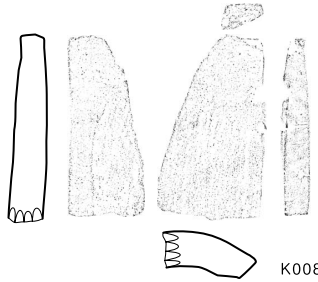
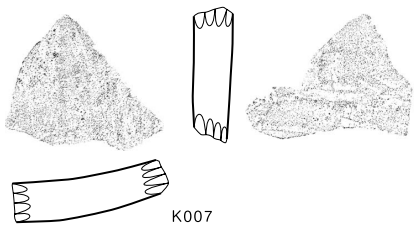
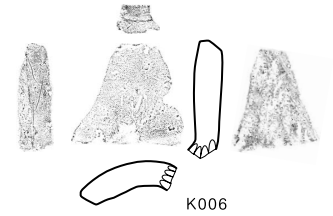


10号溝状遺構
 1: 灰黒褐色土。シルトブロックを少量含み、粘性つよく、細粒で緻密。しまりややあり。わずかにカーボンを含む。
 2: 灰黒褐色土。上層に白色粘土ブロックを混入。

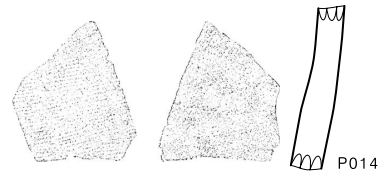
12号溝状遺構土層注記
 1: 灰黒褐色土。スコリア粒を少量含み、シルト粒をやや多量。細粒で緻密。やや粘性を帯び、しまる。
 2: 灰黒褐色土。1層に3~4cm大のシルトブロックを混入。
 3: 灰黒褐色土。1層に近いがシルト粒をほとんど含まない。1層よりしまる。若干シルトブロックを混入。
 4: 灰黒褐色土。3層に似る。シルトブロックは含まず、粘性つよい。

13号溝状遺構土層注記
 1: 灰黒褐色土。スコリア粒を少量含み、1cm大の黄色・白色のシルトブロックを少量含む。細粒で粘性つよく、しまりややあり。
 2: 灰黒褐色土。1層に似るが粘性非常につよい。
 3: 灰黒褐色土。1層より細粒で緻密。ブロックは含まず、粘性非常につよい。
 4: 灰黒褐色土。2cm大のシルトブロックを多量し、全体に粘土質。粘性一番つよい。

地業層土層注記
 1: 黄灰色土。地山ブロックをつきかためて整地した層で、ブロックは5cm以下。全体に硬くしまる。
 2: 暗赤褐色土。スコリア粒をわずかに含み、場所によりシルト岩ブロックをごくわずかに混入。やや粘性があるが、下層よりしまりなし。
 3: 灰黒褐色土。ローム粒及び粉末状ロームを少量含み、粘性つよく、ややしまる。色調は暗い。



0 10cm



0 10cm

第9図 6トレンチおよび10号溝状遺構

掘り込みは、4・5トレンチで確認されたのと同じ地業面から掘り込まれており、底面は平坦で、わずかに東側へと傾斜している。また、底面と平面から緩やかに立ち上がっている。

溝内の堆積土は、標準堆積土のI層に相当する灰黒褐色土が主体をなし、瓦などの遺物が多く混入している。

トレンチ中程で12号溝状遺構、東側で15号溝状遺構とほぼ直角に重複している。これら2つの溝状遺構は、6トレンチの南壁では確認されておらず、10号溝状遺構より北側に展開するものであることが判明した。堆積土の状況からは新旧関係はつかめず、3条の溝状遺構は一体の溝状遺構である可能性もある。しかし、今回の調査においては、全掘調査をしておらず情報が乏しいため、別物として取り扱った。

出土遺物は比較的認められたが、いずれも細片で時期が分かるようなものは図示した数点に過ぎなかった。

本址は、出土遺物の特徴や中世地業面から掘り込まれていることを考慮し、中世の溝状遺構であるものとする。またその性格については、おそらくは寺院内の区画および排水に使用されたものとする。

7トレンチ（第10図）

本トレンチは、体育館裏側のエリアに設定したトレンチのうち、最も南西に位置したトレンチで、5m×2mの規模のトレンチである。

設定当初、6mの長さまで掘削する予定であったが、排土の関係上1m短縮して調査を行なった。このトレンチにおいては、4～6トレンチの遺構確認面までと同様に深度0.80mまで掘り下げたが、安定した地山層のみで地業面や遺構は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示した他には数点ある程度である。P015はI層出土のかわらけである。口縁から体部にかけての1/5破片である。口径は(14.0)cm、高さは(2.8)cmを測る。ロクロ形成。P016はI層出土の甕形土器の胴部片である。厚さは0.4cmを測り、外面にハケ目、内面にはナデ調整が施されている。P017はI層から出土した須恵器の甕形土器の胴部片である。厚さは0.7cmを測り、外面はタタキ目、内面にはナデ調整が施され、外面に自然釉がかかっている。



第10図 7トレンチ出土遺物

8トレンチ（第11図）

本トレンチは、体育館裏側のエリアに設定したトレンチで、11m×2mの規模のトレンチである。

設計段階では長さは6mの予定であったが、他のトレンチで縮小したのに相当する面積を追加し、長さを11mとした。地表より0.90m掘削したところ地業面と考えられる平坦な黒褐色土層が検出された。しかし、他のトレンチで検出されたものに比べ明瞭ではなく、遺構確認は、安定した地山層まで掘り下げて行なった。その結果、3条の溝状のものが検出された。このうち、2条は隣のトレンチから続く溝

状遺構であることが判明しているが、残る1条の溝は、掘り込みも不明瞭で溝状遺構としては取り扱っていない。さらに、トレンチの南隅に、ピット状の掘り込みが検出されている。

・12号溝状遺構（第11図）

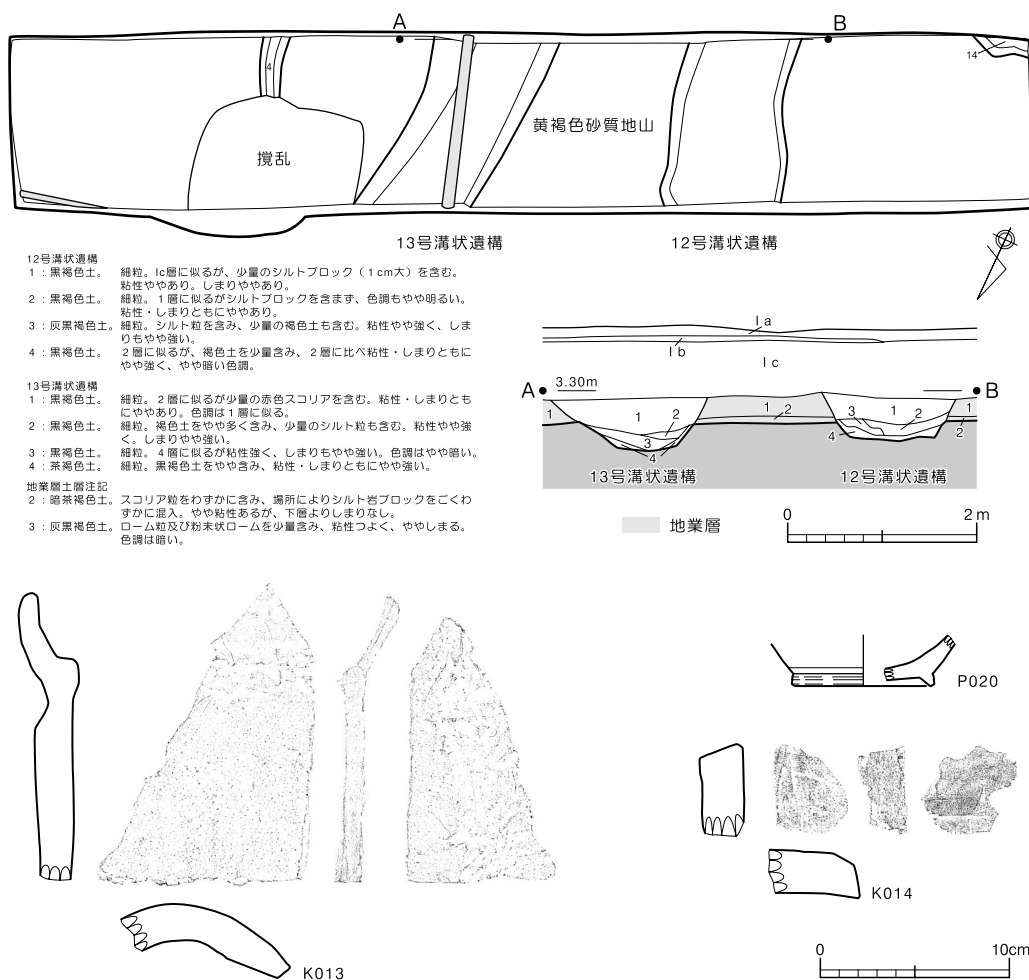
本址は、6トレンチから続く溝状遺構である。Ⅶ層にて確認され、溝幅は確認面で1.00～1.30m、溝底で0.90～1.10mを測る。掘り込みは、トレンチ断面で確認したところ、地業面より掘り込まれており、最大で0.48mを測る。底面は平坦で、立ち上がりとの境は明瞭で、やや角度をつけて掘り込まれている。

9トレンチではほぼトレンチの短軸方向に沿って走行していたが、本トレンチ内では、北側に方向をややかえて走行している。

堆積土は、Ⅰ層相当の黒褐色土で、堆積土の一部に細片の骨片が混じっていたのが確認されている。

出土遺物は少ない。P020は覆土中より出土した磁器碗である。底部の一部が残存しているに過ぎず、底径は（7.6）cm、高さは（2.7）cmを測る。内外面ともに施釉される。ロクロ成形で、付高台である。

本址は、出土遺物の特徴や中世地業面から掘り込まれていることを考慮し、中世の溝状遺構であるものとする。またその性格については、おそらくは寺院内の区画および排水に使用されたものとする。



第11図 8トレンチおよび12・13号溝状遺構

・13号溝状遺構（第11図）

本址は、6トレンチから続く溝状遺構である。Ⅶ層にて確認され、溝幅は確認面で1.10～1.20m、溝底で0.63～0.75mを測る。掘り込みは、トレンチ断面で確認したところ、地業面より掘り込まれており、最大で0.54mを測る。底面は平坦でかつ幅細で、立ち上がりとの境は明瞭で、12号溝状遺構より角度をつけて掘り込まれている。

本址も12号溝状遺構同様に、9トレンチではほぼトレンチの短軸方向に沿って走行していたが、本トレンチ内では、北側に方向をややかえて緩やかなカーブをとって走行している。

出土遺物は少ない。P164は覆土から出土したかわらけで口径は（12.5）cm、底径は（6.7）cm、高さ（3.2）cmを測る。ロクロ成形で、底面に糸切り痕は認められない。K013は覆土出土の丸瓦の破片である。厚さは2.1cmと厚く、端部のケズリは明瞭である。凸面に縄目痕が認められる。K014は覆土出土の平瓦の破片である。厚さは2.3cmと厚く、端部のケズリは明瞭である。

本址は、出土遺物の特徴や中世地業面から掘り込まれていることを考慮し、中世の溝状遺構であるものとする。またその性格については、おそらくは寺院内の区画および排水に使用されたものとする。

9トレンチ（第12・13図）

本トレンチは、体育館裏側のエリアのほぼ中央に設定したトレンチで、9m×1m、3m×1m、17.3m×1mの規模の3本のトレンチをY字状に配したトレンチである。南北方向に走るトレンチを9aトレンチとし、反時計回りに、9b・9cトレンチの呼称を称して調査を実施した。

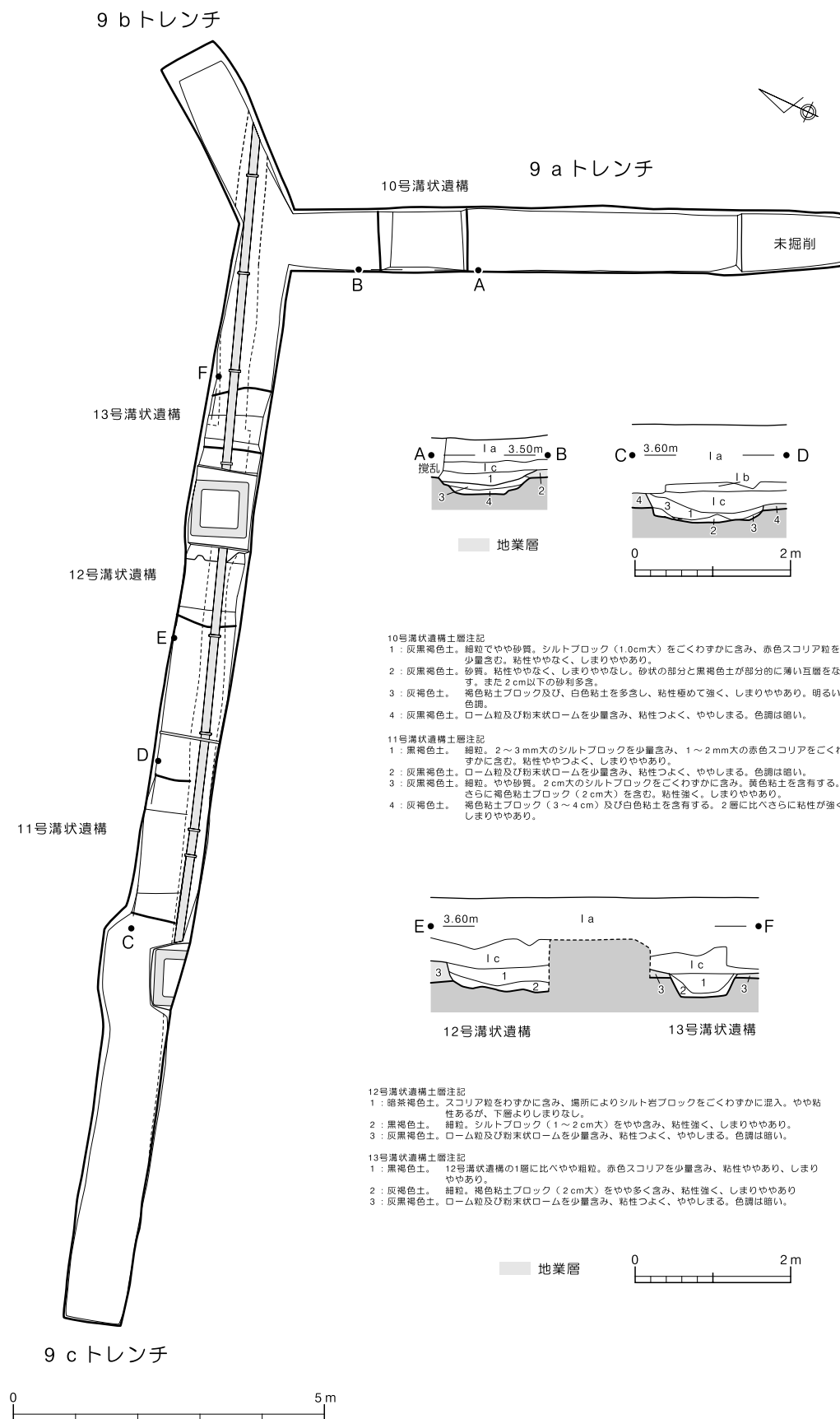
掘削したところ、以前に使用していた配管によってトレンチの大部分は攪乱されていた。このため、地山層までも約0.90mの掘削を行ない、遺構を確認した。しかし、配管は地山面より深くに敷設されており、その遺存状態は、他のトレンチに比べ、非常に悪いものであった。

9aトレンチの南側には、現在使用しているガス管が敷設されていることが分かった。このため、この部分については、それ以上掘削することは控え調査の対象外とした。9aトレンチからは、6トレンチから続く10号溝状遺構が検出され、9cトレンチからは、やはり6トレンチから続く、12・13号溝状遺構が検出された。ただし、大半が攪乱を受けて遺存状態はきわめて悪いものであった。また、このトレンチにおいてはさらに11号溝状遺構が検出されている。

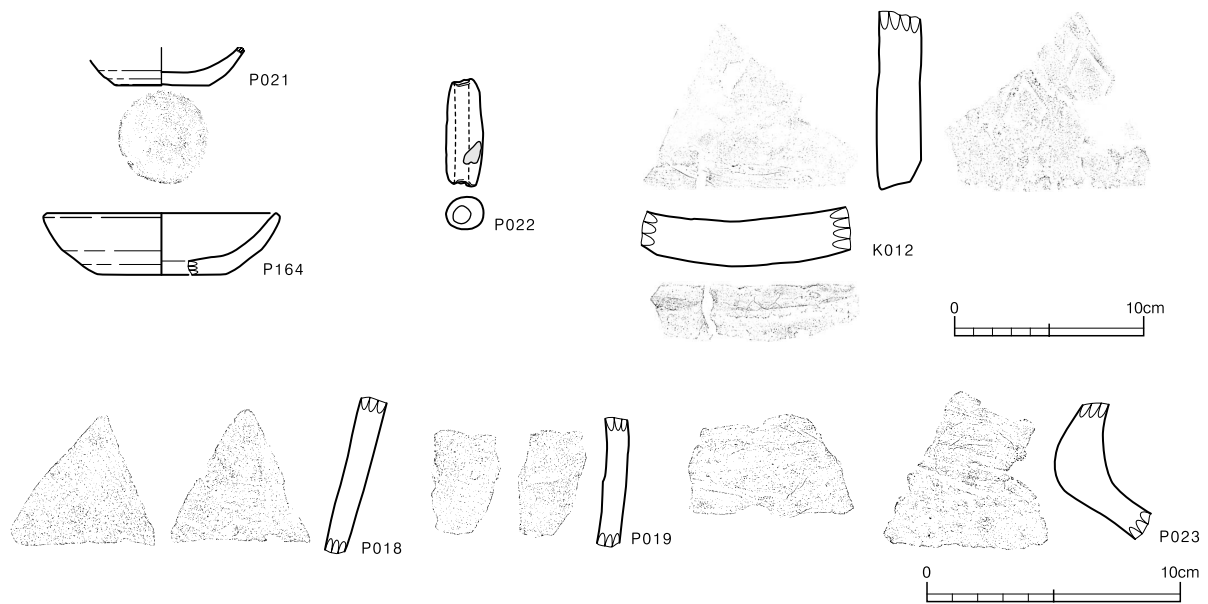
時期が分かるような遺物は少なく、図示し得るものはわずかに3点のみである。P021は9bトレンチのⅡ層中から出土したかわらけの口縁部欠損資料である。底径は5.0cmを測り、ロクロ成形で底部に回転糸切りを行なった後スノコ痕が付いている。P022は9cトレンチ精査時に出土した土錘である、略完形で、長さは（5.7）cm、幅（2.0）cm、重さ（19.3）gを測り、管状を呈している。P023は9aトレンチから出土した陶器の甕形土器である。厚さは1.25cmを測る。K012は覆土から出土した平瓦の破片である。厚さは2.3cmと厚く、端部のケズリは明瞭である。凸面に格子状のタタキ目が認められる。

・11号溝状遺構（第12図）

本址は、Ⅶ層にて確認された。溝幅は確認面で約2.25m、溝底で約1.20mを測る。掘り込みは、トレンチ断面で確認したところ、地業面より掘り込まれており、最大で0.40mを測る。12号溝状遺構と並走し、



第12図 9 トレンチおよび10~13号溝状遺構



第13図 9トレンチ出土遺物

底面は幅広く、立ち上がりへと緩やかに移行している。また、掘り込みは比較的垂直に近く掘り込まれている。

出土遺物は非常に少ない。P018は覆土から出土した須恵器の甕形土器胴部片である。厚さは1.0cmを測り、内外面にタタキ目を施す。P019も覆土から出土した須恵器の甕形土器胴部片で、厚さは1.0cmをはかる。外面にタタキ目を施す。

本址は、出土遺物の特徴や中世地業面から掘り込まれていることを考慮し、中世の溝状遺構であるものとする。またその性格については、おそらくは寺院内の区画および排水に使用されたものとする。

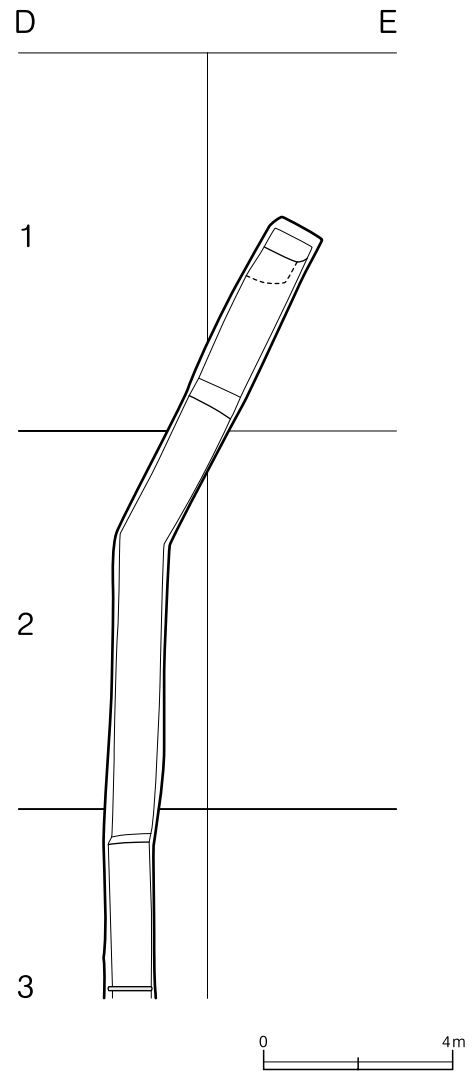
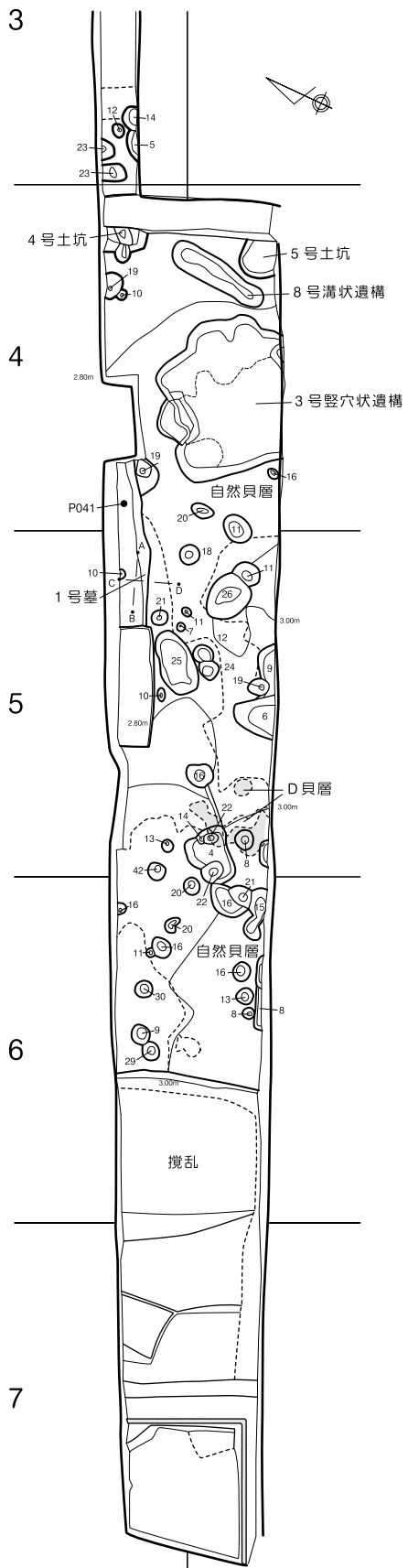
なお、位置的には9号溝状遺構の延長線上に位置していることから、その続きではないかとも考えたが、掘り込みの形状や造りなどに類似点を求めることができず、別物として取り扱った。

10トレンチ（第14・15図）

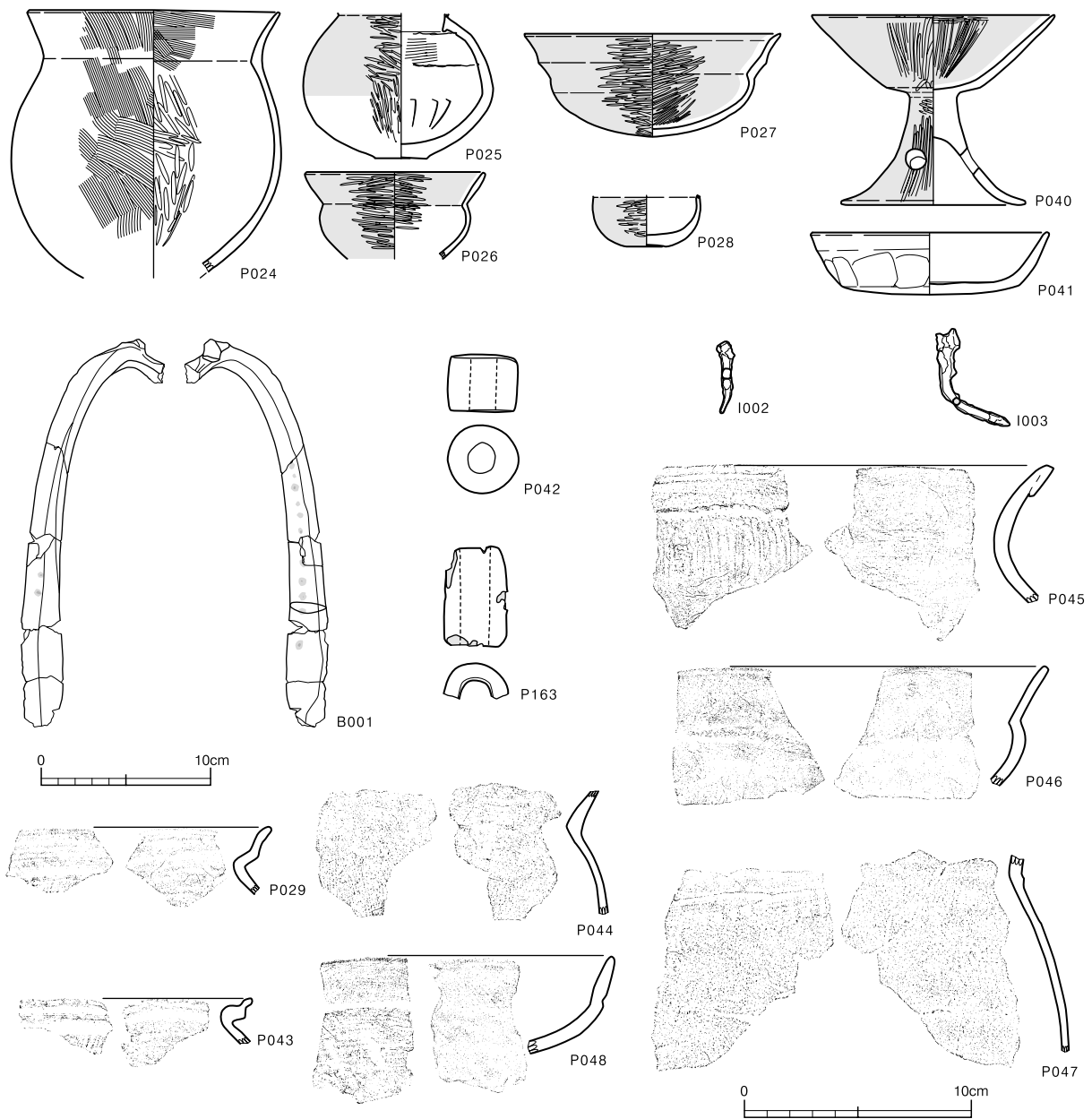
本トレンチは、校庭の校舎脇配管等に伴って東西方向に長く設置したトレンチで、今回の調査において一番まとまった面積を調査することができたトレンチである。西側より調査を始めたため、以前の校舎の基礎を撤去した跡などの攪乱によってほぼ全滅ではないかと思われた。しかし、トレンチの中程からは、地表より0.70mほど掘削したところで、地山層が検出された。この面を遺構確認面として調査を行なったところ、攪乱はあるものの遺構面に達しているものはごくわずかで、思いのほか遺存状態が良好であった。

東側の1m幅の細いトレンチ部分は砂質の地山層であるのに対し、3m幅の部分では地山層は自然貝層あるいは貝層混じりの砂質層となっていた。このため、遺構確認は困難をきわめ、また、掘削後の遺構の掘り込みは崩れやすいものであった。

トレンチ内からは、東側から4・5号土坑、8号溝状遺構、3号竪穴状遺構、1号墓、D貝層などのいくつかの遺構が検出されている。また、その他多くにもピットが検出されている。



第14図 10トレンチ



第15図 10トレンチ出土遺物

トレンチの堆積土を除去している最中に遺物包含層（標準堆積層Ⅱ層）から多くの遺物が出土している。P040はD～E-6～7グリッドから出土した高坏形土器土器である。坏部と脚部は残念ながら接合しなかったが、図上で復原している。口径は（14.5）cm、底径は（11.0）cm、高さ（11.3）cmを測る。外面および坏部内面にミガキ調整がなされ脚部内面はナデ整形が施される。脚台内面を除き赤彩が施される。脚部に3か所の透かし孔が穿たれる。この土器は、表土除去時に取り上げてしまったが、その出土位置からD貝層の一括遺物であった可能性が高い。P041はD-5グリッドから出土した約1/3残存の坏形土器である。口径は（14.2）cm、底径は（10.5）cm、高さ（3.6）cmを測る。外面の口縁はヨコナデ、体部～底部はケズリ、内面はナデ調整が施される。P042はD～E-4～5グリッドから出土した完形の土錘である。長さ3.4cmは、幅は4.2cm、重さ63.8gを測り、筒状を呈する。P043はD-3～4グリッドから

出土した甕形土器の口縁部片で、厚さは0.4cmを測る。口縁は断面がS字状を呈し、口縁がナデ、胴部がハケ目、内面はナデ調整が施される。P044はD～E-4～5グリッド出土の甕形土器である。胴部破片で、厚さは0.6cmを測り、外面がハケ目、内面は口縁がハケおよびナデ、胴部がナデ調整が施される。P045はD-3～4グリッド出土の壺形土器の口縁部片である。厚さは0.7cmを測り、内外面共に丁寧なミガキ調整が施される。P046はD～E-6～7グリッドから出土した壺形土器である。口縁部の破片で、厚さは0.5cmを測る。内外面ともにミガキ調整が施される。P047はD～E-4～5グリッド出土の甕形土器である。胴部破片で、厚さは0.6cmを測る。外面がハケ、内面がナデ調整。P048はD～E-4～5グリッドから出土した坏形土器の口縁部破片である。厚さは0.6cmを測り、外面の口縁部分はヨコナデで、体部はケズリ、内面はミガキ調整が施される。I003はD～Eグリッドは鉄釘で、長さ7.5cm、幅0.5cm、重さ8.7gを測る。全体的に浮錆が顕著で、断面は角張っている。B001はシカの肋骨を用いたト骨で、現存する長さは23cmである。両面に焼灼があり、片面では一部を削って平滑にし、その部分に焼灼している。

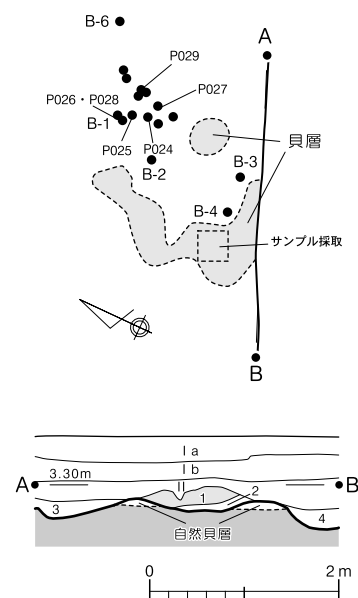
・D貝層 (第15・16図)

この貝層は、E-5～6グリッドに位置し、トレンチのやや南寄りで検出された。遺構確認時には、周辺の地山層を形成している自然貝層と混在し、かなり大規模な貝層であるものと思われた。このため、さらに周辺を精査したところ、自然貝層と貝塚を形成する層との間には黒褐色土が挟まっていることが判明した。

その結果、貝塚を形成する貝層は2か所に遺存していた。東寄りのものは径0.35mほどの円形を呈しており、西寄りのものは幅0.20～0.70mほどの帯状をなし、調査区境でL字状を呈している。貝層の厚さは、20cmほどで、ハマグリを主体とする破碎貝層となっている。この貝層は掘り込み内に堆積しているような状況ではなく、平坦な場所にこんもりと小山状をなしているような状況であった。

この2つの貝層の北側からは、土器がまとまって出土しており、その出土状況は土器を廃棄というよりも残置したものが散逸しているような状況を呈していた。また、この貝層の周辺からは土器類の他に人骨や獣骨などの骨類もやや多く確認されている。

出土遺物は比較的多く、表土除去作業時にもこの周辺では多くの遺物が確認されている。P024は甕形土器で胴部の1/4及び底部を欠損している。口径は(15.0)cm、最大径は(15.9)cm、高さ(16.0)cm、を測り、外面はハケ目、内面は口縁がハケ目、胴部にミガキの調整痕が施される。P025は小型壺形土器で、口縁部を欠損している。胴部最大径は11.3cmを測り、底径は3.0cm、高さは(8.6)cmを測る。外面が赤彩され、下半部は遺存が悪い。外面はミガキ、内面がナデ調整で、内面に二段の輪積痕が残る。P026は坏形土器で、上半の約1/6が残存しているものである。口径は(10.8)cm、高さは(5.1)cmを測り、外面から内面の口縁部分に赤彩。内外面ともにミガキ調整が



- 1: 貝層。完形貝（ハマグリ主体）及び破碎貝層、わずかに黒褐色土を混入。
- 2: 黒褐色土。細粒でやや砂質。破碎貝をわずかに混入。粘性ややあり。しまりややなし。黒味つよい。
- 3: 黒褐色土。混貝土層。破碎～完形貝を5～10%混入。破碎貝は大きめ、粘性・しまりは2層と同じ。
- 4: 黒褐色土。混貝土層。破碎貝は細かい。5～10%混入。粘性・しまりは3層と同じ。

第16図 D貝層

施される。P027は坏形土器で、口縁部の約1/2欠損する。口径は（15.2）cm、高さ（6.1）cmを測る。内外面ともにミガキ調整が施され、全面が赤彩される。口縁外部に段を有する。P028は埴形土器である。胴下半のみが残存しており、最大径は（6.4）cmを測り、底径は（2.4）cm、高さ（3.1）cmを測る。外面には赤彩が施され、外面がミガキ、内面は粗いミガキ調整。P029は甕形土器の口縁部破片で、厚さは0.4cmを測る。口縁はS字状を呈する。口縁はナデ、胴部にはハケ目調整が施される。

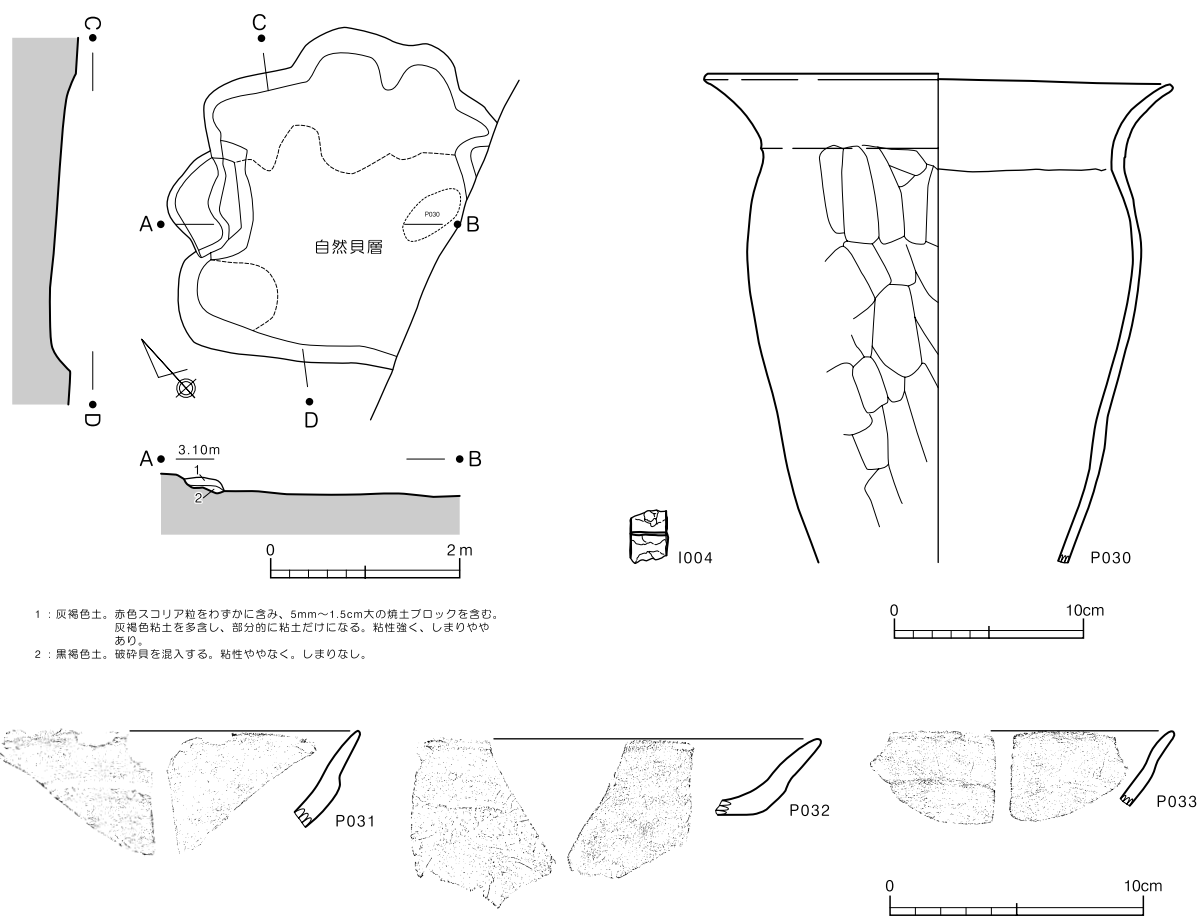
I002は貝層精査時に出土した鉄釘である。長さ4.2cm、幅0.5cm、重さ3.6gを測り、やや浮錆がみられるが、先端部は遺存状態良好である。断面四角い。

貝層中から遺物は確認できなかったが、土器集中箇所とは接近していることから、ほぼ同時期のものとする。

・ 3号竪穴状遺構（第17図）

本址は、D～E-4グリッドに位置し、北側で8号溝状遺構に隣接し、一部を調査区の南側へと延ばしている。

VII層上面で確認され、規模は検出部分で3.20×3.50mを測る。検出部から推察しすると、平面形状は



第17図 3号竪穴状遺構

方形を呈するものと思われる。

堆積土は、細粒で赤色スコリア粒およびシルト粒を含む黒味の強い標準堆積層Ⅱ層相当の黒褐色土で、自然堆積の様相を呈していた。

周壁は、ごくわずかに現存しているのみで、残存部分は自然貝層混じりの砂質層を掘り込んで構築され、緩やかに掘り込まれており、現存する最大壁高は0.20cmを測る。

床面は大半が自然貝層中に構築されている。貼床のように明瞭な床面ではなく、凹凸が激しく、遺存状態は悪い。床面には施設は確認されなかったが、ただし、西側の壁に沿って粘土質の灰褐色土が遺存していた。

出土遺物はあまり出土しておらず、図示し得るものはわずかであった。いずれも覆土中からの出土で、P030は底面から浮いた状態でまとまって出土している。P030は口縁1/3及び底部を欠損する甕形土器である。口径は(24.6)cmを測り、高さは(26.0)cmを測る。内外面ともに口縁部はヨコナデが施され、外面胴部はケズリ、内面はナデ調整が施される。P031～P033は坏形土器である。P031は口縁部片で、内面がナデ調整、外面は口縁がヨコナデ、体部がケズリ調整となっている。厚さは0.8cmを測る。P032は口縁部から底部にかけての破片で、厚さは0.7cmを測る。内面がナデ調整、外面は口縁がナデ、体部はケズリ調整が施されている。P033は口縁部片で、内外面ともミガキ調整が施される。厚さは0.5cmを測る。I004は覆土中から出土した鉄片である。長さ(2.8)cm、幅(2.0)cm、厚さは(0.15)cm、重さ(2.3)gを測る。浮錆が顕著である。

本址は、形状は竪穴住居址に似通っているものの、支柱穴などの施設が確認できなかったことから、竪穴状遺構として取り扱った。また、出土遺物からみて遺構の所産時期は8世紀の第2四半期と考える。

・4号土坑(第18図)

本址はD-4グリッドに位置し、北側を調査区外に延ばしている。また、東側は、表土除去時に土層確認のための試掘溝を設けたため、すでに存在していない。また、ほぼ同じ場所で上面からの攪乱を受け、南側と底面がわずかに遺存していたのみで遺存状態はきわめて悪い。

残存する開口部の規模は0.55×0.83mを測り、平面形状は残存部から推測して長方形を呈しているものと考えられる。底面は0.38×0.75mを測り、現存する掘り込みは最大で0.45mを測る。

堆積土はⅡ層相当の黒色土で、底面から浮いた状態で、わずかに貝を混入する薄い土層が確認された。

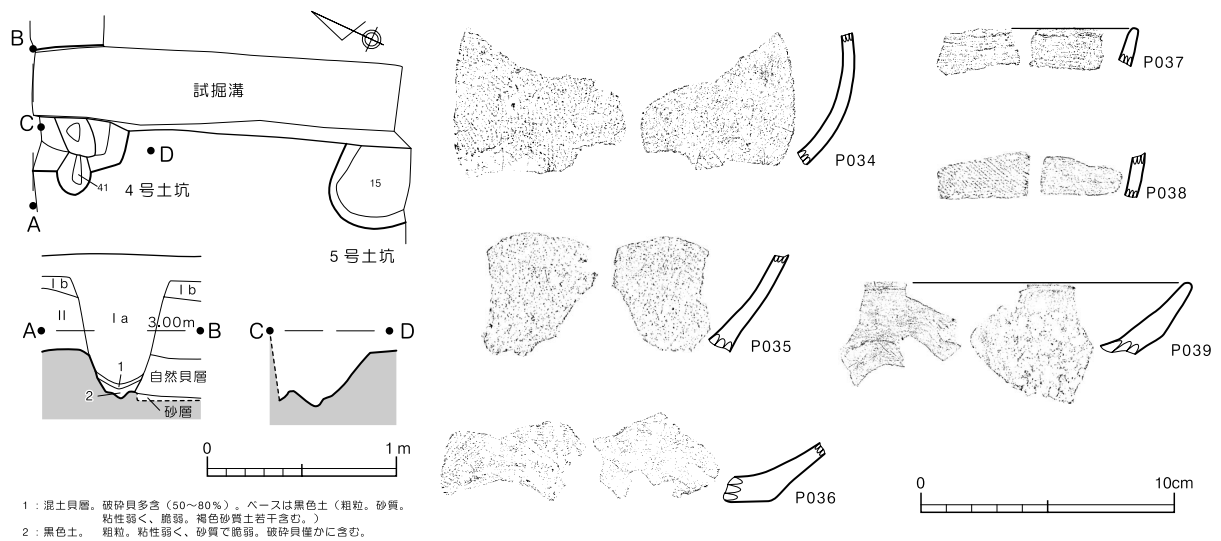
Ⅶ層から掘り込まれた周壁は、緩やかに底面へと移行し、わずかに検出された底面は、やや凹凸を呈し、検出部の中央にはピット状の浅い掘り込みを有している。

出土遺物は皆無であった。

本址の所産時期については、堆積土の特徴から中世までは下らないものとする。また、性格については遺存状態や遺構の全体を調査することができなかったために不明である。

・5号土坑(第18図)

本址はE-4グリッドに位置し、南側を調査区外に延ばしている。また、東側は、表土除去時に土層確認のための試掘溝を設けたため、すでに存在していない。



第18図 4号土坑・5号土坑

残存する開口部の規模は1.03×0.98mを測り、平面形状は残存部から推測して不整の楕円形を呈しているものと考えられる。底面は0.95×0.75mを測り、現存する掘り込みは最大で0.15mを測る。

堆積土はⅡ層相当の黒色土で、わずかに地山を形成する自然貝層の破片が混入した程度の単層の土層であった。

Ⅶ層から掘り込まれた周壁は、緩やかに底面へと移行し、わずかに検出された底面は、やや凹凸を呈していた。

出土遺物は皆無であった。

本址の所産時期については、堆積土の特徴から中世までは下らないものとする。また、性格については遺存状態や遺構の全体を調査することができなかつたために不明である。

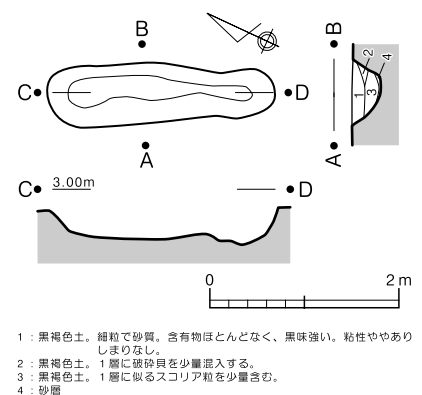
・ 8号溝状遺構 (第19図)

本址はE-4グリッド、3号竪穴状遺構遺構の東側に位置している。開口部の規模は、溝幅0.70×長さ2.42mを測り、長めの土坑状を呈している。底面は0.47×2.00mを測り、確認面はⅦ層で、現存する掘り込みは最大で0.38mを測る。

堆積土は含有物がほとんど含まれないⅡ層相当の黒褐色土で、自然堆積の様相を呈していた。

底面の面積は小さく底面は、北側は平坦なものの、南側ではやや乱れ、凹凸を呈している。出土遺物は皆無であった。

本址の所産時期については、堆積土の特徴から中世までは下らないものとする。また、性格については不明である。



第19図 8号溝状遺構

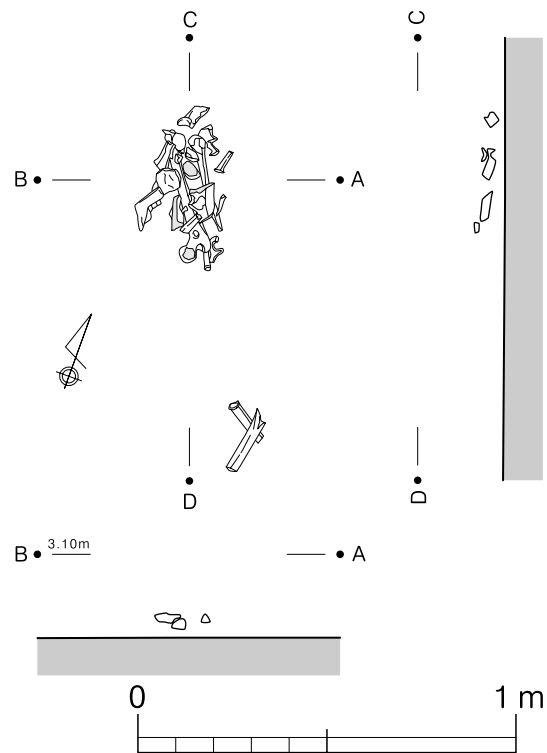
・1号墓（第20図）

本址はD-5グリッド、3号竪穴状遺構の北西側に位置している。表土除去時に検出され、径4.5×2.5mほどの範囲に人骨が集中していることが確認された。

人骨の周辺を精査の結果、骨の下は破砕貝の混じった地山層となっており、明瞭な掘り込みは存在していないことが分かった。

また、出土人骨についても遺存状態の良好な大振りなもの（下顎骨や大腿骨）を選んでまとめ置いたような状況が見受けられた。おそらく、別の場所に埋葬していたものを、この場所に移し替えたものではないかと考える。また、再葬にあたっては、ごく簡易的な方法で行なったため、掘り込み等が不明瞭であったと推測される。

副葬品や時期の分かる遺物等は確認できなかった。



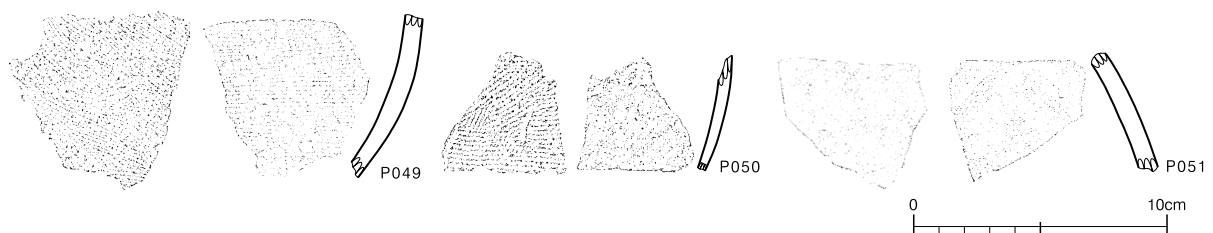
第20図 1号墓

11トレンチ（第21図）

本トレンチは校庭部分の最も東寄りに設定したトレンチで、18m×3mの規模のトレンチである。10トレンチを除く他のトレンチよりもまとまった調査面積があるため、遺構の検出される可能性が高いトレンチであった。しかし、遺構が確認できる深度以上の1.50mまで掘削調査を行なったが、トレンチ内は南側の一部を除き、すべて旧校舎によるものと思われる攪乱によって深くまで攪乱され、遺構はすでに存在していなかった。また、唯一地山面が検出された南寄りでもすでに遺構確認面よりも深くまで掘削を行なっているため、遺構を検出することはできなかった。

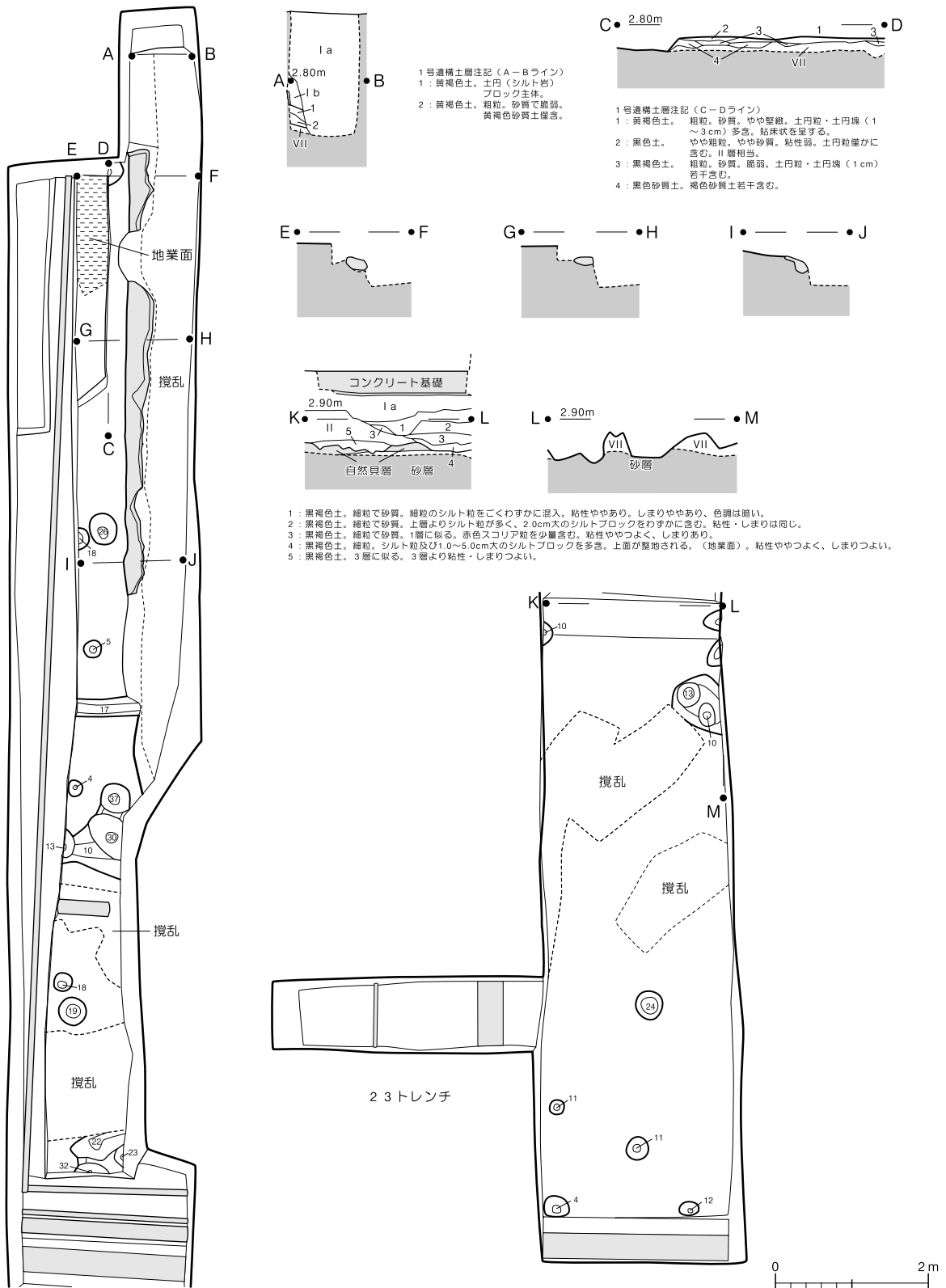
トレンチ内の堆積土はすべて二次堆積土で、大半が砂利であったため、トレンチ壁の崩落の可能性きわめて高く、調査終了後は教育委員会文化財課に確認の上ただちに埋戻しを行なった。

出土遺物は攪乱土中より数点出土しただけで、図示し得るものは3点のみであった。いずれも攪乱土中からの出土である。P049は甕形土器の胴部片で、内外面ともハケ目が施される。厚さは0.7cmを測る。P050は甕形土器の胴部片で、外面はハケ目、内面はミガキ調整が施される。厚さは0.5cmを測る。P051



第21図 11トレンチ出土遺物

は壺形土器の胴部片で、内外面ともにミガキ調整が施され、外面は赤彩される。厚さは0.8cmを測る。



第22図 12トレンチおよび1号遺構

12トレンチ（第22・23図）

本トレンチは校庭部分の南東寄り、現在の東漸寺の境内の脇に設定したトレンチで、東側の一部では配管に伴う部分だけの1m幅であるが、基本的には23.5m×2.50mの規模のトレンチである。

このトレンチにおいても、校舎関係の配管や基礎などでトレンチすべてを調査することができなかった。表土より1.10m掘削したところで、シルトブロックを用いた地業面が検出されたため、基本的にはこの面で遺構の確認を行なったが、トレンチの大半は遺構確認面よりも深くまで攪乱が達し、すでに遺構は破壊されてしまっていた。また、トレンチの西側においては地業面が確認されず、Ⅶ層となっている。

検出された遺構は、1号遺構のほかピットがいくつか検出されている。

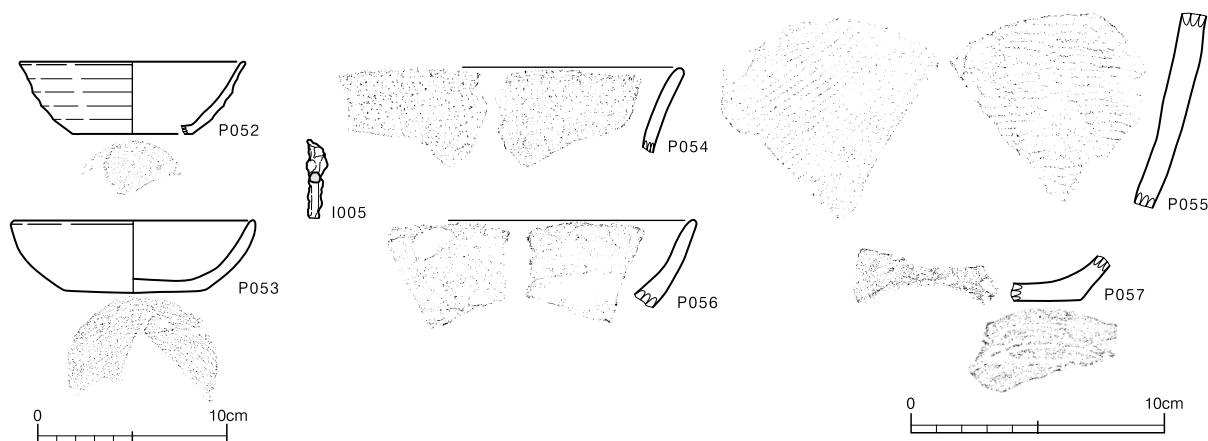
出土遺物は少ない。P054は、I-3・4グリッド出土の甕形土器の口縁部片である。厚さは0.5cmを測り、外面の口縁はヨコナデで、内面はハケ目調整が施される。P056・P057はトレンチ精査時に出土した遺物である。P056はかわらけの口縁部片である。厚さは0.9cmを測り、口縁部の内面にタール状のものが付着している。P057はかわらけの底部片で、厚さは0.7cmを測る。底面に糸切り痕が施されている。

・1号遺構（第22・23図）

本址はI-2グリッドに位置し、北側はガス管理設により調査できず、南側は攪乱によって破壊され遺存状態はきわめて悪い。

検出部での遺構の規模は、1.20×7.30mほどの範囲で、シルトブロックとシルト粒を突き固めた貼床状をなす部分と、シルトブロックのみで構成される部分とに分けられる。

貼床状の部分は、上面が平坦に整えられ地山との間には、黒色土が存在している。こちらは、上面に較べしまりはない。また、シルトブロックだけで構成されるものは、前者より一段低くなって造られている。上面が平坦に設えられており、この上面には貼床状の地業層は確認できなかった。また、南側に存在する攪乱が東西方向に走っているために同一方向に走るもののように見られる。ただし、さらに南側のトレンチ外（攪乱より南側）に延びていた可能性も十分に考えられる。ブロックの厚さは、10～18cmほどで、地山層の上に直に置かれている。また、小さめのブロックを用いてたたき締めて、全体が一つのブロックに見えるようにしている。



第23図 12トレンチ出土遺物

この遺構に直接伴う出土遺物は少なく、図示できたのは2点ほどであった。P052は、地業面上から出土した須恵器の坏形土器で1/8の残存である。口径は(12.0)cm、底径は(6.5)cm、高さは(3.8)cmを測る。体部に稜を有する。ロクロ水引き。底面に回転糸切り痕を有する。P053も地業面上から出土した遺物で、1/8のみ残存しているかわらけである。口径は(13.0)cm、底径は(7.2)cm、高さは(3.8)cmを測る。ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を有する。P055も地業面上から出土した陶器の甕形土器胴部片である。厚さは1.1cmを測り、外面は櫛描のちタタキ、内面には同心円状のあて具痕が施されている。

I005地業面上から出土した先端部が欠損している鉄釘である。長さ(4.2)cm、幅(0.5)cm、重さ(35)gを測り、全体的に浮錆著しい。断面が四角い形状をなす。

本址の構築時期は、9世紀代の須恵器等の遺物も出土しているが、出土遺物の割り合いから見て、そこまで遡らず中世になるものとする。また、その性格については、遺構のすべてを調査する事ができなかったため定かではないが、寺院の基礎などになる可能性を有している。

13トレンチ (第24図)

本トレンチは校庭部分の西寄り、南側校舎の脇に設定したトレンチで、校舎脇の配管に伴う調査トレンチである。配管の関係上4か所屈曲し、中央で16トレンチと重複している幅1m、全長26.30mほどのトレンチである。このトレンチでも、学校関連の現在使用している配管が調査中に検出され、この部分については、配管を毀損してしまうおそれがあるため、掘削調査を断念した。

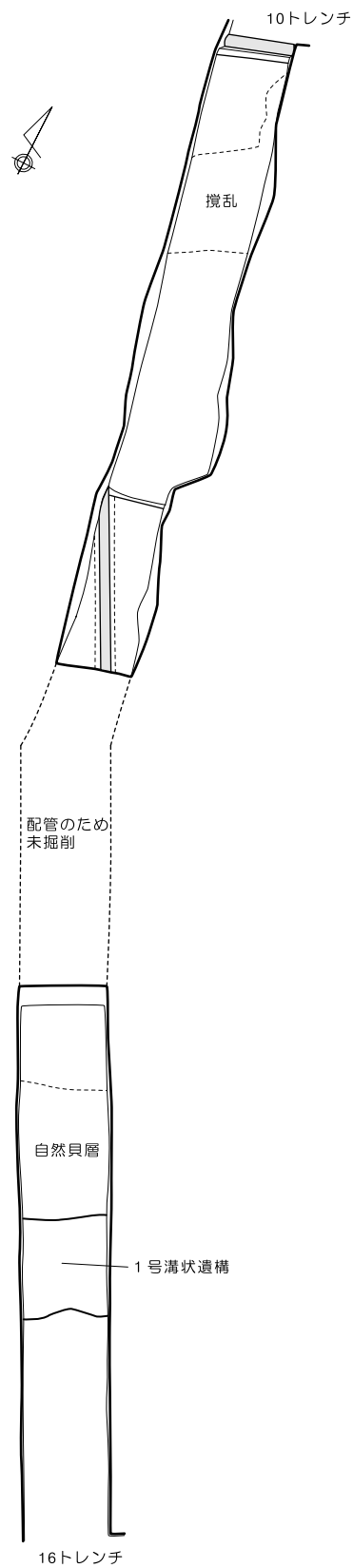
地表より0.50m掘削したところで地山を形成する砂質の黄褐色土が検出された。このため、この面において遺構確認を行なった。また、一部の場所では、自然貝層が検出されている。

調査の結果、1～3号溝状遺構が検出された。2～3号溝状遺構の記述については、17・18トレンチの部分で行なう。

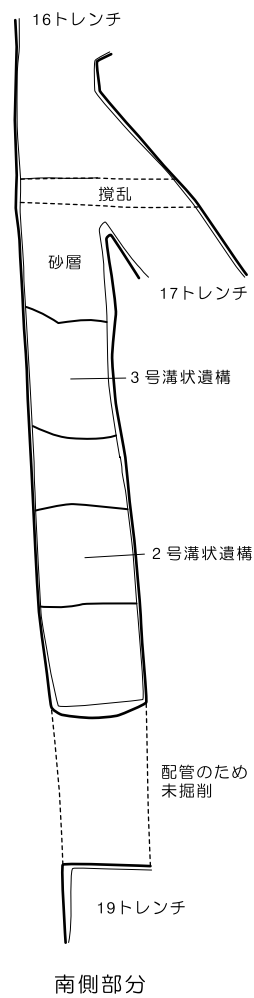
出土遺物は比較的多かったが、いずれも細片が主体となっており復原実測できたものは少ない。P063・P064は2号溝状遺構の覆土から出土した遺物である。P063は壺形土器の頸部片である。厚さは0.8cmを測る。折返し口縁で、口縁はヨコナデ、頸部はハケのちミガキ、内面にはミガキ調整が施される。P064は坏形土器の口縁部片である。厚さは0.6cmを測り、内外面に稜を有する。内外面ともにナデ調整が施されている。P065・P066は3号溝状遺構の覆土から出土した遺物である。P065は1/6残存のかわらけである。口径は(7.6)cm、底径は(4.4)cm、高さは(1.5)cmを測る。ロクロ成形。P066は完形の土錘である。長さは4.5cm、径4.5cm、重さ93.4gを測り、筒状を呈する。孔は中心よりややずれて穿たれている。P067はトレンチの西側から出土した管状を呈した土錘で、一部が欠損している。長さは(3.6)cm、径が(1.3)cm、重さは(4.9)gを測る。P068はI層中から出土した陶器の甕形土器の底部片である。厚さは1.6cmを測り、外面が鉄釉、内面が灰となっている。P069もトレンチの西側から出土した遺物で、陶器の挿鉢胴部片である。厚さは0.8cmを測り、破断面の二辺に顕著な研磨痕が認められることから、再利用しているものとする。

・1号溝状遺構 [A貝層] (第24・25図)

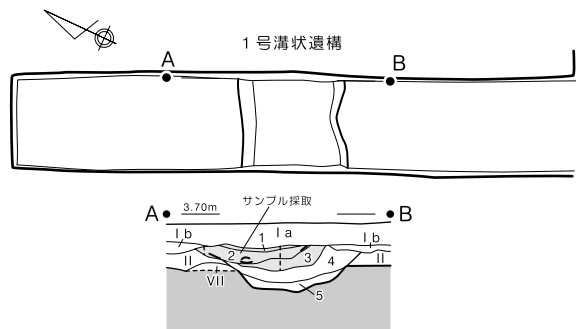
本址は、トレンチの中ほど、16トレンチと重複している部分の北側で検出された。検出部での溝幅は



北側部分



2・3号溝状遺構の詳細は別図



- 1: 黒褐色土。二枚貝の破砕貝の混った層。貝の混入率15~20%。細粒で粘性ややなく、しまる。
- 2: 純貝層。二枚貝の純貝層。遺物・獣骨含有。
- 3: 黒褐色土。二枚貝の破砕貝混入層。混入率5~15%。1層に比ししまりなく、やや脆弱。
- 4: 黒褐色土。やや砂質。粒状やや粗く、赤色スコリア粒をわずかに含む。粘性おとり、ややしまる。
- 5: 黒褐色土。4層に細粒の砂粒を混入。やや脆弱。



第24図 13トレンチ

1.00~1.13mを測り、溝底では0.77~0.92mを測る。トレンチの設定方向とは直行して走行し、ほぼ東西方向に走っており、15トレンチにおいてもこの溝の続きが検出されている。自然貝層混じりの地山層から掘り込まれ、最大深度は0.15mを測る。

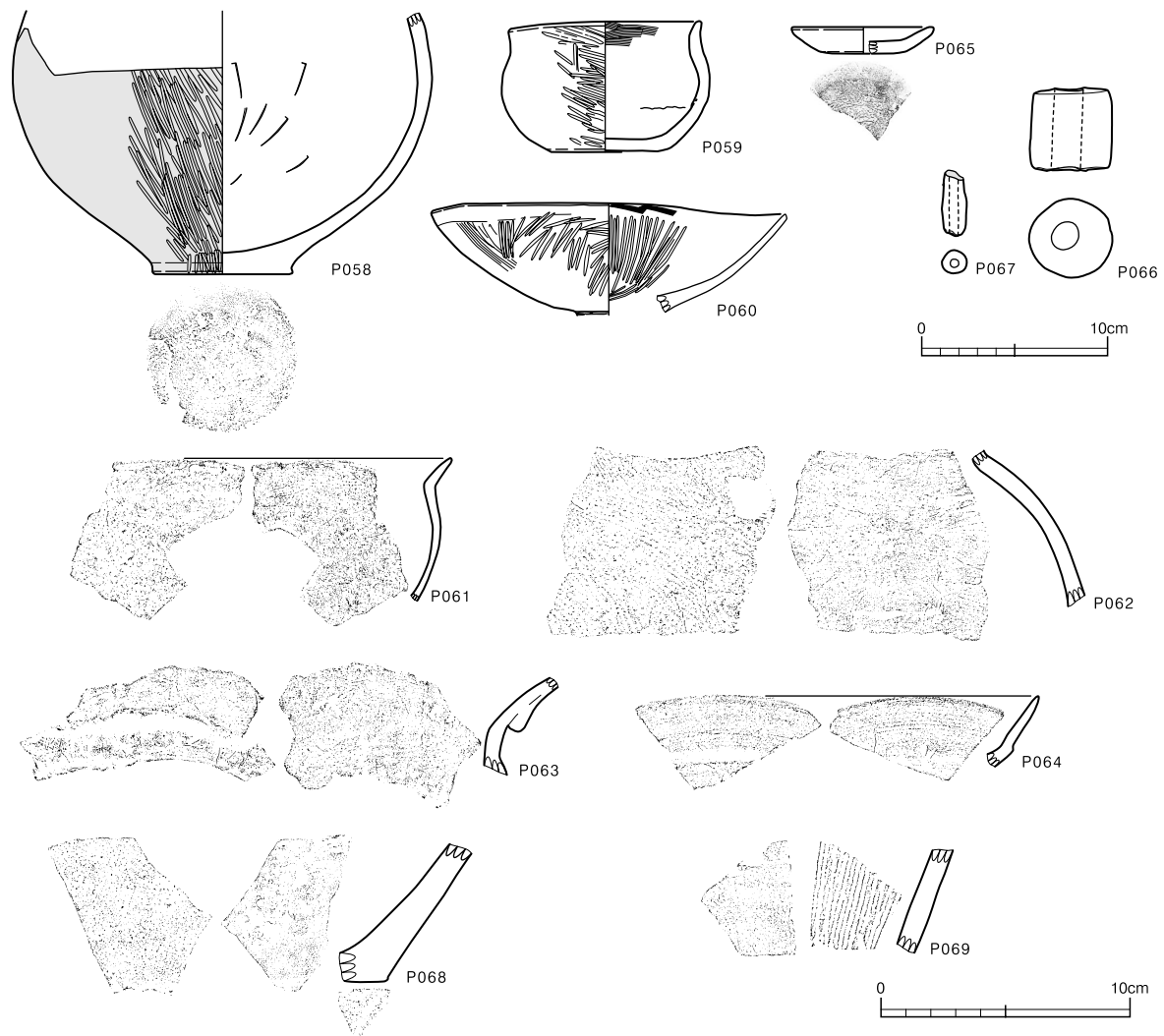
遺構確認面はⅦ層であったが、トレンチの断面観察によりⅡ層を掘り込んで造られているいることが分かった。溝内の堆積土は、標準堆積土のⅡ層に相当する黒褐色土で、溝底より浮いた状態で貝の二次堆積（A貝層）が確認されている。

溝底面は、やや凹凸があるものの全体的には平坦で、緩やかに立ち上がりへと移行している。

立ち上がりは、Ⅶ層部分ではやや角度を持って外側へ開き、それより上方ではさらに大きく外側へと開いている。

貝層は、溝状遺構の中の北寄りで検出された。溝底より20cmほど浮いた状態で検出され、ハマグリなどの2枚貝を中心とした純貝層と破碎貝層に大きく分層できる。貝層は、15cmほどの厚さで堆積しており、貝層中には土器の破片に混じって獣骨なども出土している。

出土遺物多く、その大半は破片資料であったが、中にはP058のように復原可能なものも含まれ、復原



第25図 1号溝状遺構 [A貝層] 出土遺物

実測できるものは3点であった。P058は壺形土器の底部の破片である。最大径は(22.5) cmを測り、底径は(7.5) cmを測る。現存する高さは(14.7) cmで、外面がミガキ、内面にヘラナデ調整が施される。また、外面に赤彩の痕跡が認められるが、遺存状態はきわめて悪い。P059は貝層中から出土した鉢形土器である。口縁部から胴部にかけて1/2が残存しており、口径は(10.6) cm、最大径が(11.3) cm、底径は(6.0) cm、高さ7.1cmを測る。外面ハケのち粗いミガキ、内面は口縁がハケ目、胴部は粗いミガキ調整となっている。P060は、覆土中から出土した高坏形土器である。脚部を欠損欠損し、口径は(19.4) cm、高さ(6.0) cmを測る。内外面ともミガキ調整が施されるが、器面はあれている。P061は、小形の甕形土器の口縁部破片である。厚さは0.4cmを測り、外面がナデ、内面の口縁はハケ、胴部にはナデ調整が施される。P062は、覆土出土の甕形土器胴部片である。厚さは0.6cmを測り、外面がハケ目、内面はミガキ調整となっている。

遺構の構築時期は、溝の上部に形成された貝層に含まれる遺物の大部分の特徴が古墳時代前期の遺物であったため、それ以前のものであると考える。また、貝層以下の堆積土についてもⅡ層相当の黒褐色土であることからみて、弥生時代から古墳時代前期にかけての構築物であるものとする。遺構の性格については、溝として使用していたものとするが、後出の5号溝状遺構との関連で、あるいは、その他の性格を持つものである可能性も有している。いずれにしても、溝状遺構の機能が失われ埋没していく段階で、溝状の窪みに貝等を廃棄した結果、貝層が形成されたことは間違いない。

14 トレンチ (第26図)

本トレンチは校庭部分の西側に寄った13トレンチのすぐ東側に東西に向けて設定したトレンチで、トレンチの規模は5×1 mとなっている。トレンチの掘削は西側より行なった。地表より0.70m掘削したところで地山を形成する黄褐色砂質層が検出されたため、この面で遺構を確認することとした。その結果、中央において1号竪穴状遺構が検出された。また、他のトレンチと同様に現在使われていない水道管が1か所に検出されたが、その他の攪乱は認められなかった。

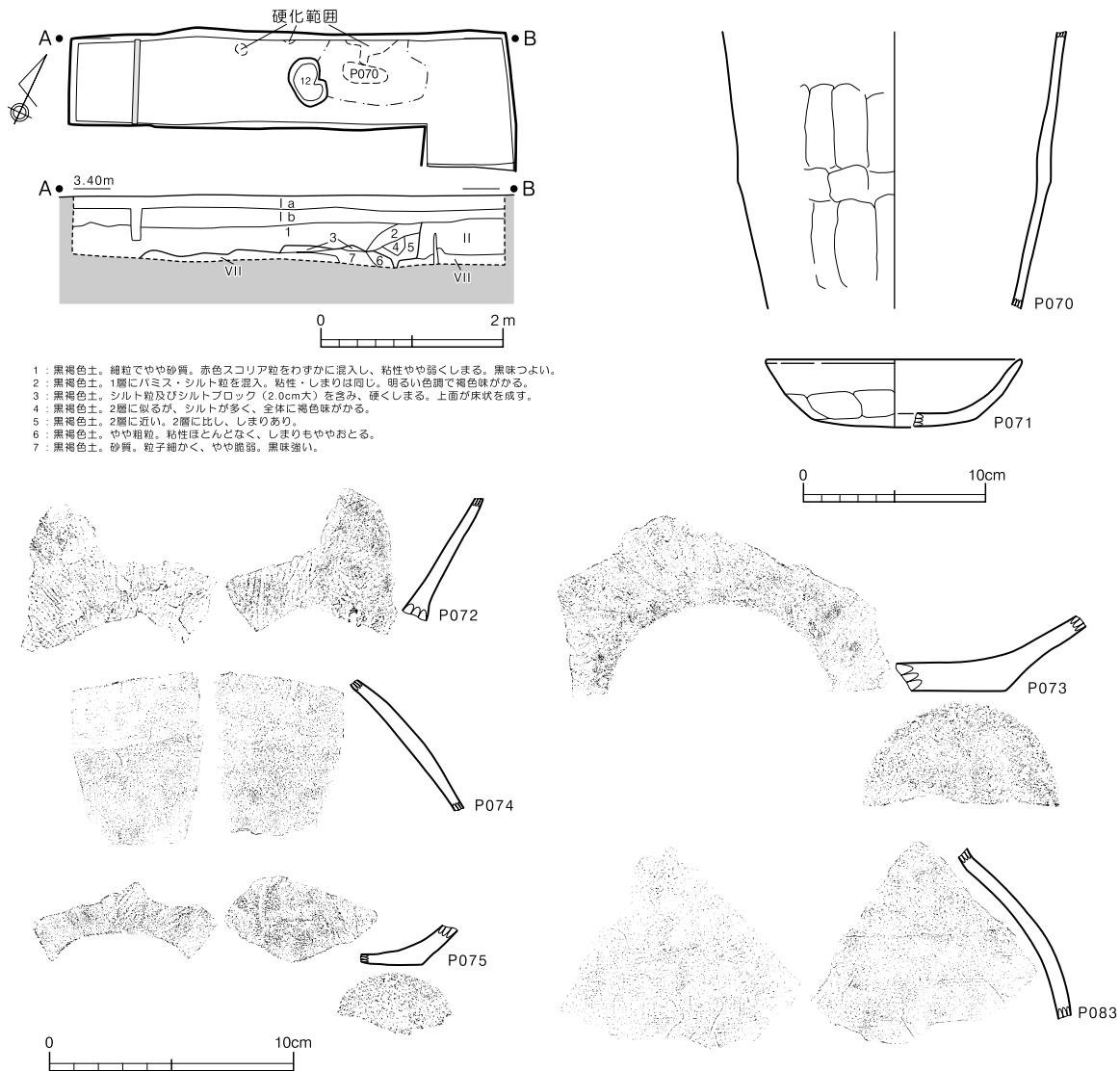
・ 1号竪穴状遺構 (第26図)

本址はトレンチのほぼ中央で検出された。検出部での規模は3.20mほどで、南北方向はいずれもトレンチの外側へと続いている。Ⅶ層中において確認されたが、精査の結果、遺構の掘り込みはⅦ層すれすれまでしか達しておらず、すでに底面の形成土に使用された黒褐色土が残存しているに過ぎず、ごく一部に硬化面が検出されたのとどまった。

堆積土はⅡ層相当の黒褐色土で、2層中に被熱シルトブロックを混入していたほか、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘り込みは標準堆積層のⅡ層中に構築されていることが判明した。トレンチの壁面の土層観察によって、掘り込みは0.40mほどであることが確認されている。

底面は、Ⅶ層上面に構築されている。一部硬化している部分が確認されたものの、大半が、ややしまりがなく、精査時にはすでに飛ばしてしまった状況であった。また、一部にピット状の落ち込みが確認されたが、掘削したところごく浅いもので、柱穴などのものではなく荒掘りの痕跡と思われる。



第26図 14トレンチおよび1号竪穴状遺構

出土遺物はさほど多くはないが、底面と同じ高さからP070などの図示し得る遺物が出土している。P070・P075は遺構底面直上から出土したもので、その他はいずれも覆土中からの出土遺物である。P070は甕形土器の胴部片である。最大径は(20.0)cm、高さは(15.0)cmを測る。外面がケズリ、内面がナデ調整で、器面は粗い。P071は1/3残存の坏形土器である。口径は(14.2)cm 底径は(9.0)cm、高さは(3.7)cmを測る。口縁及び内面ナデ、体部および底面はケズリ調整。P072は甕形土器の胴部片で、厚さは0.7cm測る。調整は、外面がハケ目で、内面がミガキとなっている。P073は壺形土器の底部片である。底径は(8.0)cm、高さは(3.1)cmを測る。外面にミガキ調整が施される。P074は甕形土器の胴部片である。厚さは0.6cmを測り、器面調整は外面がミガキ、内面がナデとなっている。P075は壺形土器の底部片で、底径が(5.2)cm、高さは(1.6)cmを測る。外面がケズリ、内面がナデ調整となっている。P083は甕形土器の胴部片で、厚さは0.6cmを測る。外面がハケ目、内面にナデ調整が施される。

本址の構築時期については、出土遺物の特徴が古墳時代前期と奈良時代の2つの時期に分かれている。

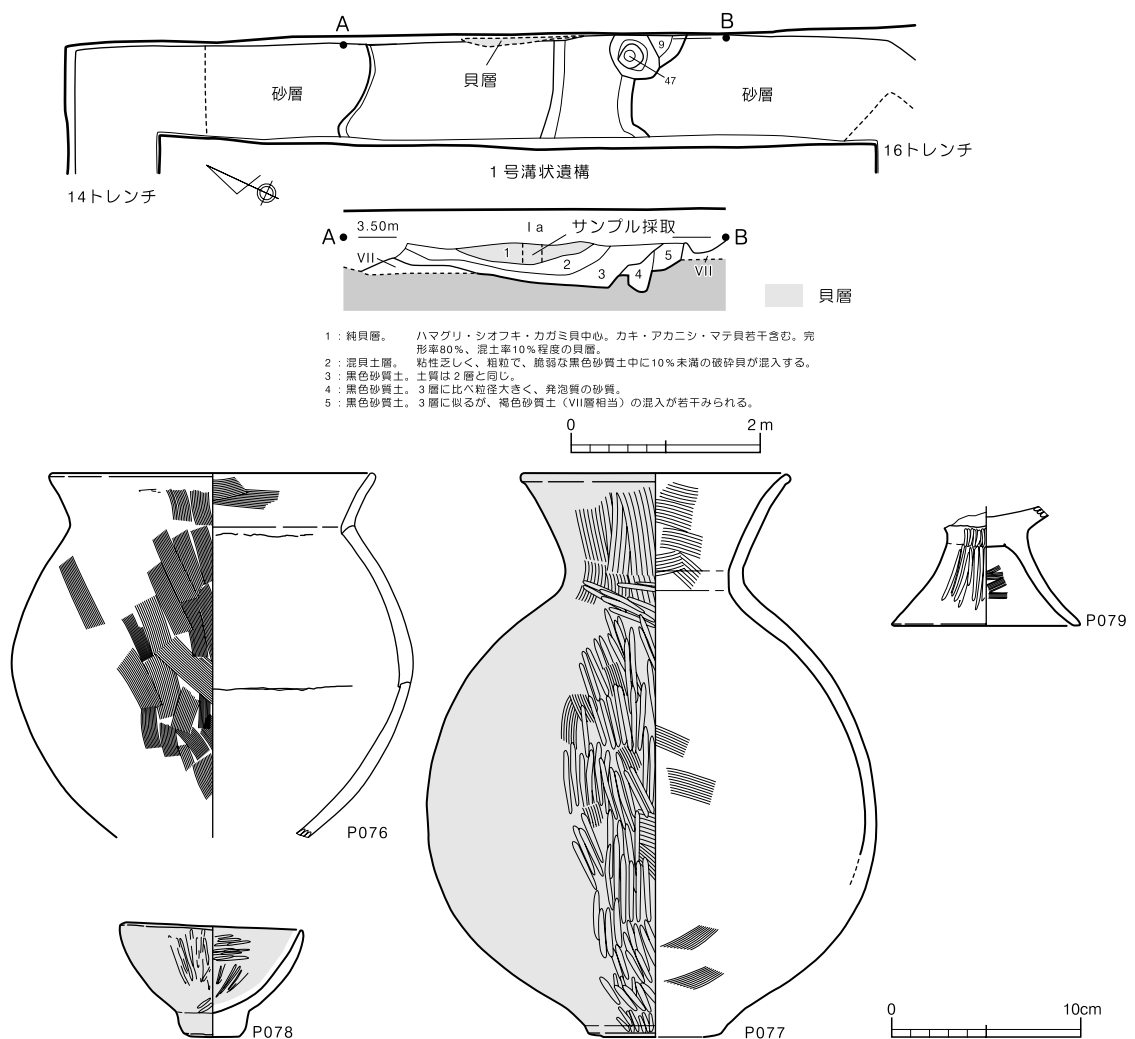
しかしながら、P070など底面直上遺物が存在することから、8世紀の第2四半期の所産と考えたい。また遺構の性格については、掘り込みの規模等からみて堅穴住居址になるものとも推測できるが、支柱をなすピットや炉址やカマドなどの施設も確認できなかったことから堅穴状遺構として取り扱うこととした。

15トレンチ（第27図）

本トレンチは、校庭部分の西側に寄ったトレンチで、13トレンチと併行し、南北方向にむいて設定したものである。北側で14トレンチ、南側で15トレンチと接している。トレンチの規模は7.5×1mとなっている。

14トレンチに引き続いて調査したため、地表からの掘削深度は0.50mで、遺構確認面は地山層のⅦ層となっている。しかし、このトレンチ内の地山は、黒色の砂層となっている。

調査の結果、13トレンチで検出された1号溝状遺構〔貝層番号はB〕の続きおよびそれと重複してピットが2つ検出された。



第27図 15トレンチおよび1号溝状遺構〔B貝層〕

・ 1号溝状遺構 [B貝層] (第27図)

本址は、トレンチの中ほどで検出された。検出部での溝幅は2.80～3.30mを測り、溝底では0.70mほどを測る。トレンチの設定方向とは直行して走行し、ほぼ東西方向に走っており、13トレンチにおいてこの溝状遺構の続きが検出されている。このトレンチでは、表土からの攪乱が地山層にまで達していることから、遺構上方の様子を確認することはできなかったが、地山砂層から掘り込まれ、最大深度は0.45mを測る。

溝内の堆積土は、標準堆積土のⅡ層に相当する黒褐色土で、溝底より浮いた状態で貝の二次堆積 (B貝層) が確認されている。

溝底面は、やや平坦で若干南側へと傾斜しており、立ち上がりとの境比較的明瞭で、やや角度を持って立ち上がり、一旦テラス状に平坦になってから再び開きながら立ち上がる。

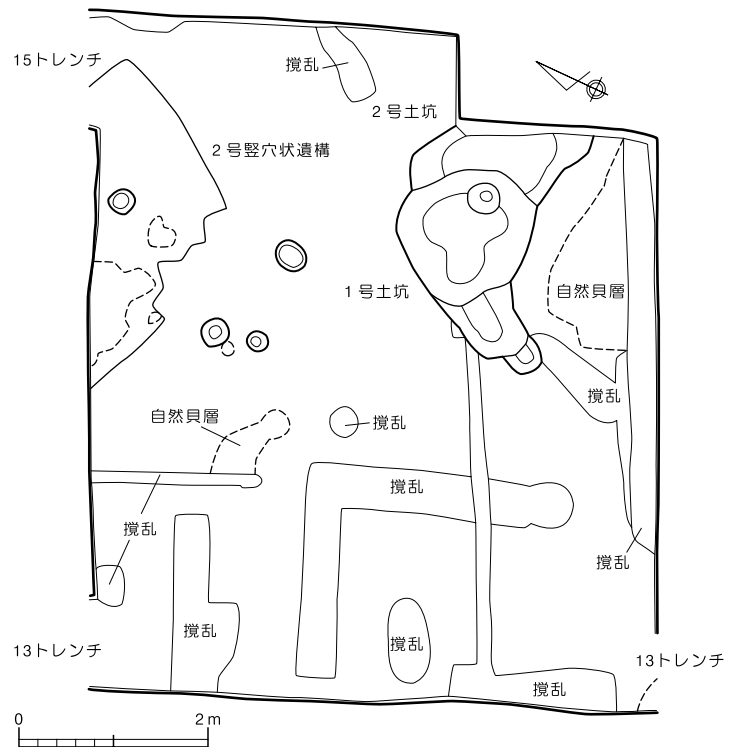
貝層は、溝状遺構中ではやや北寄りで検出された。溝底より0.20cmほど浮いた状態で検出され、ハマグリなどの2枚貝を中心とした純貝層と破碎貝層に大きく分層でき、カガミガイの混入が目立っている。

貝層は、0.20cmほどの厚さで堆積しており、貝層中には数多くの土器破片の混入がみられた。

出土遺物多く、その大半は破片資料であったが、13トレンチに較べ復原可能なものがおおく、4点の遺物が復原できた。P078を除き貝層中からの出土で、P078は溝状遺構の覆土からの出土となっている。P076は胴部上半約1/4残存の甕形土器である。口径は (17.2) cm、胴部最大径が (21.2) cm、高さ (19.4) cmを測り、器面調整は外面がハケ目、内面の口縁がハケナデ、胴部がヘラナデとなっている。P077は壺形土器である。口縁部から胴部にかけて約1/2が残存しており、口径は (14.5) cm、最大径が (24.0) cm、底径は (7.2) cm、高さが (29.8) cm

を測る。外面の口縁がハケ目、胴部はミガキ、内面はハケのちミガキの調整を施している。P078は口径が (9.8) cm、底径が (3.0) cm、高さ (5.8) cmを測る略完形の小型の甕である。内外面ともに赤彩が施され、器面調整はともに粗いミガキとなっている。底面は厚い。P079は台付甕形土器の脚台片である。接脚径は (10.0) cmを測り、高さは (6.3) cmを測る。器面調整は、外面がハケのちミガキ、内面はナデとなっている。

遺構の時期・性格については、13トレンチで検出された遺構の続きであるものと考え。また、貝層の形成についても同様のものと考え。



第28図 16トレンチ

16トレンチ（第28図）

本トレンチは校庭部分の西寄りに設定したトレンチで、設計当初は、ひと回り小さな範囲のものであった。しかしながら、工事で設置する施設のためには当初の調査区では足りず、さらに大きく掘削する必要があるということが判明し、急遽、範囲を拡大して調査を実施することとなった。トレンチの規模は、6 m×6 mの方形、4 m×1 mの長方形が繋がった不整形な形状となっている。

地表から約0.50mで地山層のⅦ層に達した。このトレンチでも、配管等の現代の攪乱が激しく及んでおり、また、表土直下が地山層（砂層）という状況であったため、遺構確認は困難であった。

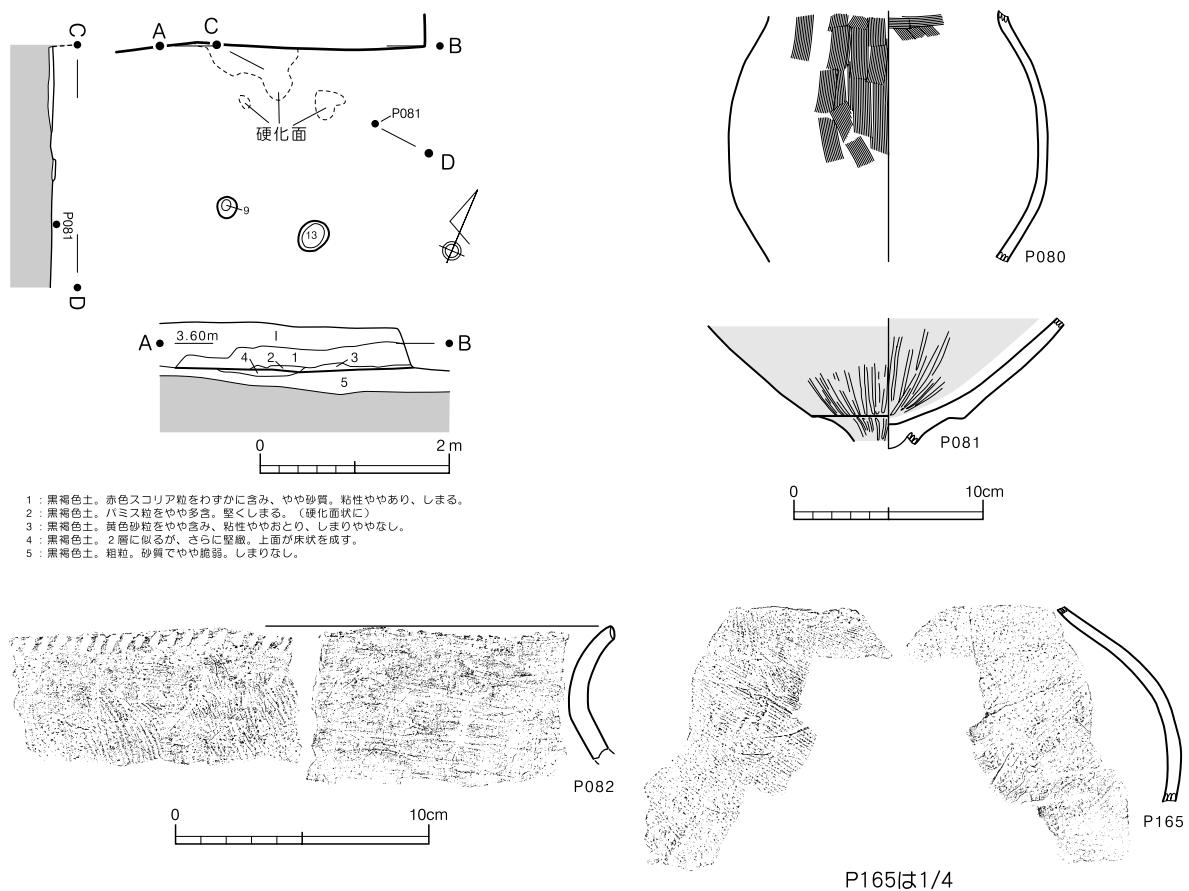
精査の結果、2号竪穴状遺構と1・2号土坑の3基の遺構および数穴のピットが検出された。

・2号竪穴状遺構（第29図）

本址はトレンチの北壁下で検出され、遺構の半分近くをトレンチの外側へと延ばしている。検出部での規模は2.10×2.30mほどとなっている。

南北方向はいずれもトレンチの外側へと続いている。Ⅶ層中において確認されたが、精査の結果、遺構の掘り込みはⅦ層すれすれまでしか達していないうえ、遺構堆積土と底面形成土が非常に似通っていたため、遺構精査時にはすでに硬化面の一部が遺存していたに過ぎなかった。

堆積土はⅡ層相当の黒褐色土で、いずれも自然堆積の様相を呈していた。



第29図 2号竪穴状遺構

立ち上がりは、トレンチ北壁においては確認されておらず、不明である。

底面は、Ⅶ層上面に構築されている。一部硬化している部分の確認されたものの、大半が、ややしまりがなく、精査時にはすでに飛ばしてしまった状況であった。また、一部にピット状の落ち込みが確認されたが、掘削したところごく浅いもので、柱穴などのものではなかった。

出土遺物はさほど多くなく、底面に接してP081が出土したほか、図示したもの以外はごく少量の遺物しか確認されていない。P080は覆土から出土した甕形土器の胴部片である。復原した最大径は（17.0）cmを測り、高さは（13.3）cmを測る。外面および内面上部はハケ目調整で胴部内面はヘラミガキ調整を施す。P081は底面に接して出土した高坏形土器の坏部である。残存部径は（19.0）cm、高さ（6.9）cmを測る。内外面ともミガキ調整が施され、遺存状態が悪いものの赤彩が施されていた形跡が確認されている。P082は覆土出土の甕形土器の口縁部片である。口唇部に刻みを入れ、外面がハケ目、内面はミガキ調整が施される。P165も底面直上出土の遺物で、甕形土器の胴部破片である。厚さは0.7cmを測り、外面がハケ目、内面は上部がハケ目、胴部はミガキ調整が施される。

本址の構築時期については、出土遺物の特徴から、古墳時代前期の所産であるものと考えられる。また、遺構の性格については、掘り込みの規模等から見て堅穴住居址になるものとも推測できるが、支柱をなすようなピットや炉址やカマドなどの施設も確認できなかったことから堅穴状遺構として取り扱うこととした。

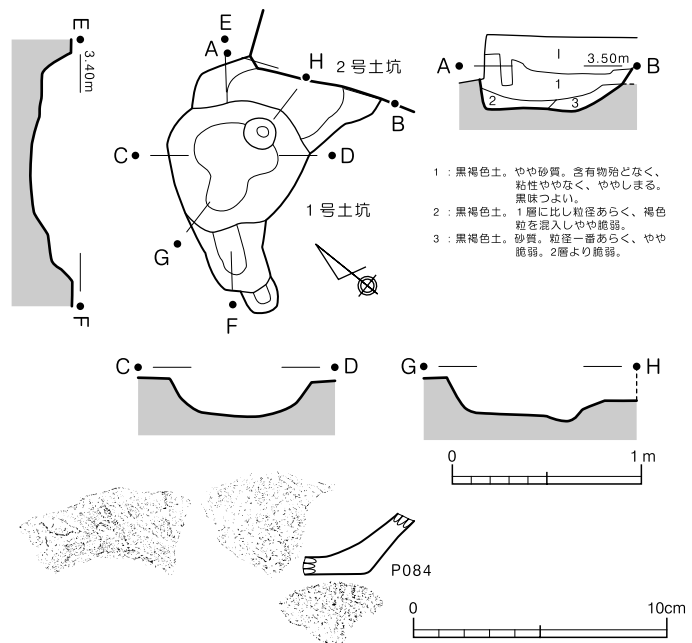
・ 1号土坑（第30図）

本址は、トレンチの南東側で重複して検出された遺構で、東側で2号土坑と重複している。Ⅶ層の地山砂層において検出され、現存する規模は、開口部で0.70×0.68m、坑底で0.42×0.32mを測り、平面形状は隅丸方形に近い形状を呈している。現存する掘り込みは、最大で0.49mを測る。

堆積土はⅡ層相当の黒褐色土で、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

周壁はⅦ層中に構築され、やや角度を持って掘り込まれる。この辺りの地山は砂層であるため、非常に脆く、乾燥するとすぐに開口部付近から崩れてしまうものであった。

坑底もⅦ層中に構築されるが、坑底付近のⅦ層は砂質の黄褐色土層であったため、周壁に比べ遺存状態はよく、また、乾燥による変化も周壁ほど見られなかった。平坦に造られた坑底はほぼ平坦で、わずかに中央に向かって傾斜しているものであった。また、周壁との境目は緩やかであった。



第30図 1・2号土坑

東隅にピット状の窪みが確認されたが、これはごく浅いもので、直接関係するものかどうかは不明である。また、南西隅にも張り出しが確認されたが、こちらについてもピット同様に本址に直接関係するものかは不明である。

出土遺物は非常に少なく、図示できるものはP084の1点のみであった。P084は覆土から出土した甕形土器の底部片で厚さは0.9cmを測る。内外面ともにナデ調整が施される。

遺構の所産時期は、堆積土の観察および出土遺物から、古墳時代前期であると考え。また、2号土坑との新旧関係については、浅い掘り込みの2号土坑の底面の続きが本址に残存していなかったことから、本址の方が新しいものと考え。性格については不明である。また、本址の調査中に北周壁に獣骨状のものが埋まっているのが確認された。

本址の調査終了後にこれを追って掘削してみたところ、長さ2.15m、直径0.12mほどの規模の弓状に沿った巨大な骨状のものが判明した。そこで、神奈川県立生命の星地球博物館の学芸員に見てもらったところ、ヒゲクジラ類の下顎骨であることが判明した。なお、この獣骨については、貴重な出土例であるために、同博物館の学芸員によって取りあげを行なっていただいた。

・2号土坑（第30図）

本址は、トレンチの南東側で重複して検出された遺構で、西側で1号土坑と重複している。Ⅶ層の地山砂層において検出され、現存する規模は、開口部で2.10×1.15m、坑底で1.60×0.85mを測り、平面形状は隅丸の長方形を呈している。現存する掘り込みは、最大で0.35mを測る。

堆積土はⅡ層相当の黒褐色土で、いずれも自然堆積の様相を呈していた。

周壁はⅦ層中に構築され、やや角度を持って掘り込まれる。この辺りの地山は砂層であるため、非常に脆く、乾燥するとすぐに開口部付近から崩れてしまうものであった。

坑底もⅦ層中に構築されるが、坑底付近のⅦ層は砂質の黄褐色土層であったため、周壁に較べ遺存状態はよく、また、乾燥による変化も周壁ほど見られなかった。平坦に造られた坑底は、ほぼ平坦で周壁との境目は緩やかであった。

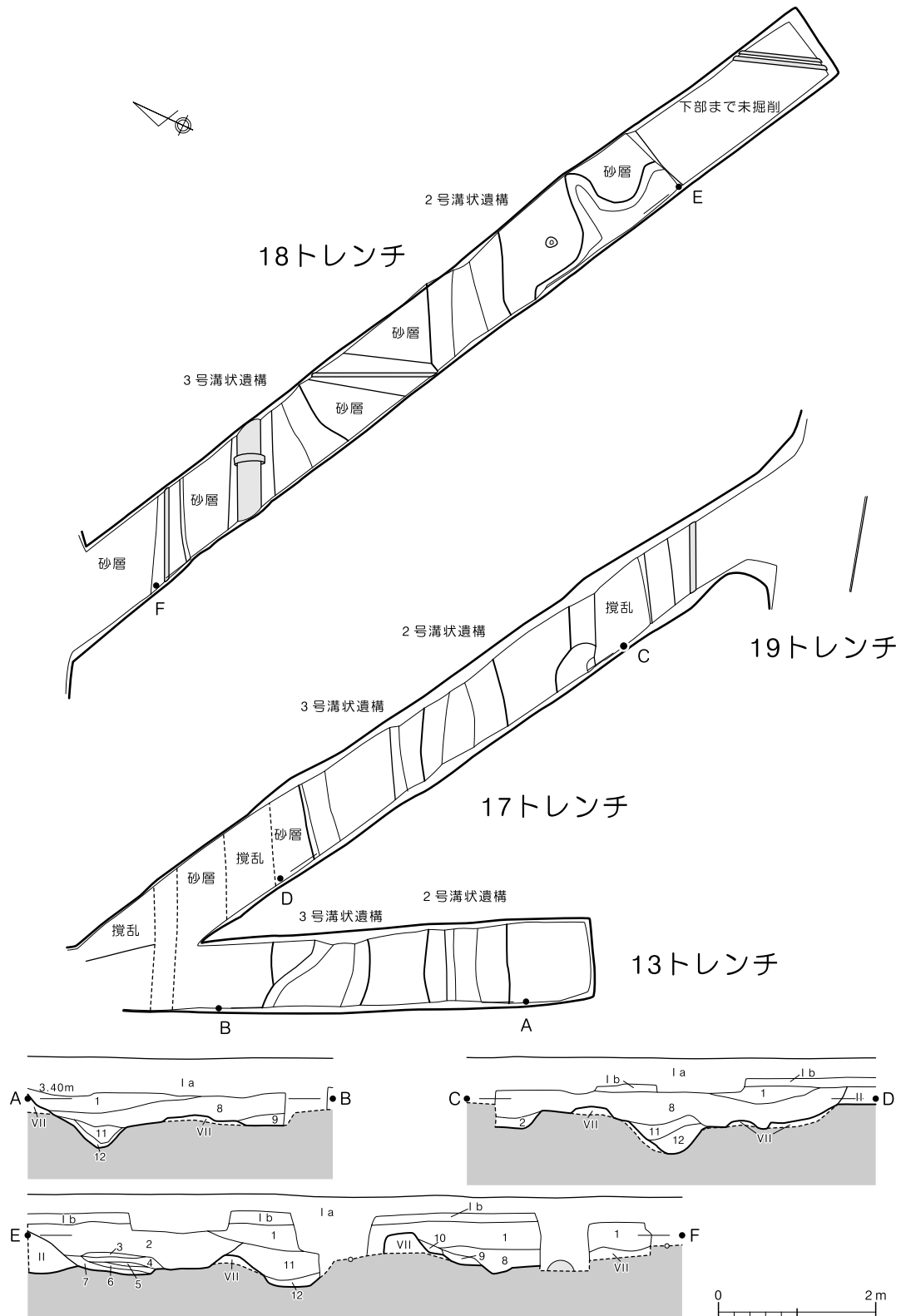
遺構の所産時期は、1号土坑との新旧関係からみて、古墳時代前期以前のものと考え。性格については不明である。

17トレンチ（第31図）

本トレンチは校庭部分の南寄りに設定したトレンチで、12m×1mの規模のトレンチで西側で、13トレンチ、東側で19トレンチと繋がる。

地表より0.60m掘削したところで地山層（黄褐色砂質層）のⅦ層に達した。このトレンチでも、学校関係の配管が遺構確認面にまで達し、遺構の遺存状態はあまり良い状況ではなかった。また、19トレンチ付近では、現在使用中の配管が存在していた。そのため、これ以上の掘削は、配管の毀損のおそれがあることから、下部までは調査を実施していない。

精査の結果、攪乱の間から2・3号溝状遺構が検出された。これらの溝状遺構は13トレンチにおいて確認されており、また、次の18トレンチにおいてもその続きが検出されている。なお、2・3号溝状遺



2・3号溝状遺構土層注記

- 1: 黒褐色土。やや粗粒。赤色スコリア粒をわずかに含み、2mm大の粗粒の黒褐色粒を多量。パミス粒を少量含む。粘性なく、しまりややあり。
- 2: 黒褐色土。やや砂質で粗粒。2mm大の黄褐色粒を少量含む。細粒の黄褐色粒をやや多量。粘性ややなく、しまりややなし。やや褐色味がかる。
- 3: 黄褐色土。砂質。粗粒の黄褐色粒を多量し、粘性なく、しまりなし。脆弱。
- 4: 黒褐色土。2層に似るが粗粒。脆弱。
- 5: 黄褐色土。3層に似る。含有物少なく、やや黒味がかかる。
- 6: 黒褐色土。細粒でやや砂質。黄褐色粒は含まず、黒味つよい。粘性ややなく、しまる。
- 7: 黒褐色土。粗粒。細粒の黄褐色砂を混入し、やや脆弱。褐色味がかる。

- 8: 黒褐色土。1層に似るが、粗粒子を含まず、パミスもわずかで、黒味つよい。上層よりわずかに粘性あり。
- 9: 黒褐色土。8層に黄褐色粗粒(2mm以下)を多量。褐色味つよい。やや脆弱。
- 10: 黄褐色土。下部のVII層が風化し、9層と混在した層。脆弱。
- 11: 黒褐色土。やや粗粒。赤褐色スコリア粒をわずかに含み、黄褐色粒(2mm大)を少量含む。粘性ややあり、ややしまる。5cm大の玉石を少量含有する。
- 12: 黄褐色土。砂質。粗粒の黄褐色砂(地山)を主とし(60%)、細粒の黒褐色土を40%含有。粘性なく、しまりなし。5mm大の小石もまじる。

第31図 17・18トレンチ

構については、次にまとめて記載する。

・ 2号溝状遺構 (第31・32図)

本址は、17・18トレンチ内の中ほどで検出され、17トレンチ内においては、西側で3号溝状遺構と重複している。3号溝状遺構が東側に延びるにしたがい北側へとややコースをかえているのに対し、本址は直一直線に走行している。

堆積土は標準堆積土のI層相当の黒褐色土で、堆積土中に5cm大の玉石の混入が見られた。

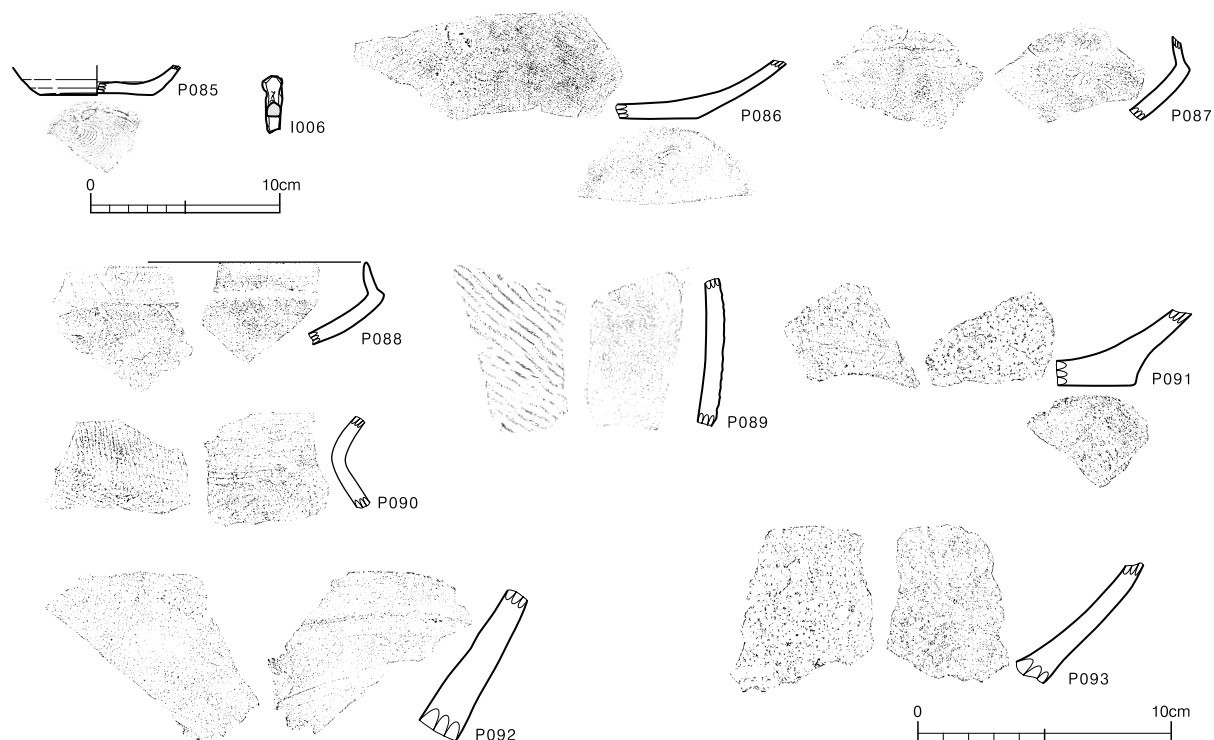
検出部での溝幅は、1.00~1.18mを測り、溝底は0.27~0.40mほどとなっている。現存する掘り込みは最深で0.50mほどとなっている。

3号溝状遺構と同様に、Ⅶ層中において検出され、溝底で安定した層にかわるものの、開口部付近では砂層となっているため崩落と風化が著しい。また、トレンチ断面によってⅡ層を掘り込んでいることが判明している。

立ち上がりは緩やかで、開口部付近では大きく開いている。底面は13・17トレンチ内では幅が細く断面形状はV字形に近く、18トレンチ内では平坦で広がっており、断面形状も鍋底形に近い。

出土遺物は比較的あったが、いずれも小片で、時期の分かり得るものは図示した8点ほどであった。いずれも堆積土中からの出土で、直接遺構に伴うと思われるものは確認できなかった。

P085は底部1/6残存の坏形土器である。底径は(6.0)cm、高さは(1.5)cmを測る。ロクロ成形で、底面に回転糸切痕を残す。P086は壺形土器の底部片で、厚さは0.7cmを測る。外面はケズリ、底面がヘラ整形、内面はミガキ調整となっている。P087は坏形土器の体部片で、厚さは0.6cmを測る。稜を有し、体部



第32図 2・3号溝状遺構出土遺物

上位がヨコナデ、下位ケズリ、内面はナデ調整が施されている。P088も坏形土器の口縁部片で、復原口径は(13.0) cmを測る。体部に稜を有し、口唇部はヨコナデ、体部がケズリ、内面はナデ調整となっている。P089は須恵器の甕形土器の胴部片で、厚さは0.7cmを測る。外面にタタキ目が施される。P090は甕形土器の胴部片で、厚さは0.5cmを測る。外面がハケ目、内面口縁部がハケのちミガキ、胴部はナデ調整となっている。P091は壺形土器の底部片である。厚さは1.0cmを測り、外面がミガキ、底面がヘラ整形、内面はミガキ調整となっている。P092は陶器甕形土器の胴部片である。厚さは1.6cmを測る。無釉で、内外面ともにナデ調整が施される。I006はⅠ～Ⅱ層は先端部を欠損する鉄釘で、長さ(3.0) cm、幅(0.7) cm、重さ(3.7) gを測る。浮錆が顕著で、断面は四角い。

遺構の構築時期は、出土遺物から見て中世まで下るものと考ええる。また、性格については不明である。さらに、3号溝状遺構との新旧関係については、土層堆積状況からみて、本址が3号溝状遺構に先行して構築されたものと考ええる。

・3号溝状遺構(第31・32図)

本址は、17・18トレンチ内の西寄りで検出され、17トレンチ内においては、東側で2号溝状遺構と重複しているが、18トレンチ内では重複しておらず、わずかに北側へと向いて延びている。

堆積土は標準堆積土のⅠ層相当の黒褐色土で、全体にパミスの混入がみられた。

検出部での溝幅は、1.20～2.00mを測り、溝底は0.70～0.90mほどとなっている。いずれのトレンチにおいても両側の立ち上がりは検出されていない。また、17トレンチ部分では溝幅がかなり広がっている。現存する掘り込みは最深で0.30mほどとなっている。

Ⅶ層中において検出され、溝底で安定した層にかわるものの、開口部付近では砂層となっているため崩落と風化が著しい。また、トレンチ断面によってⅡ層を掘り込んでいることが判明している。

立ち上がりは緩やかで、底面との境もあまり明瞭ではなく、自然に移行している。

底面は平坦で13トレンチにおいては、一段低い溝状を呈している部分が確認された。

出土遺物は比較的あったが、いずれも小片で、図示できたのは1点のみであった。P093は覆土から出土した台付甕形土器の胴部片で、厚さは1.1cmを測る。内外面ともにナデ調整が施される。

遺構の構築時期は、出土遺物から見て中世まで下るものと考ええる。また、性格については不明である。さらに、2号溝状遺構との新旧関係については、土層堆積状況からみて、本址が2号溝状遺構より後出するものと考ええる。

18トレンチ(第31図)

本トレンチは校庭部分の南寄りに設定したトレンチで、13m×1mの規模のトレンチで西側で16トレンチ、東側で19トレンチと繋がる。

地表より0.75m掘削したところで地山層(黄褐色砂質層)のⅦ層に達した。このトレンチでも、学校関係の配管が遺構確認面にまで達し、遺構の遺存状態はあまり良い状況ではなかった。また、19トレンチ付近では、現在使用中の配管が存在していた。そのため、これ以上の掘削は、配管の毀損のおそれがあることから、下部までは調査を実施していない。

精査の結果、攪乱の間から2・3号溝状遺構が検出された(17トレンチ参照)。

19トレンチ

本トレンチは校庭部分の南寄りに設定したトレンチで、16m×1mの規模のトレンチで、東側で20トレンチ、西側で19トレンチ、トレンチ半ばで17・18トレンチと繋がっている。

地表より30m掘削したところで、現在使用中の学校関係のトレンチ方向に配管が走っていることが判明した。このため、配管下に遺構が存在する可能性が低いこと、ならびに配管を毀損してしまうおそれがあることから、これ以上の掘削調査を行なうことを断念した。

出土遺物は皆無であった。

20トレンチ(第33・34図)

本トレンチは校庭部分の南寄りに設定した東西方向に延びるトレンチで、13m×7mの規模のトレンチである。西側で19トレンチ、東側で12トレンチと繋がっている。

地表より0.97m掘削したところで、地山砂層が検出された。この面で遺構確認を行なったところ、3号土坑といくつかのピットが検出された。検出されたピット間にはなんら関係性が認められず、竪穴住居址等の支柱をなすようなしっかりした掘り込みをもつものではなく、性格は不明である。

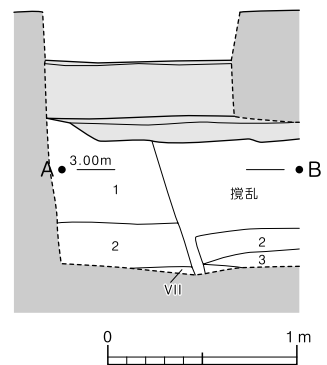
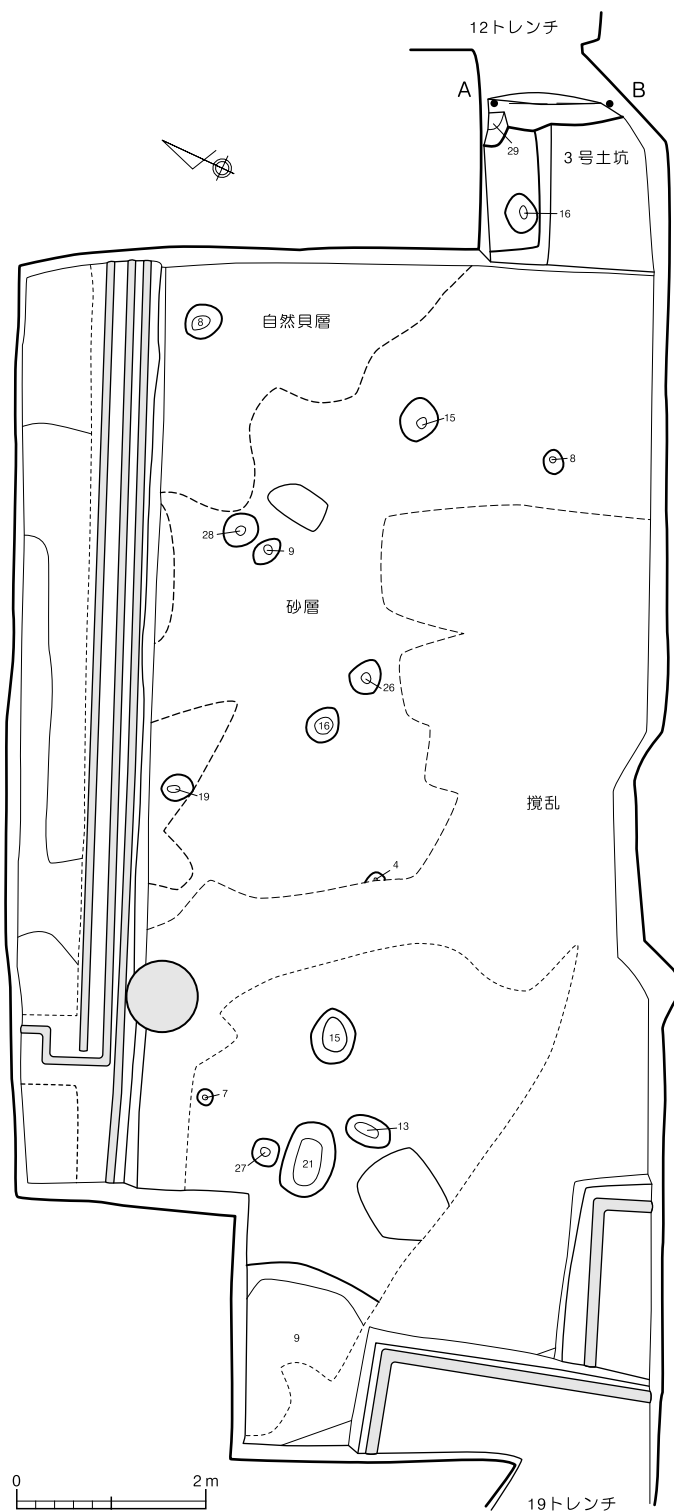
トレンチ堆積土から出土した遺物はさほど多くはない。P098はI～II層中から出土した土錘である。略完形で管状を呈しており、長さは(3.4)cm、径0.7cm、重さは(1.4)gを測る。P099はピットから出土した甕形土器の口縁部片である。内外面にヨコナデ調整が施されている。P100はI層出土の甕形土器の胴部片である。厚さは0.5cmを測り、外面がハケ目、内面にミガキ調整が施される。P101はI層出土の甕形土器の胴部片である。厚さは0.3cmと薄く、外面がハケ目、内面にナデ調整が施される。胎土や調整などからいわゆるS字口縁をもつ甕形土器の胴部片であるものとする。P102はI～II層出土の壺形土器の口縁部片である。厚さは0.7cmを測る。内外面ともにハケ目調整である。P103はI～II層出土の壺形土器の口縁部片である。厚さは0.7cmを測り、口縁部がヨコナデ、胴部上半がミガキ、内面はミガキ調整を施す。P104はI層出土の壺形土器の口縁部片で、厚さは0.9cmを測る。口縁部がヨコナデ、頸部はミガキ、内面にはヨコナデ調整が施される。P105はI層出土の須恵器の壺形土器口縁部破片である。厚さは0.7cmを測り、口唇部及び口縁部に櫛描の波状文を施す。口唇部及び内面に自然釉がかかる。

S001はI層出土の五輪塔の水輪である。完形で長さ16.5cm、幅19.3cm、高さ12.2cmを測り、上面からの形状はやや楕円形を呈している。重さは5,650gを測り、石質は含橄欖石輝石安山岩(宇佐美・網代)である。全体的に風化著しく、天地面がやや窪んでいる。S002はI～II層出土の敲石で、長さ9.4cm、幅6.8cm、重さ588gを測る。石質は輝石安山岩で、円礫を利用し、両先端に敲打痕及び擦痕を有している。

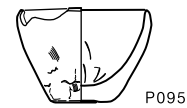
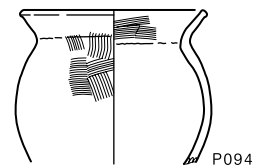
・3号土坑(第33図)

本址は、トレンチの東側壁際で検出された土坑で、現存する規模は、開口部で1.20×3.50m、坑底で0.10×1.10mを測り、現存する掘り込みは、最大で0.19mを測る。

堆積土はII層相当の黒褐色土で、いずれも自然堆積の様相を呈していた。



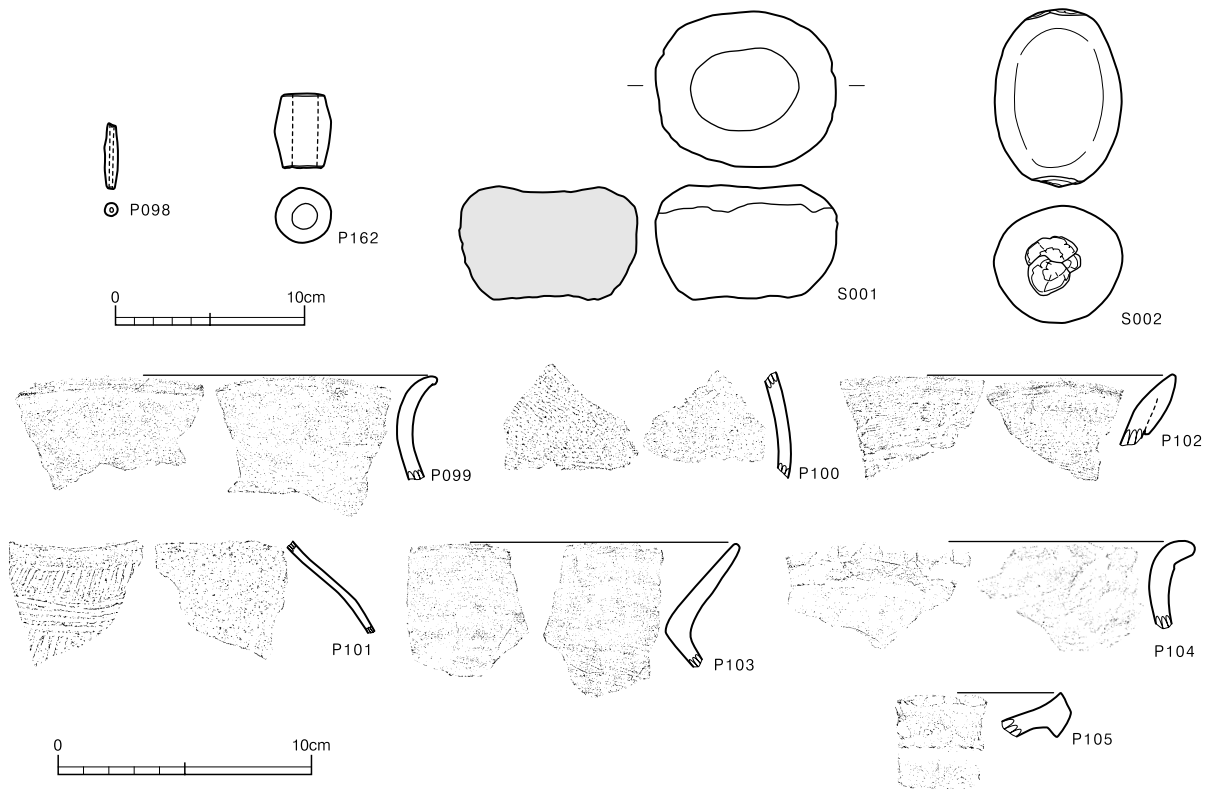
- 1: 黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒を少量含み、シルト粒をこくわずかに混入。4.0~6.0cm次の玉石をやや含む。粘性ややあり、しまりややつよい。
- 2: 黒褐色土。1層に似るが、シルト粒やや多い。上層に比し粘性つよく、しまりは同じ。玉石は含まない。
- 3: 黒褐色土。やや砂質。わずかにシルト粒を混入する。



第33図 20トレンチ

周壁はⅦ層中に構築され、やや角度を持って掘り込まれる。この辺りの地山は砂層であるため、非常に脆く、乾燥するとすぐに開口部付近から崩れてしまうものであった。

坑底もⅦ層中に構築されるが、坑底付近のⅦ層は砂質の黄褐色土層であったため、周壁に較べ遺存状態はよく、また、乾燥による変化も周壁ほど見られなかった。平坦に造られた坑底はほぼ平坦で、わず



第34図 20トレンチ出土遺物

かに中央に向かって傾斜しているものであった。また、周壁との境目は緩やかであった。

出土遺物は少なく、いずれも覆土中からの出土遺物である。

P094は胴上半1/6が残存する甕形土器で、口径は(10.0)cmを測り、胴部最大径は(10.4)cmを測る。高さは(8.2)cmで、外面は口縁がヨコナデ、胴部がハケ目、内面は口縁がハケ目、胴部がナデ調整。P095はミニチュア土器である。口縁部の一部を欠損しているもののほぼ完形で、口径は(6.8)cm、底径は3.2cm、高さ5.0cmを測る。内外面ともにナデ調整で、一部に前段階のハケ目調整が残る。P096は甕形土器の胴部片で、厚さは0.6cmを測り、外面がハケ目、内面がミガキ調整となっている。P097も甕形土器の胴部片である。厚さは0.4cmを測り、内面に輪積み痕跡が残る。外面がハケ目調整、内面がミガキ調整となっている。

遺構の所産時期・性格は、不明である。

21トレンチ (第35図)

本トレンチは校庭部分の中央付近に設定した東西方向に延びるトレンチで、29m×1mの規模のトレンチである。西側で16トレンチ、東側で21トレンチ、南側で23トレンチと繋がっている。

地表より1.00m掘削したところで、地山である砂層および自然貝層が検出された。この面で遺構確認を行なったところ、1・2号住居址、4・5・7号溝状遺構およびピットが検出された。

検出されたピット間にはなんら規則性が何われず、竪穴住居址等の主柱をなすようなしっかりした掘り込みをもつものはなく、性格は不明である。

出土遺物は大半が遺構出土のもので、それ以外にも少量の遺物が確認されている。P135はピット1出土の台付甕形土器の脚台部である。脚径は(9.2)cm、高さは(6.7)cmを測り、脚部内外面ともハケ目調整を施す。P136はピット2出土の壺形土器の胴部片である。厚さは0.7cmを測り、内外面ともにミガキ調整を施す。P137はI～II層の高坏形土器である。脚部のみ残存し、脚径は(10.6)cm、高さ(8.8)cmを測る。内外面ともにミガキ調整を施す。P138はI層出土の壺形土器の胴部片である。厚さは0.7cmを測り、沈線による山形文を施し。内にRL縄文を充填する。P139はI～II層出土の甕形土器の口縁部片である。外面口縁部がヨコナデ、胴部はケズリ、内面にはナデ調整が施される。

I009はピット2出土の鉄釘である。一部欠損し、長さ(8.3)cm、幅(0.6)cm、重さ(11.6)gを測り、全体的に浮錆が顕著で、断面四角い。

・5号溝状遺構〔C貝層〕(第36・37図)

本址はトレンチの西寄りで、検出された。検出部での溝幅は2.52～2.85mを測り、溝底では0.80～0.85mを測る。トレンチの設定方向とは直行して走行し、ほぼ南北方向に走っている。

遺構確認面は地山(砂層)層から掘り込まれ、最大深度は0.65mを測る。ただし掘り込みは、トレンチの断面観察からII層を掘り込んで造られていることが分かっている。

溝内の堆積土は、標準堆積土のII層に相当する黒褐色土で、溝底より浮いた状態で黒褐色土の間層を挟む2枚の貝の二次堆積(C貝層)が確認されている。

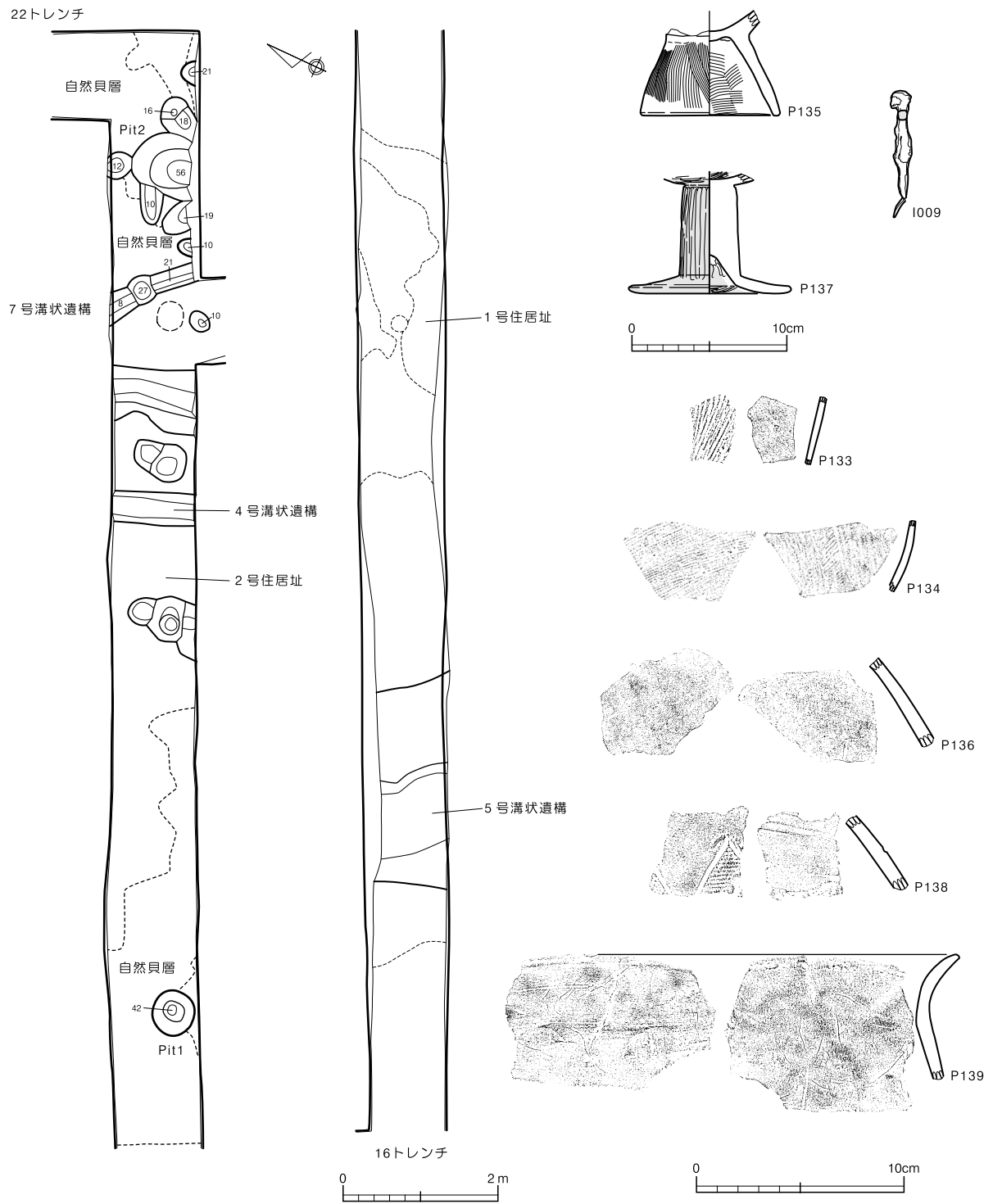
掘り込みは西側は垂直に近い角度で掘り込まれ、東側は緩やかに立ち上がっている。ともに緩やかに底面へと移行しており、砂層中に構築されているためやや軟弱で乾燥すると崩落は著しい。また、トレンチの断面観察によると、東側の立ち上がりも遺構確認面より上部では垂直に近い角度をもっていることが確認されている。

底面もVII層中に構築され、溝底は西側に寄っている。立ち上がり同様に砂層に構築されているため、乾燥・風化が著しい。

貝層は、溝状遺構の中の北寄りで検出された。溝底より0.30cmほど浮いた状態で検出され、ハマグリなどの2枚貝を中心とした純貝層と破碎貝層に大きく分層できる。貝層は、10～15cmほどの厚さで堆積しており、下部の貝層中にはアズマニシキが目立っている。

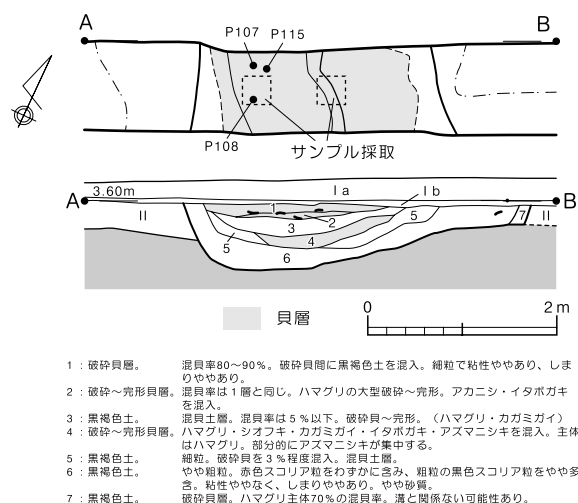
出土遺物多く図示できるもの多く、すべて貝層中からの出土遺物である。

P106は胴部片1/4残存の甕形土器である。口径は(17.0)cm、胴部最大径は(21.0)cmを測り、現存する器高は(13.5)cmを測る。外面および内面の口縁部がハケ、胴部内面にはヘラナデ調整が施されている。P107は台付甕形土器の接脚部破片である。最大径は(10.2)cm、高さ(4.2)cmを測る。内面に輪積み痕を残す。内外面ともミガキ調整を施す。P108は脚部のみ残存の台付甕形土器である。脚部径は8.5cm、高さ(5.8)cmを測る。外面はハケのちナデ、内面はナデ調整を施す。脚部の内面はナデ調整。P109は壺形土器の底部片である。底径は(9.0)cm、高さ(6.5)cmを測る。外面に赤彩を施す。外面はミガキ、内面はナデ調整を施す。P110は高坏形土器の脚部片である。脚部径は(11.0)cm、高さ(6.5)cmを測り、脚部に3か所の穿孔を有する。外面がミガキ、内面にはナデ調整が施される。P111は高坏形土器脚部破片で、脚部の1/4を欠損する。脚部径は(11.8)cm、高さ(6.2)cmを測り、脚部に4か



第35図 21トレンチ

所の穿孔。外面はミガキだが前段階のハケ目が残る。脚部の内面はハケ目調整。P112は甕形土器の口縁部片である。口径は(10.5)cm高さ(5.8)cmを測り、外面ハケ目、内面口縁部ハケのちナデ、胴部ヘラナデ調整を施す。P113は甕形土器の口縁部片で、厚さは0.5cmを測る。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケ目で、内面はナデ調整を施す。P114は甕形土器の口縁部片で、厚さは0.6cmを測る。口唇に刻みを入れ、内外面ともにハケ目調整が施される。P115～P118は壺形土器の口縁部片である。P115は厚さ0.7cmを測り、折返し口縁で、



第36図 5号溝状遺構 [C貝層]

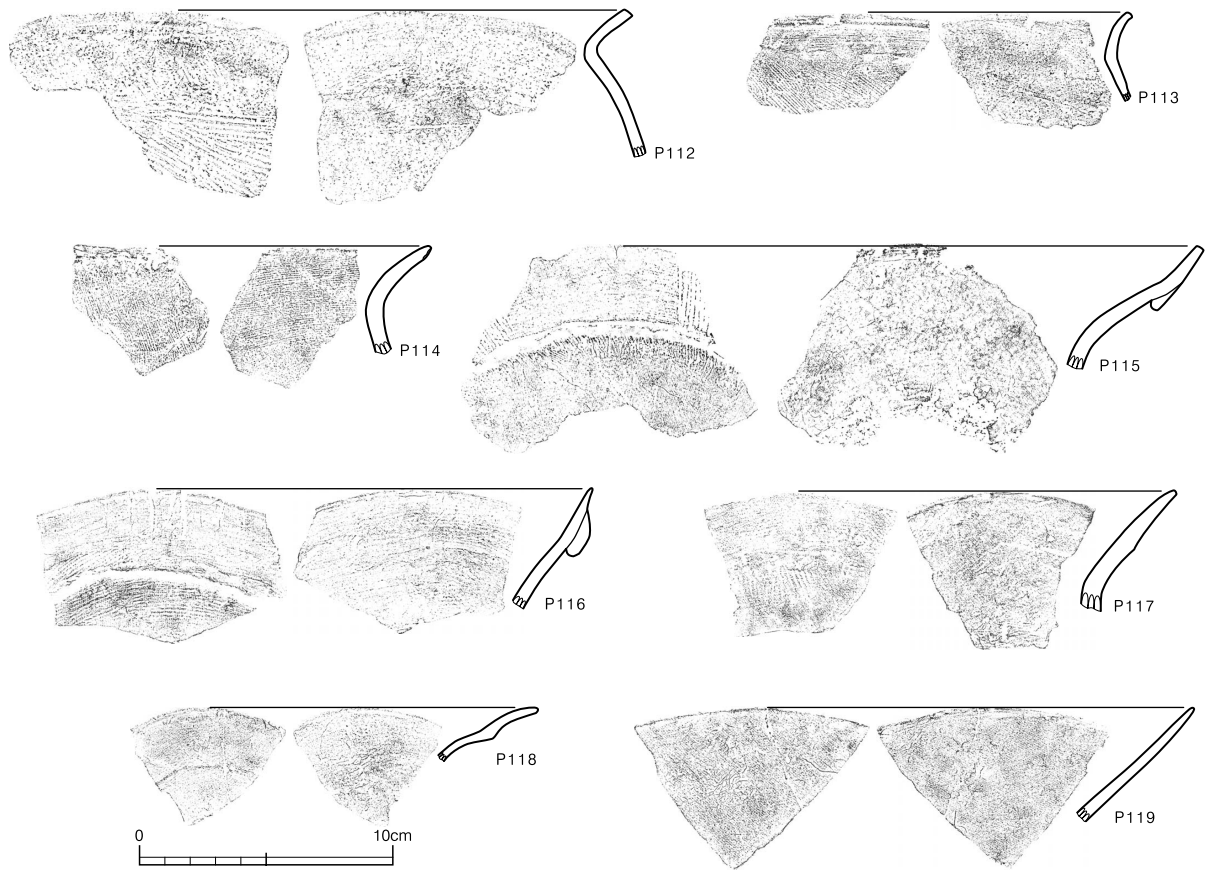
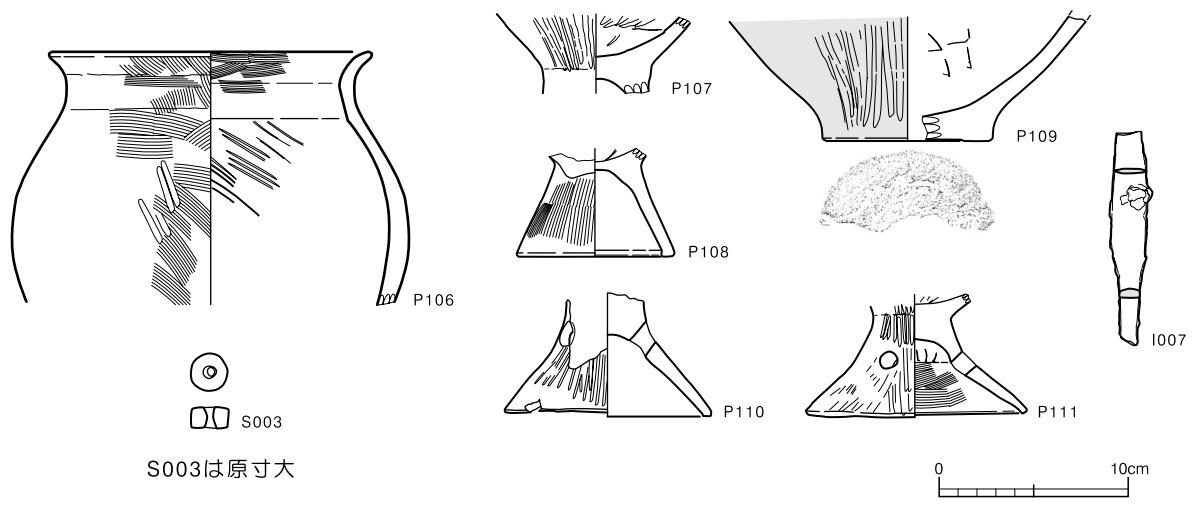
内面に赤彩が施される。口縁部はハケのちミガキで、櫛歯状の条線を施す。内面はミガキ調整。P116は復原口径(16.6)cmを測るもので、折返し口縁で、内外面ともハケのちミガキ調整が施される。P117は素口縁の口縁部破片で、外面に弱い稜線を有する。内外面ともにハケのちミガキ調整が施される。P118もP117同様に素口縁で、外面に弱い稜線を有する。内面に赤彩に施し、内外面ともにミガキ調整を施す。P119は高環形土器の口縁部破片である。内外面ともにミガキ調整が施される。

S003は貝層サンプルを4mmメッシュにて篩いかけしていた際に見つかった白玉である。直径は0.5cm、厚さは0.25cm、重さ0.1gを測る。石質は流紋岩で、孔は両面より穿たれている。

I007は貝層出土の槍先である。両端を欠損しており、長さ(11.4)cm、幅(2.0)cm、厚さは(0.4)cm、重さ(24.5)gを測る。浮錆みられ、関はない。刀身は薄く細長い。

遺構の構築時期は、溝の上部に形成された貝層に含まれる遺物の大部分が古墳時代前期の遺物であったため、それ以前のものであると考える。また、貝層以下の堆積土についてもII層相当の黒褐色土であることからみて、弥生時代から古墳時代前期にかけての構築物であるものと考え。遺構の性格については、溝として使用していたものと考え。また、溝状遺構の機能が失われ埋没していく段階で、溝状の窪みに貝等を廃棄した結果、貝層が形成されたものと考え。

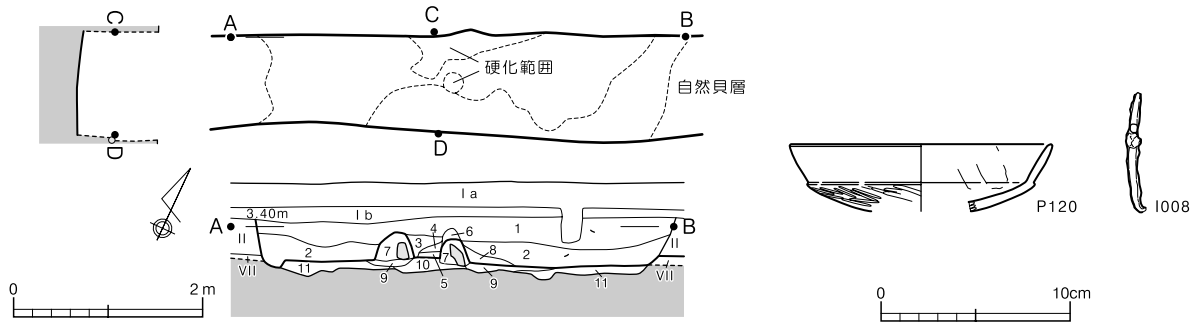
本址は、13・15トレンチで検出された1号溝状遺構と状況が非常に似通っている。他の溝状遺構が直線的に検出されているのに対し、本址と1号溝状遺構とは90度方向を違えていることから一応別物であるとして取り扱った。しかしながら、貝層の堆積状況など類似点が多く、同一遺構となる可能性が残されている。



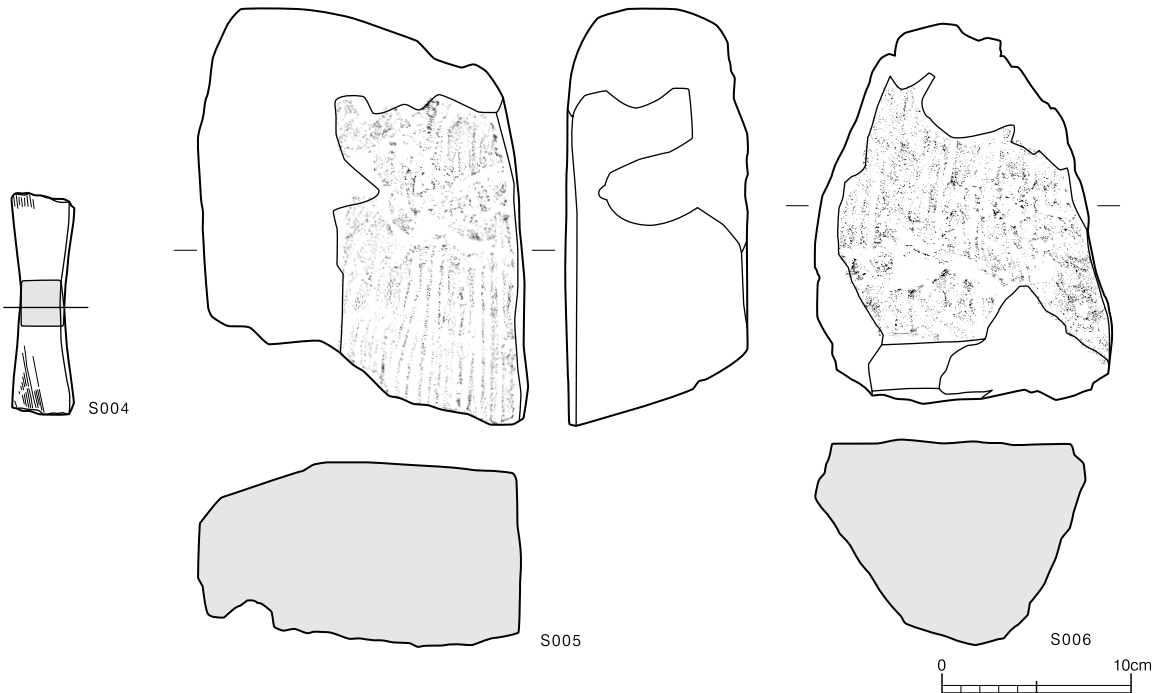
第37図 C貝層出土遺物

・ 1号住居址 (第38図)

本址は5号溝状遺構の東側に位置する。トレンチ幅が1mということもあり、遺構は、トレンチの南北方向両側へとさらに続いており、遺構の一部を検出しただけに留まっている。



- | | | |
|---|-----------|---|
| 1: 黒褐色土。やや粗粒。赤色スコリア粒を少量含み、バミスを若干含む。粘性ややなく、しまりややあり。黒味強い。 | 7: 灰褐色土。 | 6層にシルトブロックを混入し、粘性つよく、ややしまる。明るい色調。 |
| 2: 黒褐色土。1層に似るが1層に比し砂質。遺物多。1層よりややしまりおとる。 | 8: 灰褐色土。 | 6層に似るが、粘性つよく、しまりも強い。シルトブロック及びシルトを用いた床面形成土。硬くしまり、上面はとくに硬い。 |
| 3: 黒褐色土。1層に精土粒を混入。1層に比し、粘性強い。 | 9: 灰褐色土。 | 1層に近い。やや砂質で、シルトブロックを少量含む。 |
| 4: 暗赤褐色土。3層に粉末状の焼土及びシルト粒を混入。やや明るい色調。 | 10: 黒褐色土。 | 10層に似る。しまりがあるが、1層ほどは硬くない。床面形成土。 |
| 5: 暗赤褐色土。3層と同性状。 | 11: 黒褐色土。 | |
| 6: 黒褐色土。1層にシルト粒を混入。粘性・しまりは同じ。明るい。 | | |



第38図 1号住居址

遺構確認面はⅦ層上面で、検出時には床面に近いレベルまで掘り下げてしまった。その後、トレンチの断面観察によって、遺構はⅡ層から掘り込まれていたものであることが確認された。最大の掘り込みは0.55mを測る。

遺構の堆積土は、標準堆積層のⅡ層相当の黒褐色土で、遺物混入量に違いがあるほか、掘り込んでいたⅡ層と非常に区別が付きにくいものであった。

周壁は、ほぼⅡ層中に構築される。やや角度をもって立ち上がっており、東側はやや上方が開き気味である。また、西側壁下にはごく浅い壁溝とも考えられるのものが存在したが、地山層が砂質層であることと、壁面周辺の床面の状況が軟弱であったため窪んでいたものと解釈した。ちなみに東側では確認されていない。

床面は、黒褐色土を用いた貼床となっている。ほぼ平坦ながら、わずかに東側のレベルが低くなっている。北壁寄りに硬化面が確認されたが、その範囲は狭く、全体的に見るとやや軟弱な床面といえる。

また、床面に支柱をなすと思われるピットは検出されなかった。

トレンチ北側壁下において、カマドが検出された。東西方向に2個のシルトブロック（袖石）が検出された。このブロックの周囲には粘土質の灰褐色土を用いて袖を造っている。2つのブロック間には、焼土が混入した土層も確認されており、おそらく天井部分が崩落したものとする。ただし、底面の燃焼部に当たる部分の、掘り込みや被熱変化した部分の確認はできなかった。

出土遺物は比較的多く確認されたが、いずれも細片で、図示できるものは少なく7点ほどである。P120～P122は覆土中よりの出土で、P123のみカマドの堆積土中からの出土となっている。

P120は約1/6が残存している坏形土器で、口径は（14.0）cm、高さ（3.5）cmを測る。外面の口縁部はヨコナデ、体部がミガキ調整、内面にはナデ調整が施されている。P121は甕形土器の口縁部片である。厚さは0.9cmを測り、内外面ともにナデ調整が施されている。P122も甕形土器の口縁部片である。厚さは1.0cmを測り、内外面ともにナデ調整が施されている。P123は甕形土器の胴部片である。厚さは0.6cmを測り、外面がケズリ、内面にはナデ調整が施されている。

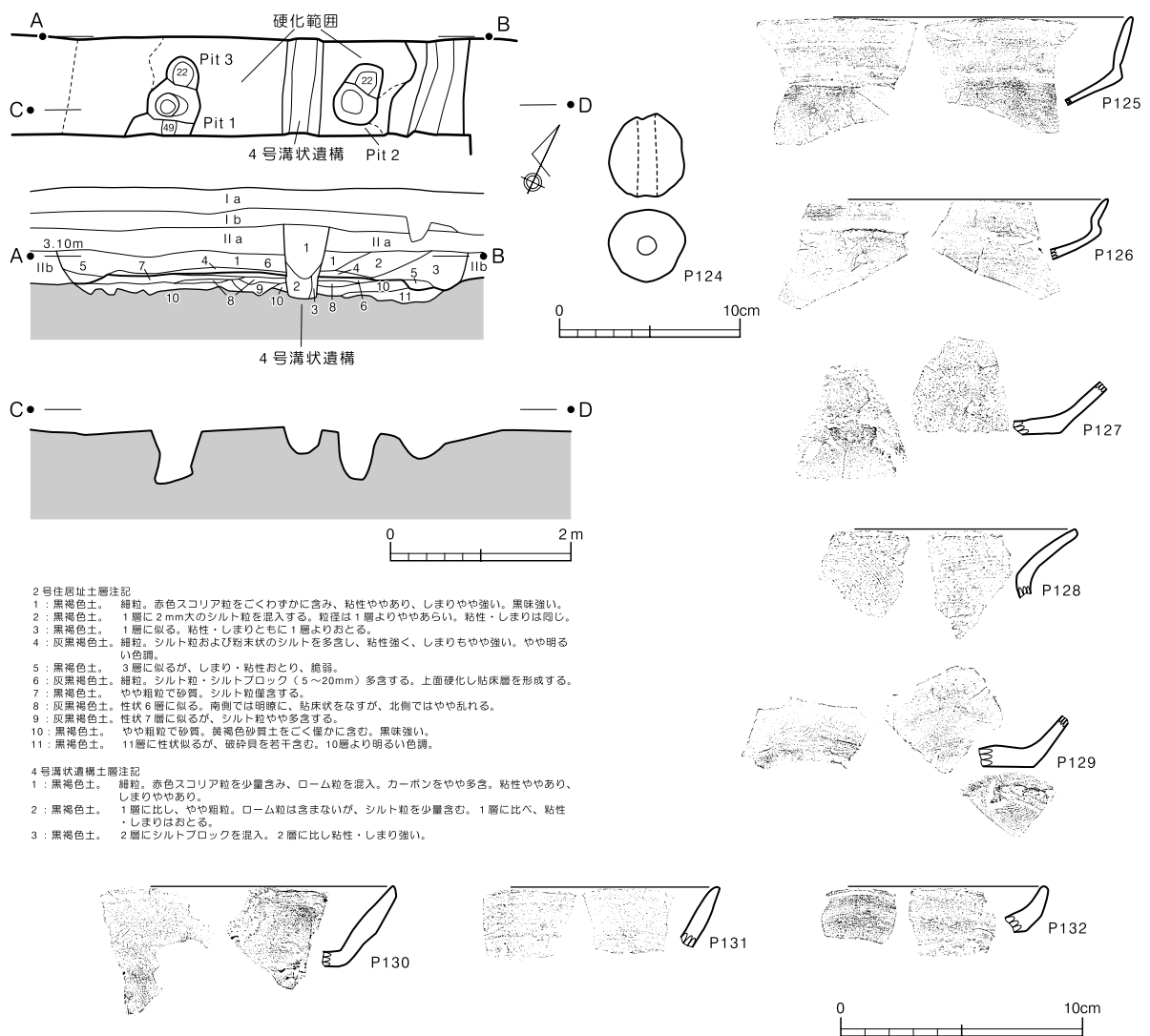
S004は21トレンチ出土の砥石で、長さ11.6cm、幅3.4cm、厚さ3.0cm、重さ184gを測る。石質は流紋岩で、四面とも顕著に研磨され、一部に擦痕が認められる。また、両端部にも研磨痕がみられる。表土除去時に取り上げられたが、出土位置から本址の遺物の可能性が高い。S005はカマドの袖石である。長さ（22.0）cm、幅（17.7）cm、高さ（9.7）cm、重さ（3,120）gを測る。石質は凝灰岩（三浦半島上部）で、周囲を四角く面取りし、表面には筋状の工具痕が残る。S006はカマド袖石である。長さ（20.0）cm、幅（15.8）cm、高さ（10.8）cm、重さ（2,400）gを測る。石質は凝灰岩（三浦半島上部）で、欠損著しく、加工面が残存するのは二面のみである。加工面には筋状の工具痕を有する。

I008は覆土の鏝である。一部欠損し、長さ（6.4）cm、幅（0.4）cm、重さ（4.9）gを測り、全体的に浮鏝が顕著である。片端が屈曲し、断面四角い。

本址の構築時期は、その出土遺物の特徴より7世紀前半代であると考えられる。

・2号住居址（第39図）

本址は23トレンチと交わる付近に位置し、上面で4号溝状遺構と重複して検出された。1号住居址と



第39図 2号住居址

同様に、トレンチ幅が1mということもあって、トレンチの南北方向の両側へ大部分が続いている。

遺構確認面はⅦ層上面で、遺構確認時にすでに検出時には床面に近いレベルまで掘り下げてしまった。その後、トレンチの断面観察によって、遺構はⅡ層から掘り込まれていたものであることが確認された。最大の掘り込みは0.30mを測る。

遺構の堆積土は、標準堆積層のⅡ層相当の黒褐色土で、遺物混入量に違いがあるほか、掘り込んでいたⅡ層と非常に区別が付きにくいものであった。

周壁は、ほぼⅡ層中に構築される。緩やかな角度をもって立ち上がっており、壁面下には幅0.30~0.50m、深さ0.10mほどの幅広の壁溝を有している。

床面は、黒褐色土を用いた粘床となっている。ほぼ平坦で、1号住居址の床面と較べ非常に堅緻である。しかし、西側ピットより外側ではあまり硬化はしていない。

床面には、主柱をなすと思われるピットが2か所に検出された。ともに複数のピットが重複した状況を呈していたが、明瞭な粘床等は確認できなかった。これらのピットは、いずれも自然貝層およびその

下層の砂層中に構築され、遺存状態はわるく、すぐに崩落してしまうような状況であった。

カマドや炉址、貯蔵施設等は検出部においては確認されていない。

出土遺物は比較的多く確認されたが、いずれも細片で、図示できるものは少なく6点ほどである。堆積土中からの出土品はいずれも細片で、図示できたのはピットや床下からの出土品となっている。P124は、ピット2充填土中から出土した略完形の球状を呈する土錘である。長さは(4.6)cm、径は(4.3)cm、重さ(65.6)gを測る。P125は床下出土の坏形土器の口縁部片である。厚さは0.4cmを測り、外面口縁部がヨコナデ、体部はケズリ、内面にはナデ調整が施されている。P126はピット3から出土した坏形土器の口縁部片である。厚さは0.5cmを測り、外面口縁部がヨコナデ、体部はケズリ、内面にはナデナデ調整が施されている。P127はピット3から出土した甕形土器の底部破片である。厚さは0.6cmを測り、外面がケズリ、内面にはナデ調整が施されている。

本址の構築時期は、その出土遺物の特徴より7世紀前半代であると考ええる。また、4号溝状遺構との新旧関係は、土層観察により本址が先行して構築されたものと考ええる。

・4号溝状遺構(第39図)

本址は、2号住居址と重複して、トレンチを横切るように南北方向に走行して検出された。開口部での溝幅は0.40~0.43mを測る。掘り込みはトレンチの断面で確認したところ、Ⅱ層上面から掘り込まれていることが分かった。掘り込みは最大で0.85mを測る。ほぼ垂直に近く掘り込まれ、底面は平坦で、底面と立ち上がりの境は明瞭である。また、自然貝層中に構築されているため、遺存状態は悪い。

出土遺物少ない。P128は甕形土器の口縁部片で、厚さは0.6cmを測る。内外面ともにハケ目調整が施される。P129は須恵器の坏形土器底部片である。厚さは0.9cmを測り、体部はナデ調整。底面に回転糸切りの痕跡を有する。P130~P132はかわらけである。P130は口縁部破片である。厚さは0.8cmを測る。ロクロ成形。P131は口縁部片で、厚さは0.6cmを測る。ロクロ成形。P132は口縁部片で、厚さは0.8cmを測る。ロクロ成形。底面糸切り痕を残している。

本址の構築時期については、2号住居址との新旧関係(本址が後出)および出土遺物から、中世以降の所産であるものと考ええる。また、その性格については不明である。

・7号溝状遺構(第35図)

本址は23トレンチと交わる付近に位置し、2号住居址の東側で検出された。周辺にはピットが数穴検出され、ともに地山層である自然貝層中において確認されている。開口部で溝幅0.15mほどで、掘り込みの深さは最大で0.21mを測る。一部ピットと重複し、トレンチを横切るように走行している。

4号溝状遺構同様に、掘り込みはⅡ層中から掘り込まれていることが分かっている。溝底は0.10mほどで、緩やかに立ち上がりへと移行している。

出土遺物は少ない。P133は甕形土器の胴部片である。厚さは0.4cmを測り、外面がハケ目、内面にはナデ調整が施される。P134は甕形土器の胴部片で、厚さは0.4cmを測る。外面がハケ目、内面はハケのちミガキ調整が施される。

本址の構築時期については、4号溝状遺構と同様の時期・性格を持つものと考ええる。

22トレンチ (第40・41図)

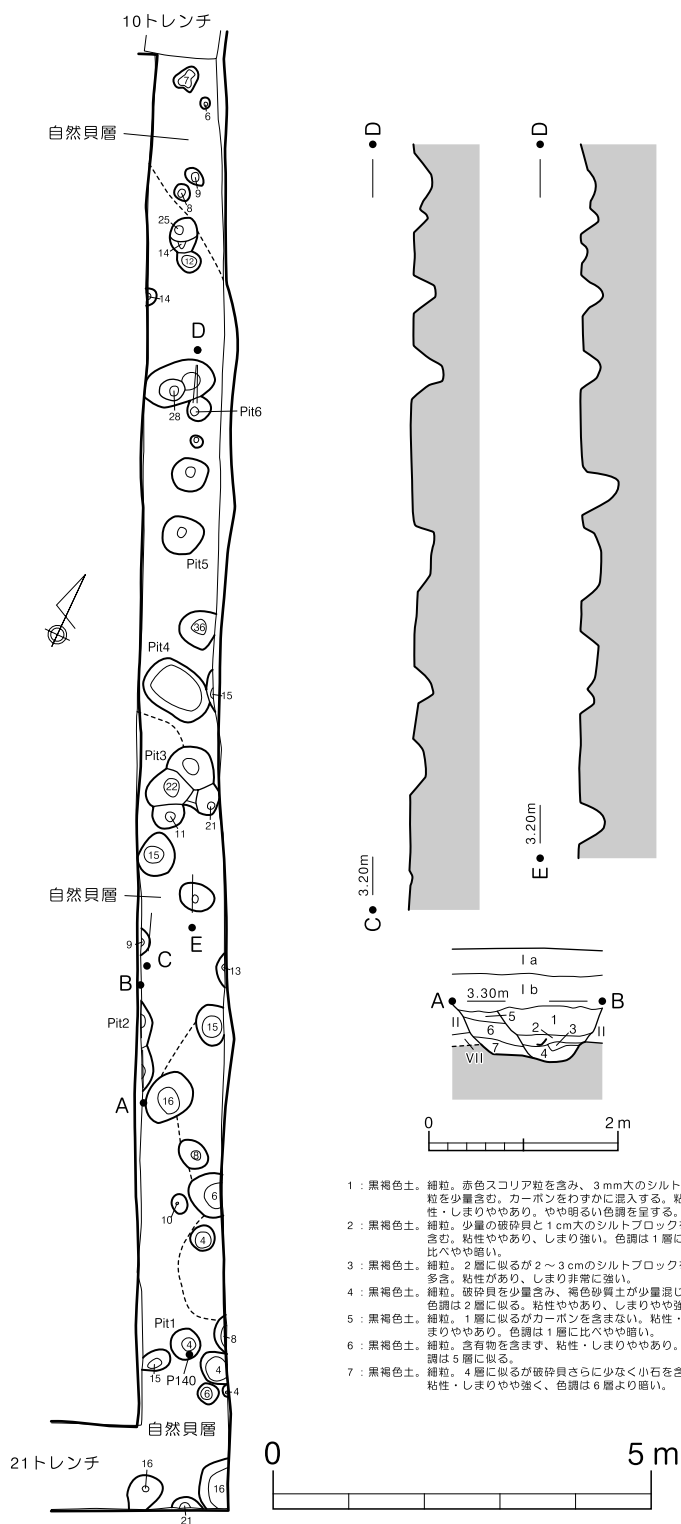
本トレンチは、校庭部分のほぼ中央に設定した南北方向に延びるトレンチで、19m×1mの規模のトレンチである。北側で10トレンチ、南側で21トレンチと繋がっている。

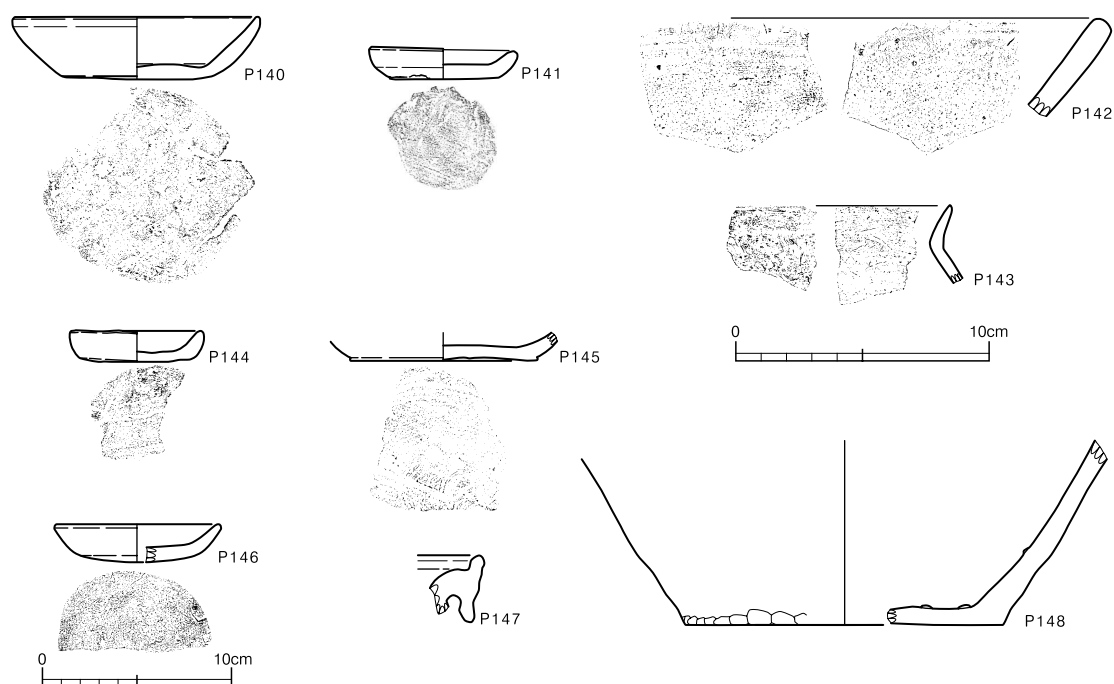
地表より1.00m掘削したところで、地山である砂層および自然貝層が検出された。この面で遺構確認を行なったところ、数多くのピットが検出された。このうち、いくつかのピットについては、互いのピット間が1.80mほどでほぼ直線的に並んでおり、掘立柱建物址のようにも見受けられる。ただし、きわめて限定された範囲のみの調査であったため、ピット列として取り扱っている。また、直線上に並んでみえるピットには、シルトブロックが充填されていた点でも、たのピットとは趣を異にしていた。

ピットに堆積していた土層は、標準堆積層Ⅰ層相当の黒褐色土で、トレンチにかかって検出されたピットでは掘り込みはⅡ層を掘り込んでいることが確認されている。

出土遺物は、トレンチ掘削時およびピットからの出土遺物ともに比較的多くの遺物が出土している。

P140はピット1出土の1/6欠損のかわらけである。口径は(13.2)cm、底径は(7.8)cm、高さ3.3cmを測る。ロクロ成形で、底面にスノコ痕を有する。P141はピット1出土の小型かわらけで、全体の約2/3





第41図 22トレンチ出土遺物

が残存している。口径は（9.0）cm、底径は（6.0）cm、高さ（1.8）cmを測り、ロクロ成形で、底面に回転糸切りのちスノコ痕が付けられている。P142はピット1出土の陶器鉢の口縁部片である。厚さは1.0cmを測り、内外面ともに施釉される。P143はピット4出土の甕形土器の口縁部片で、厚さは0.5cmを測る。外面がナデ、内面はハケ目調整が施される。P144はピット2出土の1/4残存の小型かわらけである。口径は（7.2）cm、底径は（6.0）cm、高さ（1.6）cmを測る。ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を有する。P145はピット2出土のかわらけ底部片で、底径は（10.0）cmを測る。ロクロ成形で、底面に回転糸切りおよびスノコ痕が付けられる。P146はI～II層出土の1/2残存かわらけである。口径は（9.0）cm、底径は（6.0）cm、高さ（2.0）cmを測る。ロクロ成形。P147はI～II層出土の陶製甕形土器の口縁部片である。口径は（25.0）cmを測り、内外面とも施釉される。P148はI～II層出土の陶製甕形土器の底部片である。底径は（17.0）cmを測り、内外面とも施釉される。内面に付着物多い。なお、P0147・P0148は同一個体の可能性が高い。

このトレンチから検出されたピットの多くは、列状に並んでいるピットを中心としてかわらけ等の中世遺物が多く、大多数のものはその所産時期は中世まで下るものとする。また、性格については、一部掘立柱建物址の柱穴になる可能性があるが不明である。

23トレンチ（第42図）

本トレンチは、校庭部分の中央やや南寄りに設定した南北方向に延びるトレンチで、13m×1mの規模のトレンチである。北側で21トレンチ、南側で12トレンチと繋がっており、本来は1本のトレンチであった。しかし、調査中、配管が残存していることが判明し、この部分についての掘削は断念した。

地表より1.05m掘削したところで、地山である砂層が検出された。この面で遺構確認を行なったとこ

ろ、6号溝状遺構および数穴のピットが検出された。検出されたピット間には規則性が伺えず、その性格は不明である。

出土遺物は少ない。P149は精査時に出土した約1/6残存の小型かわらけである。口径は(8.0)cm、底径は(6.8)cm、高さ(1.1)cmを測る。ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を有する。P150はI～II層出土のかわらけ底部片である。底径は(10.0)cm、高さ(1.6)cmを測り、ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を有する。P151はI～II層出土の1/6残存かわらけである。口径は(8.2)cm、底径は(6.0)cm、高さ(1.5)cmを測る。ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を有する。P152はI～II層の甕形土器の口縁部片である。内外面ともハケ目調整が施される。P153はトレンチ精査時に出土した甕形土器の口縁部片で、厚さは0.7cmを測る。外面がナデ、内面はハケ目のちミガキ調整。P154はトレンチ精査時に出土した坏形土器の口縁部片である。厚さは0.4cmを測り、内外面ともに赤彩が施される。

I010は精査時に出土した鉄釘で頭を欠損している。長さ(2.0)cm、幅(0.35)cm、重さ(0.5)gを測り、浮錆が顕著で、断面は四角い。

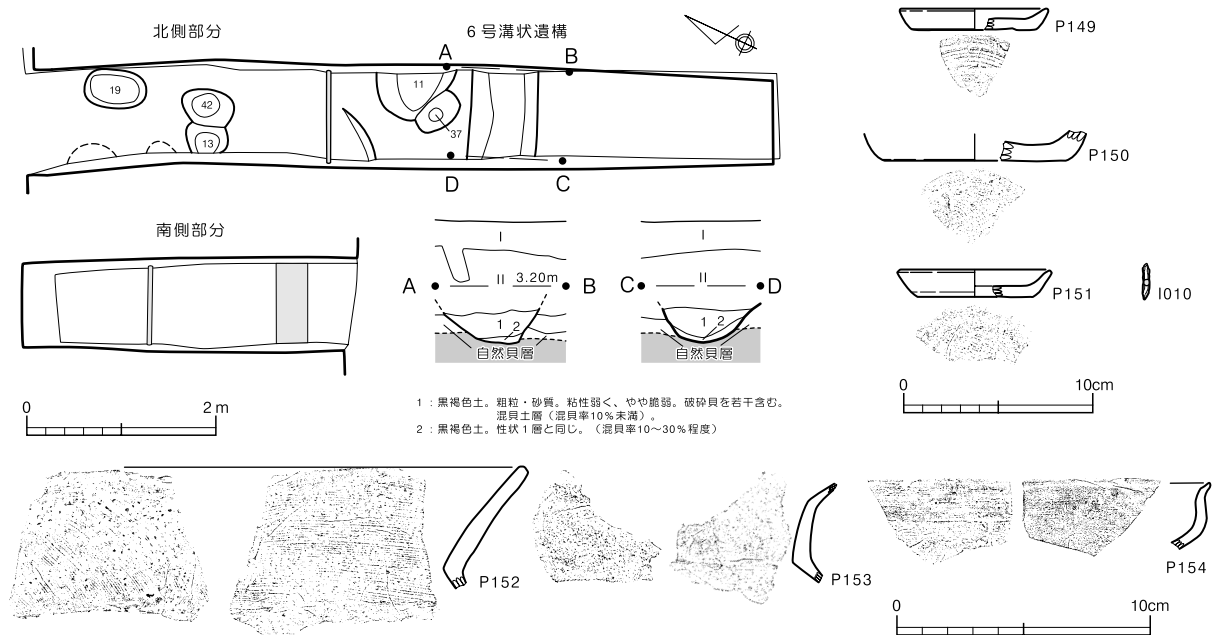
・6号溝状遺構 (第42図)

本址はトレンチの北側部分の中ほどで、トレンチを東西方向に横断して検出された。Ⅶ層中で確認され、開口部での溝幅は0.70～0.73m、溝底で32～38mほどを測り、現存する掘り込みは最大で0.11mとなっている。トレンチの断面観察から、掘り込みはⅡ層中であることが判明している。

掘り込みは緩やかに掘り込まれ、底面は平坦で、底面との境は緩やかに移行している。

出土遺物は少なく、図示できうるものはなかった。

本址の構築時期については、遺構の堆積土の上面においてもⅡ層相当土が確認されていることから、



第42図 23トレンチ

中世までは下らない可能性も考えられるが、周辺からはかわらけ等の中世遺物も見つかっており、時期の特定には至っていない。

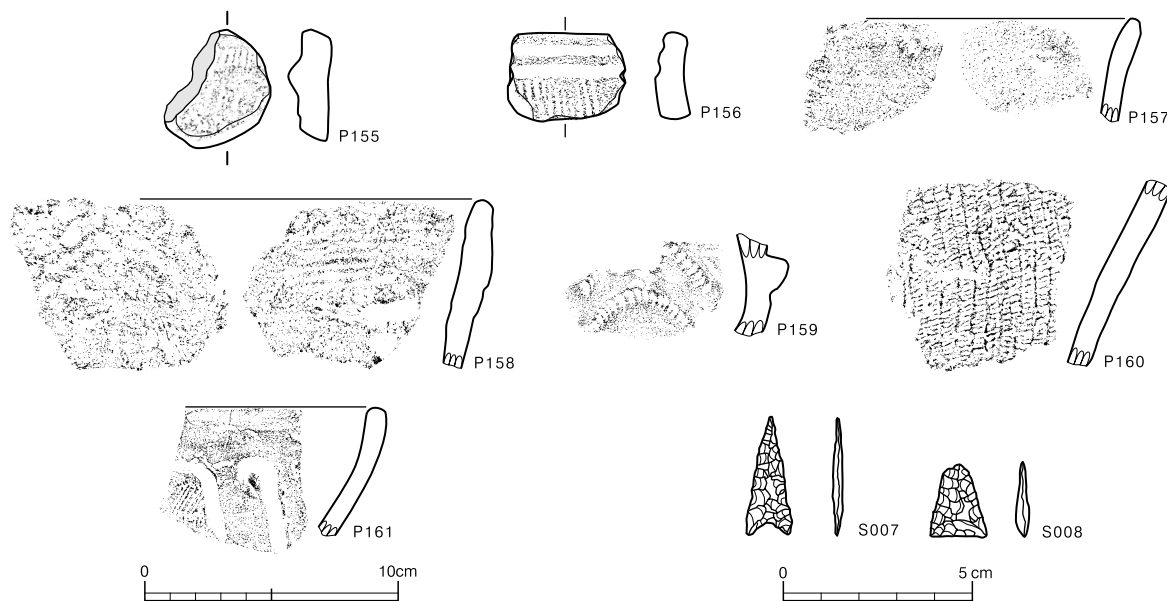
(3) 遺構外出土遺物 (第43図)

ここでは、遺構外から出土した遺物のほか、遺構から出土したものの直接遺構に伴わない縄文時代の遺物を中心に取り上げた。ただし、縄文時代の遺物は、この遺跡の所在地が該期には海であったため、きわめて少ない。いずれも余所から持ち込まれた、あるいは流れ着いたようで磨耗が著しい。

P155は2号竪穴状遺構の床下から出土した土製円板である。1/3欠損が欠損しており、厚さは1.2cmを測る。隆帯及び結節沈線を施す土器片を利用しており、縁辺部に研磨痕を有する。

P156は11号溝状遺構の覆土から出土した土器片錘で、厚さは1.2cm、重さ(25.1)gを測る。口縁部に二条の沈線を巡らせ、沈線下にLR縄文を施す土器片を利用。下辺に研磨痕あり。左右辺中ほどに刻目を有する。P157は10トレンチ内のD~E-4・5グリッドから出土した深鉢の口縁部片である。厚さは0.8cmを測り、外面に条痕文を施す。P158はC貝層中から出土した深鉢の口縁部片である。厚さは1.2cmを測り、内外面ともに条痕文を施し、胎土に繊維含む。P159は4トレンチII層出土の深鉢胴部片である。厚さは1.1cmを測り、隆帯及び結節沈線を施す。P160は1号住調査の際に設定したサブトレンチから出土した深鉢胴部片である厚さは1.0cmを測り、RL縄文を施している。P161は6トレンチII層出土の深鉢口縁部片である。厚さは1.0cmを測り、波状口縁をなす。幅広の沈により蕨手状文等を施している。

S007は11号溝状遺構の覆土から出土した石鏃である。完形。長さ3.2cm、幅1.2cm、重さ0.8gを測る。石質はチャートで、整形および刃部の調整緻密である。S008は2号溝状遺構の覆土の石鏃である。長さ1.9cm、幅1.4cm、重さ0.9gを測り、石質はチャートである。整形粗く、摩滅著しい。



第43図 遺構外出土遺物

第4章 まとめ

今回の調査は、前回平成14・15年度に実施した横浜市立杉田小学校改築に伴う埋蔵文化財調査に引き続き、前回調査対象外であった校庭部分を主とした部分の本発掘調査となっている。調査を実施した結果、検出された遺構は、竪穴住居址2軒、竪穴状遺構3基、溝状遺構15条、貝層4か所、土坑5基、墓1か所、中世地業面2か所が検出された。

これらの遺構の所産時期は、古墳時代から中世までの長い間にわたっている。しかし、連続して営まれているわけではなく、おおむね、4つの時期に分けることができる。

最も古い時期は、古墳時代前期の遺構群である。2号竪穴状遺構や1・5号溝状遺構、C・D貝層などがそれにあたる。遺物が集中して出土したC・D貝層の遺物の特徴をみると、ハケ目調整を主体とする台付き甕形土や複合部の薄手の口縁をもつ壺形土器など、古墳時代前期五領期の特徴を強く出している。また、破片資料ではあるが、S字形の口縁をもつ甕形土器のような西方地域の影響を受けている土器も確認されている。

D貝層周辺では土器がまとまって出土している。これらの遺物の周囲には掘り込みは確認できず、生活面（遺構確認面）にまとめて置いたような状況であった。出土土器の大半は赤彩が施されているもので、小型丸底壺や碗など、一般的に竪穴住居址から出土する土器組成とは若干趣を異にしていた。また、表土除去時に出土したため残念ながらその出土位置は特定できないが、卜骨も周辺から出土している。これらの点から、この場所は祭祀に関する跡であった可能性が高い。ただし、貝層との直接的な関係はつかめなかっていない。

市内では、金沢区の瀬戸神社旧境内地内遺跡で同じような遺構が調査されている。この遺跡では、海岸線に存在する大きな岩陰に、小型丸底壺や高坏などの略完形土器がまとまって出土し、それらの土器に混じって鏡形や勾玉状の石製品などが出土している。本遺跡の場合は海浜（砂浜）であるが、土器の組み合わせなど似通っている点が多く、古墳時代前期の祭祀についての新たな資料となる。

次の時期は、やや空白があり古墳時代後期（鬼高期）となる。1・2号住居址などの遺構がその時期にあたる。前回の調査では、この時期の遺構は確認されていないが、昭和47年の調査ではこの時期の遺物が多く認められている。今回の調査においては、あまり遺物は出土しなかったが、出土した坏形土器では、この時期特有の体部と口縁部の境に段を有するものが目立っている。

続いては1～3号竪穴状遺構などの時期があてられる。甕形土器では、口縁が外側に開きナデ調整を施し、胴部が縦方向のケズリが施される甕形土器（P030）があり、坏形土器では前段階の特徴である体部に段を有するものも出土するが、P071のように体部に削り調整が施されているものが認められ、奈良時代（7世紀前半）の特徴を呈している。

最後の時期は、1・5号溝状遺構を除く溝状遺構や地業面等が構築された時期となる。10号溝状遺構など多くの溝状遺構は、シルトブロックを用いた地業面を掘り込んで構築されている。とくに体育館裏側で検出された溝状遺構は、すべてこの地業面から掘り込まれている。これらの溝状遺構は、ほぼ東西方向またはそれに90度方向を離れた南北方向に走行し、規格性があるように見受けられる。溝状遺構からは、瓦やかかわらけなどの中世遺物が確認されており、地業面の構築時期は中世に求めることができる。

かわらけについては、溝状遺構にとどまらず多く出土している。全体的に小振りなものが多く、皿形に近い器高の低いものが目立っている。大きめなものでは、体部にやや丸味をもち、わずかに口縁が内湾するものが認められ、それらの特徴からみておおむね14世紀前半代の時期に相当するものと考えた。

また、この時期と前段階の時期との間に属する遺構は検出されていない。しかしながら、中世遺構の堆積土中には9世紀代の須恵器等の混入もみられ、これらの遺物を使用していた人々の遺構が調査区外の周辺に存在している可能性も考えられる。

本遺跡の場所は、東漸寺の寺域内にあたっている。東漸寺は、正安三年（1,301）に開かれ、開基は北条宗長（ -1,302 北条時政から数え5代目）とされている。また、もともと真言宗の寺院であったのを明窓宗鑑（明覚禪師）が禅宗寺院に改めたことが知られている。14世紀の後半になると五山十刹の制度が確立され、東漸寺は関東十刹の第7位あげられている。最盛時には釈迦堂、開山堂、方丈などの伽藍があり、境内に六寺（塔頭）、その他に六寺の末寺をもっており、一辺八丁（町）四方が寺域になっていたといわれている。

現在の東漸寺（もとは塔頭のひとつの眞楽庵）釈迦堂の裏手にあたるこの辺りは、当然境内に位置しており、地業や建物などの基礎が検出されてもおかしくない場所である。残念ながら、伽藍等が示されている絵図が現存していないため、その詳細は不明であるが、眞楽庵周辺の地業であった可能性が考えられる。その地業面を掘り込んで構築されている溝状遺構は、境内に存在するさまざまな建物を区切り、また、排水などに使用していたものと考えるのが妥当であろう。

さらに、12トレンチ内で1号遺構として調査した地業面では、シルトブロックのみで地業している部分が検出された。こちらは、攪乱によって著しく破壊され、ごく一部が検出されたに過ぎないが、4トレンチ等で検出された地業面とは明らかに異なっている。地業層を構成する10cm以上の厚みは、すべてブロックのみで構成しその上面を整えている。東漸寺と創建時期に近い金沢区の称名寺でも講堂と考えられる基壇が調査されたが、その基壇はシルトブロックを用いたものとなっている。今回検出されたブロック面がどこまで続いているかは分からないが、その規模によっては、なんらかの建築物の基壇となる可能性も有している。

杉田東漸寺貝塚は、前回の調査とともに、小学校改築工事の一環で調査を行なったもので、前回調査では校舎の基礎の合間に多くの遺構が残っていた。今回の調査も同様で、かなり攪乱はされているものの多くの遺構が残存していた。また、配管等に伴う制限された調査区のため前回の調査区ほど広くなかったせいもあり、規模が大きい中世遺構などの全貌はつかめなかった。しかし、前回の調査とあわせて、遺跡の遺存状態が思いのほか良好であったことが判明した。幸い東漸寺の周辺は古くから開発されているため、基礎が深くまで達しているような建物もさほど多くはない。このため、東漸寺関連の遺構がまだ遺存している可能性は考えられる。近年、東京では、池袋や六本木など再開発に伴って遺跡が調査されている例も多い。京浜急行とJRの2つの鉄道路線に挟まれているという利便性のこの高いエリアも、将来発掘調査が実施されれば、いまだ不明な点が残されている中世寺院東漸寺の全貌も解明されよう。

また、調査区内において弥生時代以前のものと考えられる自然貝層が検出された。こちらは埋蔵文化財ではないが、縄文時代から弥生時代にかけての海岸線が後退していく際の資料としては、非常に貴重なものであった。この自然貝層を含む自然遺物については、巻末に付編としてその分析・考察を掲載し

ている。

【参考文献】

- | | | |
|--------------------------|------|----------------------------|
| 磯子区政50周年記念地業委員会 | 1978 | 『磯子の史話』 |
| 神奈川県文化財協会 | 1980 | 『東漸寺』 |
| 神奈川県立博物館 | 1971 | 『神奈川県立博物館発掘調査報告 5 左藤内遺跡』 |
| 川上 久夫・塚田 明治・剣持 輝久 | 1977 | 「横浜市東漸寺貝塚の調査」『横須賀考古学会年報20』 |
| 西村 正衛 | 1954 | 「横浜市屏風ヶ浦森町貝塚」『日本考古学年報 2』 |
| 西村 正衛 | 1961 | 「神奈川県横浜市杉田貝塚」『日本考古学年報 9』 |
| 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団 | 2004 | 『杉田東漸寺貝塚発掘調査報告』 |

付編 1 杉田東漸寺貝塚出土鉄製品の成分分析調査

横浜市磯子区杉田に位置する杉田東漸寺貝塚から出土した鉄製品の理科学的調査を行った。その結果の要旨は以下の通りである。

1. 地鉄成分と非金属介在物の種類から、本調査の鉄器素材は鉄鉱石系原料から造られた素材が使用されたものと判断された。
2. 地鉄の炭素量は0.1%以下と非常に軟らかい鉄が使用されていた。通常の利器に使用されている鉄素材の炭素量は、少なくとも0.3%以上はあることから、本鉄器は実用的なものとはいいがたい材質であった。

杉田東漸寺貝塚出土鉄製品の成分分析調査

日鐵テクノリサーチ

1. いきさつ

横浜市磯子区杉田に位置する杉田東漸寺貝塚から出土した鉄製品の理科学的調査を行った。

2. 調査試料

調査試料の鉄製品はC貝層から出土し、長さ：11.4cm・幅：2.0cm・厚さ：0.4cm・重量24.5grを計り、刀身は両刃で槍先のような形状を示すが両端は欠損している。

3. 調査方法

鉄製品は外観の特徴を記録した後、茎部側縁から約3×3mmに切取った。切り取った試料は、厚さ方向が観察面になるように樹脂埋め込みし、鏡面まで研磨した後、金属顕微鏡にて断面組織を観察した。また、地鉄ならびに非金属介在物（金属鉄中に存在するスラグ）について、X線マイクロアナライザー（EPMA）にて分析を行い、それぞれの成分を求めた。以下に使用した装置を示した。

外観観察：デジタルカメラ Finepix F401型（富士写真フィルム製）

断面観察：金属顕微鏡 BX51M型（オリンパス光学工業製）

成分分析：X線マイクロアナライザー（EPMA） JXA-8100型（日本電子製）

4. 調査結果および考察

別紙の写真に断面組織を示した。地鉄は数10～数100 μ mの大きなフライト（ α Fe；炭素を殆ど含まない軟らかい鉄組織）結晶で、内部にいくにしたがい結晶粒子の大きさが小さくなり、一部にパーライト（ α Fe+Fe₃C |セメントイト；鉄-炭素の共晶組織|）が存在する。平均炭素量は0.1%以下であった。調査箇所が棟部分であり刃部とは組織的に異なるものの、この種の鉄器は総じて一体でできていることから、本調査試料の槍身部分も、非常に軟らかい鉄になっていることと思われる。

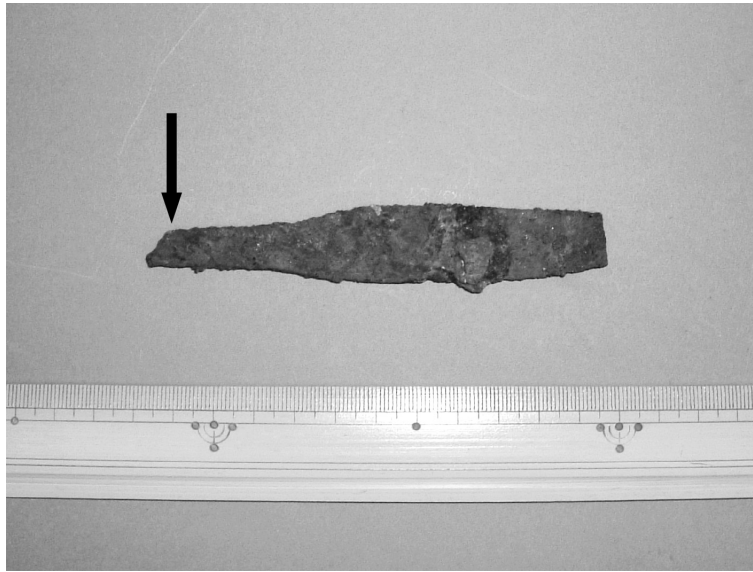
一方、金属鉄中に存在する非金属介在物中は、地鉄中に細長く比較的多く存在する。非金属介在物は、ウスタイト（理論化学組成；FeO）結晶を伴う非晶質珪酸塩からなるものでチタン化合物は存在しない。

表 地鉄および非金属介在物の組成（EPMA；単位 重量%）

地鉄	C	Si	Mn	P	S
	0.08	0.01	0.11	0.05	0.03
非金属介在物 (ウスタイト)	FeO	Al ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	K ₂ O
	98.6	0.32	0.13	0.31	0.08

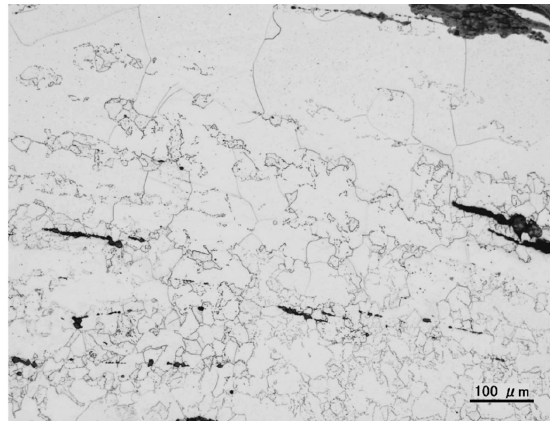
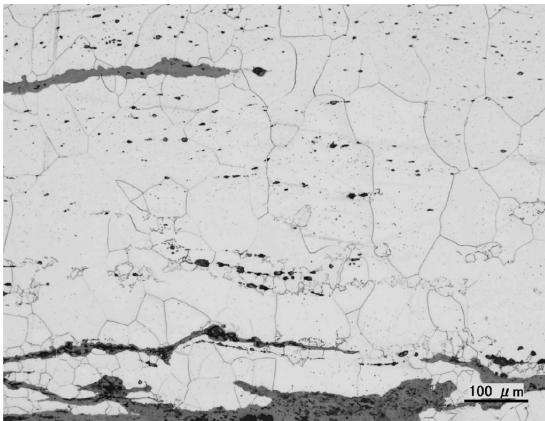
地鉄成分および非金属介在物の種類から、この鉄器の鉄素材は鉄鉱石系原料から造られた素材が使用されたものと判断される。また、通常の利器に使われている鉄素材の炭素量は、少なくとも0.3%以上はあることから、本調査試料の鉄器は実用的なものとはいえない材質である。

外 観



矢印；調査資料採取箇所

金属組織



非金属介在物

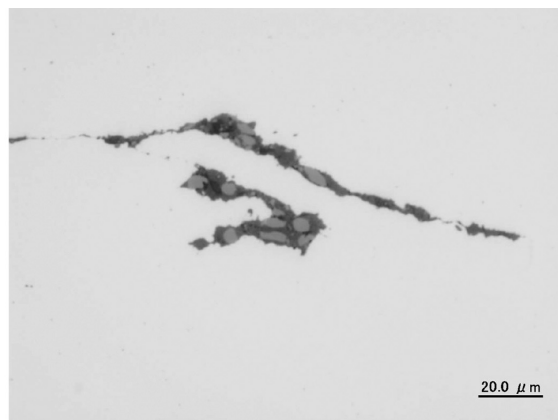
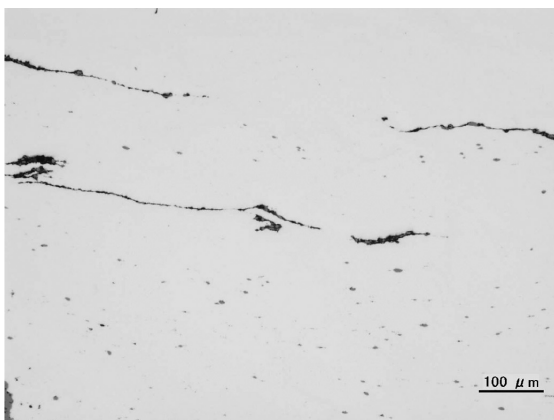


写真 杉田東漸寺貝塚出土鉄器の外観と断面組織

付編 2 杉田東漸寺貝塚（横浜市）出土人骨

平田 和明・長岡 朋人

聖マリアンナ医科大学解剖学教室

1. はじめに

横浜市磯子区杉田町一丁目 8 - 1 所在の杉田東漸寺貝塚（平成17年度発掘調査）より出土した人骨などの同定を記載する。

性別判定と年齢推定の方法は、Ubelaker（1989）に従った。

2. 1号墓出土人骨

人骨 1号墓 年齢：10代後半、性別：女性

全身骨が出土している。出土部位には重複がなく 1 個体である。

頭蓋は蝶形骨片と下顎骨右半分が残っている。歯式は以下の通りである。

8 7 6 ○○○○○

歯の咬耗はいずれの歯もエナメル質のみで象牙質に達しない。Brocaの1度である。

鎖骨は右の胸骨端が残る。化骨がみられない。

肩甲骨は左右のいずれも肩甲棘のみが残る。

上腕骨は右の遠位端、左の近位半分が残る。尺骨は左の近位端が残る。橈骨は左の骨体が残る。また、手根骨 1 個・基節骨 2 個・中節骨 1 個が残る。いずれの骨端も軟骨癒合がみられる。

大腿骨は右では骨体のみ、左では近位半分が残る。粗線は発達していない。脛骨は右では近位端が、左では骨体が残る。腓骨は右の遠位骨端が残る。いずれの骨端も軟骨癒合がみられる。

椎骨は頸椎 1 個・胸椎 8 個・腰椎 2 個が残る。

肋骨は左第 1 肋骨と第 2 ~ 1 2 肋骨片が残る。第 2 ~ 1 2 肋骨の胸骨端は 2 個が残るが、いずれも肋軟骨骨化はみられない。

骨盤は左右の寛骨が残る。左右ともに腸骨耳状面と坐骨の一部が残る。大坐骨切痕は広い。耳状面は、billowingがあるが小孔や大孔やリッピングがない。腸骨稜の軟骨の癒合がみられない。

性別は、大坐骨切痕から女性と判定できる。年齢は、歯・肋骨胸骨端・耳状面・腸骨稜から10代後半と推定できる。

骨病変はみられなかった。

3. トレンチその他出土の人骨および動物骨

4 T

ヒトの大腿骨片・脛骨片・腓骨片・頭蓋片が残る。

他の四肢長骨片では、動物種と部位が同定できない。

5 T、6 T、8 T

骨片である。動物種と部位の同定ができない。ヒト以外の種を含む可能性が高い。

13 T

ヒト頭蓋骨片と歯が残る。頭蓋片は左右側頭骨錐体である。歯は小白歯が1本と大白歯が3本である。

文献

Ubelaker, D. H. (1989) Human skeletal remains (2nd edition) . Taraxacum, Washington D. C.

付編 3 杉田東漸寺貝塚出土脊椎動物遺体

姉崎智子*・樽創**

1. はじめに

神奈川県杉田東漸寺貝塚は、横浜市磯子区杉田1丁目8-1に所在する。京浜急行杉田駅の北東約0.2km、北緯35度23分07秒、東経139度37分00秒に位置する（（財）横浜市ふるさと歴史財団2005）。

杉田小学校の校舎改築・校庭整備の一環として、2003年4月3日から7月23日、2005年4月25日から6月27日にかけて発掘された。古墳時代前期に帰属するA、B、C、D貝層、住居址、土坑などの遺構より、保存状態が良好な脊椎動物遺体が検出された。

ここでは、これらの動物遺体の分析結果について報告する。

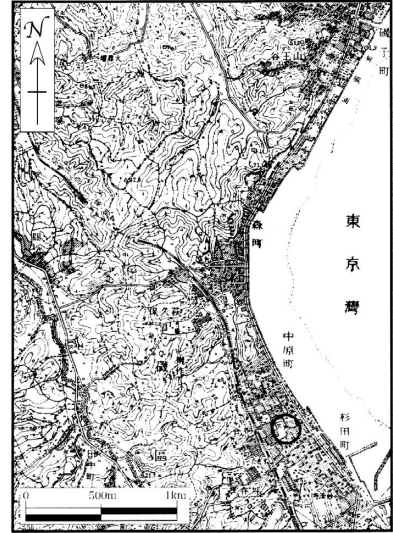
2. 分析方法

陸生哺乳類については、基本的に大きさが1cm以上の骨片および歯牙の全資料を同定作業の対象とした。作業の便宜上、各資料に個別番号をつけた。

同定作業には、神奈川県立生命の星・地球博物館、群馬県立自然史博物館、九州大学大学院比較社会文化研究院江田真毅氏が所蔵する現生標本を比較として用いた。161点を分析し、部位および科以下のレベルまで同定できたのは112点であった。

出土量の多かった陸生哺乳類については、部位・種同定のほかに実施した分析項目は、骨の癒合段階、歯牙の萌出・交換による年齢査定、骨の残存状態、形態の肉眼観察、計測を主体とする5項目である。今回は資料の構成についての基礎的な集計結果を中心に掲載する。計測は、von den Driesch (1976) にしたがった。

同定資料数 (NISP) は、同定された骨幹部破片や骨端部を残す資料の総和である。また、哺乳類遺体については最小個体数 (MNI) の推定を行った。これは、各遺構別および遺構外にわけて算出をおこなった。各遺構から出土した動物骨をまとめて観察し、部位の重複や骨年齢を考慮したほか、可能な限りペアリングをおこなった。そののち、



自然地形を示すため、昭和26年国土地理院発行1/25,000地形図戸塚を利用（縮尺1/50,000）

図1 杉田東漸寺貝塚位置図 (○印)

表1 杉田東漸寺貝塚出土脊椎動物一覧

ウニ綱	Echinoidea	
甲殻綱	Crustacea	
	フジツボ目	Cirripedia sp.
軟骨魚綱	Chondrichthyes	Chondrichthyes spp.
	軟骨魚綱種不明	Rajiformes sp.?
	エイ目?	
硬骨魚綱	Osteichthyes	
	マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
	カタクチイワシ	<i>Engraulis japonicus</i>
	カツオ属	<i>Katsuwonus</i> sp.
	タイ科	Sparidae sp.
	マダイ	<i>Pagrus major</i>
	スズキ属	<i>Lateolabrax</i> sp.
	ヒラメ科	Paralichthyidae
	ヒラメ?	<i>Paralichthys olivaceus?</i>
	フグ科	Tetraodontidae sp.
	フサカサゴ科	Scorpaenidae sp.
両生綱	Amphibia	
	カエル目	Anura sp.
爬虫綱	Reptilia	
	ウミガメ科	Cheloniidae sp.
鳥綱	Aves	
	キジ科	Phasianidae sp.
哺乳類綱	Mammalia	
	ネズミ科	Muridae sp.
	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i>
	クマネズミ属	<i>Rattus</i> sp.
	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
	シカ	<i>Cervus nippon</i>
	クジラ目	Cetacea sp.

表2 杉田東漸寺貝塚出土脊椎動物遺体同定破片数

	A貝層	B貝層	C貝層	D貝層	1・2土坑	1号住居址	1号竪穴	2号溝状遺構	2号住居址	3号竪穴	9号溝状遺構	その他	計
ウニ													2
フジツボ													1
エイ目			1									1	2
サメ類			2									1	3
マイワシ			1										1
カタクチイワシ			1										1
カレイ目						1							1
スズキ属							1					1	1
マダイ							1						1
タイ科		1	3	2									6
カツオ属												1	1
フグ科		1											1
フサカサゴ科												1	1
カエル目		3	15	1								1	20
ウミガメ科												2	2
キジ科									1				1
タヌキ								1					1
イノシシ	1	3	6	1		7		1		1	1	8	29
シカ			1	1	2	2			1		1	9	17
ハタネズミ			1										1
クマネズミ属									1				1
ネズミ科			1										1
クジラ目										1			1
ヒト							1					2	3
計	1	8	35	5	2	11	1	2	3	2	2	27	99

骨骨格部位のうちもっとも数の多かったものの点数をもって最小個体数とした。

3. 分析結果

2003年に発掘された資料では、13点を分析し、10点を同定することができた。これには、魚類では板鰓類椎骨1点、タイ科棘1点、哺乳類ではイノシシ（下顎左右第1切歯各1点、左踵骨1点）、シカ（角破片2点、左寛骨恥骨部1点、中節骨1点）、ネズミ科右上顎第1切歯1点が含まれる。

2005年発掘資料では、148点を分析し102点を同定することができた。これには、ウニ類、フジツボ類、板鰓類、マイワシ、カタクチイワシ、カツオ属、マダイ属、スズキ属、ヒラメ科、フグ科、カエル類、ウミガメ科、キジ科、ハタネズミ、クマネズミ属の一種、ネズミ科、イノシシ、シカ、タヌキ、クジラ類が含まれる（表1～3）。

以下、2005年に発掘された主な貝層、遺構について述べる。

表3 杉田東漸寺貝塚出土哺乳類 推定最小個体数

	A貝層	B貝層	C貝層	D貝層	1・2土坑	1号住居址	1号竪穴	2号溝状遺構	2号住居址	3号竪穴	9号溝状遺構	その他	計
タヌキ							1	1					1
イノシシ	1	1	1	1		1	1	1		1	1	1	9
シカ			1	1	1	1			1		1	2	8
ハタネズミ			1										1
クマネズミ属									1				1
クジラ目										1			1
ヒト						1						1	2

A貝層

オスのイノシシ左下顎骨が1点検出された（写真2：3）。結合部は一部欠損し、下顎体、下顎底、下顎枝が残存する。歯牙は、犬歯、第1および第2大臼歯が植立する。犬歯は萌出途中であり、歯根部が閉鎖してないことから、オスと同定される。第2大臼歯の萌出は完了しており、第3大臼歯の歯槽部の

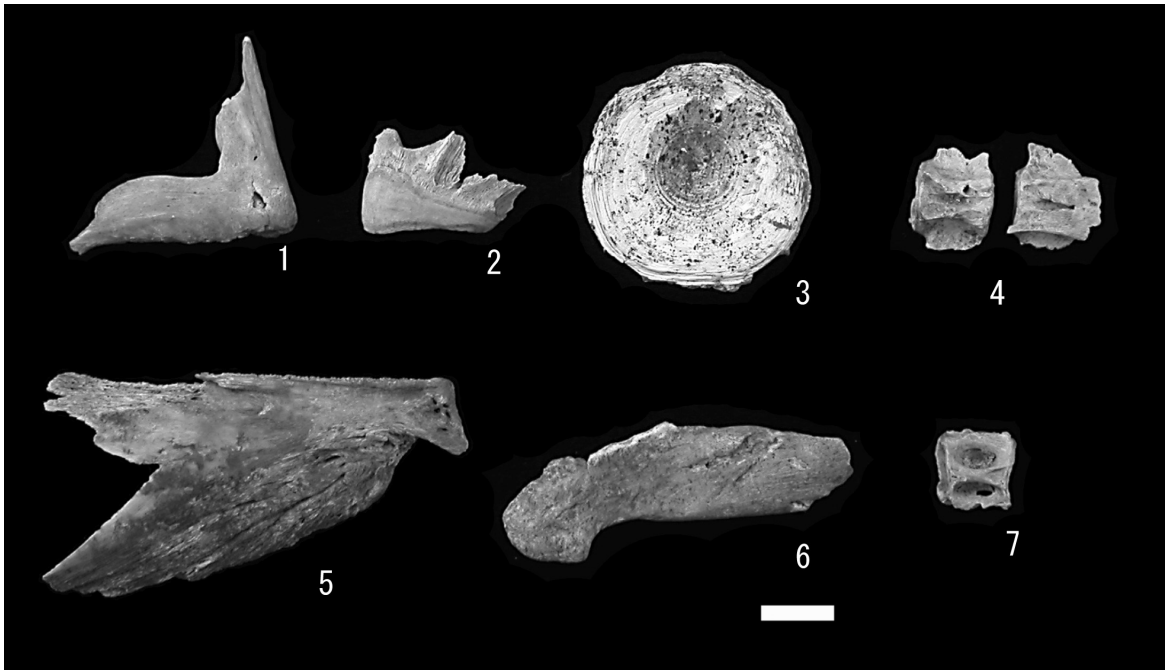


写真1 1. マダイ右前上顎骨、2. フグ左上歯板、3. サメ類椎骨、4. カツオ属椎骨、
5. フサカサゴ科右歯骨、6. マダイ亜科左上顎骨、7. カツオ属椎骨

開放が進行していないことから、林ほか（1977）のII段階に分類される。臼歯の計測値は次のとおりである。M1 近遠心径16.63mm、M1 第1 咬頭対頬舌径10.3mm、M1 第2 咬頭対頬舌径11.25mm、M2 近遠心径20.86mm、M2 第1 咬頭対頬舌径13.95mm、M2 第2 咬頭対頬舌径14.34mm。

B 貝層

メスのイノシシ上顎骨、イノシシ頭蓋骨破片のほか、タイ科顎骨、フグ科左上歯板、カエル寛骨と四肢骨破片が検出された。カエルは、自然混入だと思われる。

C 貝層

最も脊椎動物の出土量が多く、その内容は多岐にわたっている。ウニ類棘1点、フジツボ類1点、エイ目椎骨1点、サメ類椎骨1点、マイワシ1椎骨、カタクチ

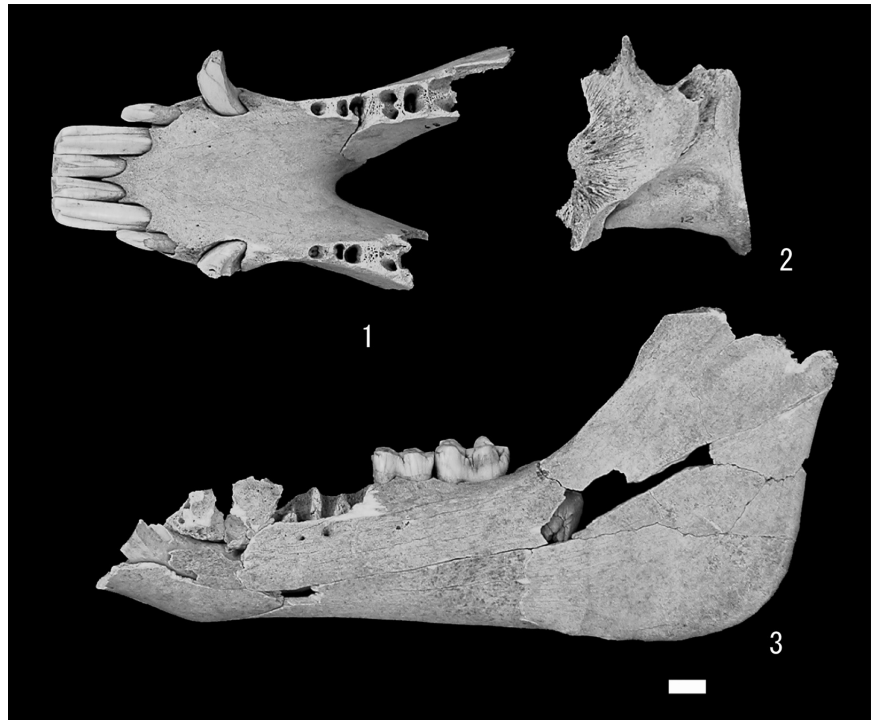


写真2 1. イノシシ下顎骨 メス、2. イノシシ右側頭骨、
3. イノシシ左下顎骨 オス

イワシ1椎骨、マダイ属左上顎骨1点、タイ科顎骨破片1点、椎骨1点、カエル類15点、イノシシ6点（下顎：左乳犬歯、右犬歯、左第2大臼歯、右寛骨、中手・中足骨、肋骨破片）シカ1点左下顎第3大臼歯、ハタネズミ下顎骨1点、ネズミ類左第1切歯1点が検出された。カエルは1mmのフルイで検出されたもので、少なくとも2個体は含まれる。イノシシ下顎右犬歯はオスのもので萌出が完了しており、乳犬歯も存在することから少なくとも2個体は含まれる。ハタネズミは1mmのフルイで検出されたもので、同定は岩佐真宏先生（日本大学生物資源科学部）による。

D貝層

マダイ属右上顎骨、タイ科頭骨、カエル類右上腕骨、椎骨、イノシシ仙椎、シカ角破片が検出された。カエル類は、1mmのフルイで検出された。

1・2土坑

シカ左肩甲骨、シカ上顎遊離歯が出土した。肩甲骨の関節臼は癒合しており、BG (von den Driesch, 1976) は29.43mmである。

1号住居址

ヒラメ科尾骨1点、マダイ右前上顎骨1点、シカ（角破片、左寛骨）、イノシシ（右下顎第2乳切歯、右下顎第4小白歯破片、左上顎第1大臼歯、右脛骨骨幹部一遠位端、左腓骨骨幹部一遠位端、左踵骨）が検出された。シカの角には加工痕がみとめられた。イノシシの脛骨、腓骨の骨端、踵骨隆起は癒合している。



写真3 1. シカ右上腕骨骨幹部一遠位端、2. シカ左肩甲骨、3. シカ角、4. シカ右寛骨、5. イノシシ右寛骨、6. イノシシ右脛骨骨幹部一遠位端、7. イノシシ腫骨

2号住居址

キジ科左鳥口骨、クマネズミ属の一種左下顎骨（写真4）、シカ右上顎第3大臼歯を確認した。クマネズミ属の同定は、岩佐真宏先生による。



写真4 クマネズミ属左下顎骨

1号竪穴状遺構

イヌ?左大腿骨骨幹部破片、ヒト左下顎第4小白歯を確認した。ヒトの第4小白歯は萌出が完了している。

2号溝状遺構

タヌキ右切歯骨、左上顎骨歯槽部、イノシシ左上顎骨歯槽部を確認した。

3号竪穴

イノシシ左脛骨骨幹部一遠位端、シカ?上腕骨破片、クジラ類破片を確認した。イノシシ脛骨の遠位部は癒合している。

9号溝状遺構

シカ左大腿骨骨頭、イノシシ右上顎犬歯（メス）を確認した。

その他

遺構外からは、エイ目椎骨1点、サメ類椎骨1点、スズキ属右主鰓蓋骨、タイ科左上顎骨1点、コブダイ右歯骨、カツオ属椎骨1点、カエル類右肩甲骨1点、ウミガメ科頭部破片、左下顎骨各1点、シカ（角破片4点、右下顎骨、右上腕骨骨幹部一遠位端2点、右寛骨、右肋骨）、イノシシ（左右下顎骨・結合部、頭蓋骨側頭部破片、上顎遊離歯破片、左寛骨、左脛骨、右踵骨、中手・中足骨、右肋骨）、ヒト（頭蓋骨頭頂部破片、左寛骨）が検出された。このほかに、種不明な鳥骨破片がある。また、シカの右肋骨は、体部に複数箇所焼痕のあるト骨であった。

4. まとめ

分析を行った結果、C貝層からもっとも動物骨が検出されており、ついで1号住居址からの出土が多かった。魚類では、カツオ属、マイワシ、カタクチイワシなどの外洋性表層回遊魚と、マダイなど砂礫・岩礁性の外洋沿岸性、内湾性のスズキ属などがみとめられた。鳥類では、温帯の森林に棲み比較的水辺を好むキジを確認した。

哺乳類では、イノシシが他に比べて比較的多かった。その大きさは、M1近遠心径で比較すると、神奈川県弥生時代のイノシシ（池子遺跡群）の平均値よりも若干大きく、縄文時代のイノシシ（羽根尾

貝塚)の平均値よりも小さい(図1)。このほかに、シカは角の破片が多く、肋骨はト骨として利用されていた。

本遺跡の魚類や鳥類、哺乳類から示唆される利用領域は外洋と内湾、森林・湖沼域であり、遺跡の立地からみても、遺跡周辺の資源を幅広く利用していたことが伺える。

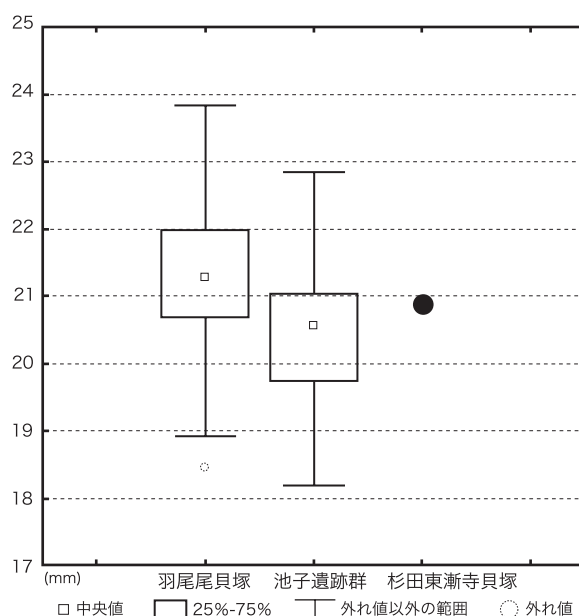


図2 杉田東漸寺貝塚のイノシシ臼歯サイズの比較

引用文献

- 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 2005 『杉田東漸寺貝塚埋蔵文化財発掘調査概報』(財)横浜市ふるさと歴史財団
 樋泉岳二、姉崎智子、江田真毅、鶴澤和宏 2003 「羽根尾貝塚の動物遺体群」『神奈川県小田原市羽根尾貝塚』玉川文化財研究所 pp.298-352.
 林良博、西田隆雄、望月公子、瀬田季茂 1977 「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣医学雑誌39-2』39-2:165-174.
 von den Driesch, A. 1976 A Guide to the Measurement of the Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum, Harvard University.

謝 辞

本遺跡出土資料を分析する機会を与えてくださいました(財)横浜市ふるさと歴史財団に感謝申し上げます。また、岩佐真宏先生(日本大学生物資源科学部動物資源科学科野生動物学研究室)、江田真毅氏(九州大学大学院比較社会文化研究院)に大変お世話になりました。記して深く御礼申し上げます。
 *姉崎智子(神奈川県立生命の星・地球博物館外来研究員。群馬県立自然史博物館)、**樽創(神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員)

付表 脊椎動物遺体一覧

No.	遺構・グリッド	層位	ふるい	種名	部位	残存状況	歯式	左右	骨端	萌出状況	性別	備考
1	1・2土坑		シカ	肩甲骨	関節臼, 頸部, 棘窩			左	癒合			
2	1・2土坑		シカ	遊離歯	上顎		M1/M2	右		萌出・磨耗		
3	D-E 5-6		イノシシ	寛骨	腸骨部, 寛骨臼, 坐骨部, 恥骨部			左	癒合			
4	D-E 5-6		ヒト	寛骨	寛骨臼			左	癒合			
5	D-E 5-6		シカ	角	破片							
6	9号溝状遺構	覆土	シカ	大腿骨	近位端 (大腿骨頭)			左	癒合			
7	9号溝状遺構	覆土	イノシシ	遊離歯	上顎		C	右		萌出・磨耗	メス	
8	23 T	I-II	シカ	寛骨	腸骨部, 寛骨臼, 坐骨部			右	癒合			
9	23 T	I-II	イノシシ	脛骨	骨幹部, 遠位端			左	癒合			
10	23 T	I-II	イノシシ	踵骨	関節部			右				咬痕あり
11	B貝層		イノシシ	上顎骨	歯槽部		(xxxP3x)	左		萌出	メス	P3歯根のみ
12	B貝層		イノシシ	頭蓋骨	刺頭部			右				
13	B貝層		イノシシ	頭蓋骨	頬骨臼 破片			左				
14	B貝層		コブダイ	上顎骨				左				
15	12T	地業面	シカ	上顎骨	骨幹部, 遠位端			右	癒合			
16	13T	I	ヒト	頭蓋骨	頭頂部 破片							
17	21T	I	シカ	下顎骨	切歯部, 下顎体		(xxxxP2)	右		萌出・磨耗		
18	21T	I	陸獣	四肢骨	破片							
19	D貝層 B-1		陸獣	四肢骨	破片							
20	1号住居址	覆土	イノシシ	脛骨	近位端, 関節部			左	癒合			
21	1号住居址	覆土	イノシシ	脛骨	骨幹部, 遠位端			右	癒合			
22	1号住居址	覆土	シカ	寛骨	寛骨臼, 坐骨部			左				
23	1号住居址	覆土	イノシシ	fibia	骨幹部, 遠位端			左	癒合			
24	1号住居址	覆土	イノシシ	基節骨	骨幹部, 遠位端			-	癒合			
25	1号住居址	覆土	イノシシ	遊離歯	上顎		M1	左		萌出・磨耗(VII)		
26	1号住居址	覆土	イノシシ	遊離歯	下顎		dl2	右		萌出		
27	1号住居址	覆土	イノシシ	遊離歯	下顎 破片		P4	右		萌出中		
28	1号住居址	覆土	シカ	角	破片			-				加工痕あり
29	1号住居址	覆土	小獣類	椎骨	骨幹部			-				
30	1号住居址	覆土	鳥類	四肢骨				-				殊
31	1号住居址	覆土	マダイ	前上顎骨				右				
32	1号住居址	覆土	魚類	棘								
33	D貝層 B-4		陸獣	肋骨	体部 破片							
34	D-E 6-7		陸獣	四肢骨	骨幹部 破片							
34	D-E 6-7		陸獣	四肢骨	骨幹部 破片							
34	D-E 6-7		陸獣	肋骨	体部 破片							
34	D-E 6-7		陸獣	肋骨	体部 破片							
35	2号溝状遺構 (18T)		イノシシ	上顎骨	歯槽部		(P3)	左		萌出		
36	3号竪穴状遺構	1区	陸獣	四肢骨	骨幹部 破片							
36	3号竪穴状遺構	1区	陸獣	四肢骨	骨幹部 破片							
36	3号竪穴状遺構	1区	陸獣	四肢骨	骨幹部 破片							
37	D-E 5	II	シカ	肋骨	関節, 体部			右	未癒合			ト骨

No.	グリッド	層位	ふるい	種名	部位	残存状況	歯式	左右	骨端	萌出状況	性別	備考
38	16T			イノシシ	遊離歯	上顎 白歯破片						
39	12T			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
40	20T	I		シカ	上腕骨	骨幹部, 遠位端		右	癒合			
41	20T	I		イノシシ	頭蓋骨	側頭骨 破片						
41	20T	I		エイ	椎骨							焼
42	22T	I-II		陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
43	D貝層	B-3		シカ	角	破片		右				
44	3号竪穴状遺構	B-1		イノシシ	脛骨	骨幹部, 遠位端		左	癒合			
45	21T	I-II		陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
45	21T	I-II		陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
46	D-E-4-5			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
46	D-E-4-5			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
46	D-E-4-5			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
47	D-E-4-5			鳥類	四肢骨	骨幹部 破片						
48	D-E-4-5			シカ	角	破片						
49	D-E-4-5			イノシシ	中手中足 骨 II/IV	近位端, 骨幹部		-	癒合			
50	D貝層	B-6		陸獣	肋骨	体部 破片		左				
51	D貝層	精査		イノシシ	仙椎	体部, 弓部						
52	D貝層	精査		陸獣	寛骨	恥骨部 破片		左	未癒合			焼
53	10T			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
54	C貝層			イノシシ	寛骨	腸骨部, 寛骨臼, 坐骨部, 恥骨部	C	右	癒合	萌出	オス	
55	C貝層			イノシシ	遊離歯	下顎	M2	右		萌出M2-2+2		III
56	C貝層			イノシシ	遊離歯	下顎		左				
57	C貝層			陸獣	肋骨	体部 破片						
57	C貝層			陸獣	肋骨	体部 破片						
57	C貝層	B-2		陸獣	肋骨	体部 破片						
58	C貝層			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
58	C貝層			陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
59	C貝層			イノシシ	中手中足 骨 II/IV	近位端, 骨幹部						
60	C貝層			シカ	遊離歯	下顎	M3	左		萌出M3-3+3		
61	C貝層			イノシシ	遊離歯	下顎	dc	左		萌出		
62	D-E-5	II		イノシシ	肋骨	関節, 体部		右	未癒合			
63	D-E-5	II		魚類	棘							
64	D貝層	B-2		陸獣	四肢骨	骨幹部 破片						
65	2号住居址	掘方		シカ	遊離歯	上顎	M3	右		萌出		
66	A貝層			イノシシ	下顎骨	下顎体, 下顎枝	(x°xxxM12)	左		萌出M2-2+2	オス	M1:V, M2:II
67	D-E-5-6	精査		鳥類	四肢骨	骨幹部 破片						
68	D-E-5-6	精査		イノシシ	下顎骨	結合部, 下顎体	"L(I123C-xx) R(I123C-xxx)†	左右			メス	
69	D-E-5-6	精査		魚類	棘							
70	D貝層	精査		タイ科	頭骨							
71	D貝層	精査		魚類	棘							

No.	グリッド	層位	ふるい	種名	部位	残存状況	歯式	左右	骨端	萌出状況	性別	備考
72	18T	I-II		サメ類	椎骨							
73	B貝層		4mm	魚類	椎骨	破片						
74	D-E-5	II		魚類		破片						
74	D-E-5	II		魚類		破片						
74	D-E-5	II		魚類		破片						
74	D-E-5	II		魚類		破片						
75	23T	精査		シカ	角	破片						加工痕あり
76	3号竪穴状遺構覆土	2区覆土		シカ?	上腕骨	遠位部 破片						
77	C貝層 no.2		4mm	魚類	棘							
78	3号竪穴状遺構覆土	2区覆土		クジラ類		破片						
79	C貝層 no.2		1mm	ハタネズミ	下顎骨		(M1)			萌出		
80	C貝層			フジツボ		破片						
81	14T	遺構覆土		ヒト	遊離歯	下顎						
82	2号住居址	掘方		クマネズミ属の一種	下顎骨	下顎体、下顎枝	P4	左		萌出		
83	2号溝状遺構(18T)			タヌキ	切歯骨	I3部	(I1M123)	左		萌出		
83	2号溝状遺構(18T)			タヌキ	上顎骨	P12部		右				
84	20T	II~自然貝層		シカ	角	破片		左				
85	D-E-5	II		不明		破片						
86	20T	砂層		ウミガメ	下顎骨	下顎		左				
87	20T	砂層		ウミガメ	頭部	側頭骨 破片						
88	C貝層 no.1		1mm	ネズミ類	遊離歯		I1	左				
89	14T	遺構覆土		イヌ?	大腿骨	骨幹部 破片		左				
90	C貝層 no.2		1mm	小獣類	四肢骨	骨幹部 破片						
91	C貝層 no.2		1mm	食肉目	遊離歯	破片						
92	C貝層 no.2		1mm	食肉目	遊離歯	破片						
93	C貝層 no.1		1mm	カエル	上腕骨	骨幹部—遠位端		左				
94	C貝層 no.1		1mm	カエル	脛骨	骨幹部 破片						
95	C貝層 no.2		1mm	カエル	大腿骨	骨幹部—遠位端		右				
96	C貝層 no.1		1mm	カエル	中足骨	近位部—遠位部						
97	C貝層 no.1		1mm	カエル	橈尺骨	近位部—遠位部						
98	C貝層 no.2		1mm	カエル	脛骨	骨幹部 破片						
99	C貝層 no.1		1mm	カエル	四肢骨	骨幹部—遠位端		右				
100	C貝層 no.1		1mm	カエル	大腿骨	骨幹部—遠位端		右				
101	C貝層 no.2		1mm	カエル	黄骨							
102	C貝層 no.1		1mm	カエル	上腕骨	近位部—遠位部		左				
103	C貝層 no.1		1mm	カエル	上腕骨	近位部—遠位部		右				
104	B貝層		1mm	カエル	黄骨			左				
105	C貝層 no.2		1mm	カエル	四肢骨							
106	C貝層 no.2		1mm	カエル	四肢骨							
107	C貝層 no.2		1mm	カエル	四肢骨							
108	C貝層 no.1		1mm	カエル	ひ骨							
109	D貝層		1mm	カエル	椎骨							
110	D貝層		1mm	カエル	上腕骨			右				
111	21T (C貝層付近)	精査		カエル	肩甲骨	骨幹部—遠位部		右				

No.	グリッド	層位	ふるい	種名	部位	残存状況	歯式	左右	骨端	萌出状況	性別	備考
112	B貝層		1mm	カエル	四肢骨							
113	B貝層		1mm	カエル	四肢骨							
114	B貝層		4mm	タイ科	顎骨	破片						
115	C貝層 no.1		1mm	タイ科	顎骨	破片						
116	C貝層 no.1			イノシシ	肋骨	破片						
117	D-E-5-6	精査		カツオ	椎骨							
118	C貝層 no.1		1mm	イワシ	椎骨							
119	C貝層 no.2		1mm	エイ	棘							
120	1号住居	覆土		カレイ目	尾骨							
121	D貝層	精査		タイ科	上顎骨			右				
122	12T	精査		スズキ属	主鰓蓋骨			右				
123	10 pit			タイ科	上顎骨			左				
124	C貝層			タイ科	上顎骨			左				
125	20T	I-II		フグ	歯骨			右				
126	C貝層 no.1		4mm	サメ類	椎骨							焼
127	C貝層 no.2		1mm	サメ類	椎骨							
128	C貝層 no.1		4mm	タイ科	椎骨							
129	C貝層 no.2		1mm	カタクチイワシ	椎骨							
130	C貝層 no.2		1mm	ウニ	棘							
131	C貝層 no.2		1mm	ウニ	棘							
132	2号住居址	掘方		キジ類	鼻口骨			L				

付編4 第3次杉田東漸寺貝塚発掘調査で出土の貝類について

松島義章*・田口公則**・川名ひろみ***

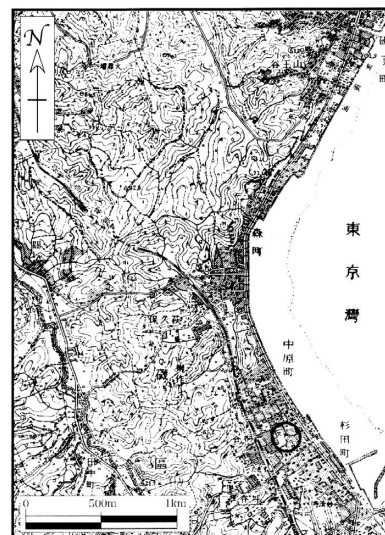
1. はじめに

この報告は古墳時代前期の杉田東漸寺貝塚から出土した貝類をもとに、その貝類が示す生態的特徴から推測できるその時代の根岸湾沿岸の自然環境と、当時の貝塚人が食用とした貝類について考察したものである。

杉田東漸寺貝塚は横浜市磯子区杉田一丁目8-1番、臨濟宗建長寺の末寺である靈桐山東漸寺の旧境内にあり、図1に示すように現在の横浜市立杉田小学校敷地に位置する（横浜市教育委員会 財団法人横浜ふるさと歴史財団，2004）。

本地点は根岸湾を取り囲むように本牧～磯子にかけて発達する本牧・根岸台地（下末吉面）から続く一段高い丘陵（多摩面）の前面を、狭く縁取る沖積低地上に位置している（図1）。1965年以前の根岸湾沿岸は、海岸線沿いの国道16号線には杉田まで横浜市電が通り、東側の海岸は海水浴のできる遠浅な砂浜となっていた。東漸寺貝塚遺跡のある地点は、沖積低地でも海拔4m前後を示す微高地上に位置していて、海を眺めることができた。さらに遺跡の背後に急崖をもつてみられる台地～丘陵上には、縄文時代中期の集落址を主体とする左藤内遺跡、縄文中期の峰ヶ台貝塚遺跡、縄文中期～後・晩期の杉田貝塚など縄文時代の遺跡が多数知られている（横浜市教育委員会 財団法人横浜ふるさと歴史財団，2004）。

今回調査をした杉田東漸寺貝塚出土の貝類は、平成17年4月25日～6月27日まで実施された横浜市立杉田小学校校庭整備に伴う第3次埋蔵文化財本発掘調査で採取された貝類資料である（財団法人横浜市ふるさと歴史財団，2005）。



自然地形を示すため、昭和26年国土地理院発行1/25,000地形図戸塚を利用（縮尺1/50,000）

図1 杉田東漸寺貝塚位置図（○印）

2. 杉田東漸寺貝塚出土の貝類と自然貝層の貝類分析方法、貝類群集と主な種の特徴

調査した貝塚出土の貝類と自然貝層の貝類資料は、図2に示すように貝塚1号溝のA貝層（貝塚）とB貝層（貝塚）の2試料、5号溝のC貝層（貝塚）は規模が大きいのので東半分と西半分に分割した2試料、10TのD貝層（貝塚）の計4ヶ所5試料であり、さらにこれら古墳時代前期の貝塚出土貝類と比較するため、杉田東漸寺貝塚の基盤を構成する自然貝層（弥生時代の堆積物と推定できる貝殻を多量に含む海成沖積層とされていたが、その後の調査によって、弥生時代より若干古い縄文後期ないし晩期のものと推定される。詳しくは83ページを参照）の2ヶ所から採集した3試料の合計8試料について分析をした。

各貝類試料は自然乾燥後、4mmメッシュの篩で水洗し乾燥後、残った粗粒な試料に含まれている貝殻

を同定し、種類ごとに計数処理をした。水洗で4mmの篩を使用したのは、食用として採取された小形の貝類までがほとんど検出できると判断したからである。同定や計数処理には、可能な限り完全な個体を用いたが、貝殻が薄く弱いために破損したり、採取時に壊れたり、風化して保存のよくない個体もかなり多く含まれていた。そのため計数処理には、二枚貝類では殻頂が、巻貝類では殻口が残されている個体を基準とした。中には殻頂や殻口の破損している個体も少なくなかった。そこで殻が5分の1以上残されていて種の同定ができれば1個体とした。また、殻頂や殻口がなくても種類を決める特徴を残す殻片であれば1個体として計数した。なお、二枚貝類では1個体から左右2殻片を生じるが、1殻片を1個体として計数した。巻貝類のスガイでは殻と蓋が出土したので、それぞれを1個体として数えた。

貝塚出土の貝類で識別できた種類は、大形のものとしてアカニシ、イタボガキ、ミルクイ、オオノガイ、ウチムラサキなどであり、小形の貝ではウメノハナガイ、ツボミ、シラギク、ムギガイ、キジビキガイ、コメツブツララなどである。貝殻の破損の度合いと保存の状態をみると、殻が薄いものと大形のものほど殻の破損が著しい。中でも殻の薄いユウシオガイ、テリザクラ、ヒメシラトリ、マテガイなどは多くの個体が破損している。一方でアカニシ、アズマニシキ、イタヤガイ、イガイ、ウチムラサキ、オオノガイ、イボキサゴなどの殻は5分の1以下にまで壊れているものもかなり多くみられた。また、中～小形の巻貝には発掘調査の採取の際に破損したものも多かった。

東漸寺貝塚遺構のA～D貝層：4ヶ所5試料から明らかになった貝類は、表1に示す二枚貝類23種、角貝類1種、巻貝類27種の合計51種である。一方、基盤をなす自然貝層の2ヶ所3試料から確認された貝類は、表1の二枚貝類28種、角貝類1種、巻貝類25種の合計54種である。貝類以外ではフジツボ類の殻やウニ類の殻と棘が確認できた。しかし、それらはいずれもごく少量でしかも破損が著しく、種まで同定することができなかった。そのため表1にはそれらを取り上げず貝類のみとした。

表1に示す貝類69種のうち明瞭に種まで確認できた63種はすべて現生種である。その中で自然貝層Cからわずか1個体が産出したハイガイを除く他の貝類は、いずれも現在の東京湾から相模湾沿岸で生息している。唯一確認されたハイガイは、東京湾をはじめ南関東では生息してなく、現在では瀬戸内海の一部と九州有明海に限られて分布している希少種である。

そこで63種それぞれの生態的特徴（生息域、生息深度、底質）を検討すると、松島（1984）が記載した海成沖積層の内湾から外洋沿岸域に生息する貝類群集に対応する群集構成種ないしその随伴種であることが分かった。すなわち、63種は a：干潟群集、b：内湾砂底群集、c：内湾泥底群集、d：内湾岩礁性群集、e：砂礫底群集、f：沿岸砂底群集、g：沿岸砂泥底群集、h：沿岸砂礫底群集、i：沿岸岩礁性群集の貝類と j：陸生巻貝類であることを確認した（図3）。

以下に各貝類群集の特徴を記す。

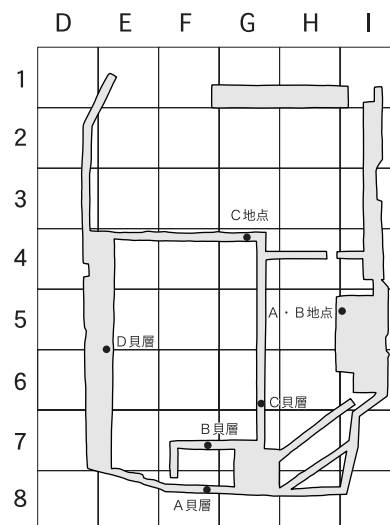


図2 杉田東漸寺貝塚の貝層および自然貝層採取地点

水域	沿岸水			内湾水					
地理的位置	湾の外側			湾口部	波食台	湾中央部	湾奥部	河口	
底質	岩礁	砂泥質	砂質	砂礫質	岩礁	砂質	シルト～泥質	砂泥質	砂泥質
潮間帯									
上部浅海帯									

図3 内湾から外洋沿岸域に生息する貝類群集（松島，1984；神奈川県立生命の星・地球博物館，2005）

a：干潟群集は内湾奥部の砂泥底干潟に生息する貝類である。構成種はマガキやハイガイ、オキシジミ、ウネナシトマヤガイ、アサリ、ヒメシラトリ、オオノガイなどの二枚貝と、イボウミニナ、ウミニナ、カワアイ、ヘナタリ、アラムシロなどの巻貝である。マガキはしばしばカキ礁を形成して、その礁が岩礁的な環境を生みだし、そこにウネナシトマヤガイやナミマガシワ、カリガネエガイ、タマキビなどの岩礁性種が加わり多様な種構成となる。この群集は海成層の下部層準に出現し、海進初頭の海面がまだ低い位置にあった時期、海水が浸入しておぼれ谷が形成されるのと一緒に見出される群集である。そのため本群集を確認することができれば、縄文海進の開始を捉えたことになる。海進最盛期にはおぼれ谷型内湾の湾奥部は広く泥質の干潟となり、すべてこの干潟群集で占められる。しかし、縄文中期の海進最盛期以降になると湾奥の干潟は砂や泥炭によって急速に埋められ、さらに上部砂層の堆積によって生息域が狭まり、群集の構成種も南関東以北ではハイガイを欠きマガキが主体に貧弱な群集構成となり衰退していく。なお、ハイガイは横浜港周辺では約1,500年前までわずかに生息していた（松島,1984）。

b：内湾砂底群集は湾奥～湾中央部の砂底に生息する貝類である。構成種はハマグリやアサリ、カガミガイ、サルボウ、シオフキ、シオヤガイ、マテガイ、ヒメシラトリ、イボキサゴ、ツメタガイなどほとんどが縄文貝塚から出土し、食用になる貝である。分級度のよい細～中粒砂層からは、両殻が合わさったハマグリ、シオフキ、アサリ、カガミガイなどが集まっているという産状と、イボキサゴが密集してハマグリ、シオフキなどが混じるタイプとがある。全体としてみれば、ハマグリ・イボキサゴを主体に多様性に富んだ群集といえる。本群集は干潟群集と対照的に海進最盛期以降、河川が搬出する土砂がつくる三角州や、沿岸流による砂州や砂堆の発達による砂浜海岸の拡大で、著しく生息域をひろげた。しか

も縄文中期以降、時代が新しくなるにつれて群集の構成種も増加する傾向を示す。この群集は1960年代の大規模な埋め立て以前の東京湾東岸や伊勢湾沿岸など、砂浜の発達する内湾ではごく普通に生息していた。しかし、1970年代以降は埋め立てによる生息地の激減と内湾環境の悪化のため、群集組成も単純なものとなり、ハマグリなどの主要種を中心に急激な衰退に向かっている。ハマグリは現在の東京湾では、絶滅状態となっている。

c：内湾泥底群集は湾中央部の泥底に生息する貝類である。構成種はウラカガミやイヨスダレ、アカガイ、トリガイなど縄文貝塚からあまり出土しないか、少量しか見出されない珍しい貝で構成される群集である。本群集の主要種であるウラカガミとイヨスダレはシルト～泥層中に両殻合わさって生没状態で含まれ、大形のアカガイやトリガイなどを伴う。殻がやや小形のツキガイモドキやゴイサギ、ヤカドツノガイ、ホトトギス、シズクガイ、チヨノハナガイなどもこれらの貝類に混じって点在する。これらの種は現在の内湾の水深数mから20mまでの泥底に広く生息する。本群集は海進前期から最盛期にかけて、各地に形成されたおぼれ谷型内湾の湾中央部から湾奥部の泥底に広く分布した。しかし、最盛期以降になると、内湾の縮小と砂相域の発達により、泥底の残る湾中央部だけに生息域が狭められた。このように生息環境の変化があっても干潟群集ほど大きな影響を受けることなく、現在もおぼれ谷型内湾の湾中央部に生息している。

d：内湾岩礁性群集は湾内に発達する岩礁域に分布する貝類である。三浦半島や房総半島に形成されたおぼれ谷型内湾には、規模は小さいながら岩礁が発達している。その岩礁にはオオヘビガイやキクザル、マガキ、ナミマガシワなど固着性種のほか、軟らかな泥岩やシルト岩からなる岩礁では、ニオガイモドキやカモメガイ、イシマテ、マツカゼ、セミアサリなどの穿孔貝が生息している。これらの種構成は外海岩礁性群集と異なる種組成を示す点で内湾岩礁性群集と呼ぶ。

e：砂礫底群集は湾口などの潮の流れの速い砂礫底に生息する貝類である。構成種はイワガキやウチムラサキなど殻が頑丈で大きな貝で特徴付けられる群集である。本群集は潮通しのよい湾口部や不整合直上の砂礫層中に見られる。イワガキが巨礫や基盤岩に固着し、時にイタボガキが数個ないし10数個が一つの群体をつくり、堆積面に平行に配列して見出されることが多い。ウチムラサキとかオニアサリは両殻そろい砂礫の中に埋まるような状態で、特にウチムラサキは基盤が軟らかい泥岩などの場合には泥岩中に穿孔して産出する。その分布は他の群集に比べて狭く限られる。

f：沿岸砂底群集は湾の外側、外洋に面した沿岸部の砂底に生息する貝類である。主にベンケイガイやチョウセンハマグリ、コタマガイ、ダンバイキサゴなどの、貝殻が比較的大きな貝で構成される。本群集はラミナの発達する中～粗粒砂層にはき寄せられ堆積していることが多い。これらの種以外にはサトウガイやワスレガイ、サギガイ、イソシジミなどを伴う。本群集は上述の内湾に生息する群集と異なり、縄文海進最盛期より前の時期のものは、基盤の隆起の大きい房総南端の平砂浦と大磯丘陵下原層で僅か確認された以外ほとんど見つかっていない。それは外洋水の影響を受ける沿岸の潮下帯砂底に生息するので、海進初期～前期にかけては、まだそのような環境が形成されてなかった。あっても現在の海岸線より海側（沖合）に位置していたため、これまでほとんど見出されていない。南関東では海進最盛期になって相模湾々奥の湘南砂丘地帯と三浦海岸で確認され、それ以降は砂州や砂堤の発達とともに、相模川低地、九十九里浜の平野などで広く生息していたことが明らかになった。約3,000～2,000年前以降は

さらに発展し、現在でも相模川河口付近から茅ヶ崎海岸、さらに藤沢鵠沼海岸にかけてと、房総九十九里浜海岸などで繁栄している。

g：沿岸砂泥底群集は外洋に面した沿岸沖合の砂泥底に生息する貝類である。本群集はイタヤガイやマツヤマワスレ、スダレガイ、ヤツシロガイ、ナガニシ、テングニシなどの種で構成される。

この群集は外洋に面した沿岸や、湾口が大きく開いた湾の低地に堆積した砂泥層中から見出された。沿岸砂底群集の沖合に位置する上部浅海帯下部の砂質泥底に生息する。

h：沿岸砂礫底群集は外洋に面した沿岸沖合の砂礫底から岩礁に生息する貝類である。アズマニシキやヒオウギガイが本群集の主要構成種であり、大形の巻貝のボウシュウボラやオオナルトボラ、カコボラ、ククリボラ、フジツガイなど多くの巻貝がみられる。

i：沿岸岩礁性群集は湾外の岩礁に生息する貝類である。本群集はサザエやアワビ、バテイラ、クボガイ、コシダカガンガラ、カコボラなどの巻貝からなる群集である。生息域は湾の外側に発達する岩礁海岸に限られる。堆積環境が外洋に面した岩礁域という特異なため、遺骸が保存されにくいこともあって、他の群集に比べ確認された数は極めて少ない。今回明らかになった種はイシダタミやヘソアキクボガイ、スガイ、サンショウガイ、タマキビ、レイシガイ、イボニシの7種類である。その産出数をみるとスガイの17個体以外は1個ないし2個体でいたって少ない。

j：陸生巻貝類はキセルガイ科の1種とオジナマイマイ科の1種が出土した。これらの貝殻は殻が薄く採集時に破損していて、種まで同定できなかった。なお、両種とも廃棄された貝殻層へ進入してきたものといえよう。

次に貝塚出土の主な種についてその特徴を記す。

・サルボウ：アカガイ形の二枚貝。別名、モガイとも呼ばれる。東京湾以南の内湾に生息。食用として九州や瀬戸内海からの漁獲が多い。佃煮や缶詰などひろく利用。

・ハイガイ：アカガイ形の二枚貝。現在は有明海に分布。貝塚からの出土は多量。東南アジアでは現在でも大量に漁獲される。横浜港付近では約1,500年前まで生息していた。

・アズマニシキ：扇形。北海道～九州。東北地方では、地方型のアカザラガイとして養殖され、広く食用となる。

・イタヤガイ：扇形。右殻がよく膨らむ。北海道～九州。漁獲は少ないが食用。殻を貝杓子として利用。

・イタボガキ：やや円盤状の四角形。本州～九州。砂礫底などでかたまって生息。流通は少ないが、食用。貝塚から左殻が貝輪として出土。

・シオフキ：ハマグリ形。房総以南～九州、台湾。アサリと共に採集される。干物や佃煮などで広く食用。

・マテガイ：殻は細長く、合わせると筒状。東北以南。食用。

・カガミガイ：あまり膨れないレンズ形。北海道～九州。食用。もち貝などと呼ばれる。

・アサリ：よく知られた二枚貝。日本各地の内湾に多産。食用。

・ハマグリ：よく知られた二枚貝。丸味をおびた三角形。日本各地の内湾。主産地の熊本、大分では近年少なくなった。特に千葉では稀となる。食用。

・オキシジミ：よく膨れる円形。本州～台湾。流通はほとんどない。食用。

- ・ツボミ：内湾潮間帯に分布するウミニナの殻表に付着する。ウミニナと共に採集される。食用となるか不明。
- ・イボキサゴ：北海道～九州、台湾。厚いレンズ状の形。流通はほとんどない。食用。
- ・スガイ：つぶれた球形。本州以南。クボガイなどと共に採集される。食用。ローカルに流通。
- ・ヘナタリ：内湾汽水域に分布。ウミニナと共にローカルに食用。
- ・イボウミニナ：内湾泥底に棲み、ローカルに食用。
- ・アワブネガイ：岩礁にもサザエ等の他の貝の表面にも付着する。食用になるか不明。
- ・ツメタガイ（ホソヤツメタ）：半球形。北海道以南各地。内湾的環境に分布し、やや外洋的な環境では同種となるホソヤツメタが棲息。つべた等と呼ばれ、食用。
- ・アカニシ：大型のこぶし形。北海道南部以南各地。食用。
- ・アラムシロガイ：北海道南部以南各地。ムシロガイと共にローカルに食用。

3. 東漸寺貝塚遺構のA～D層から出土した貝類と自然貝層の貝類組成

1) 1号溝のA貝層の貝類組成

本貝層から出土した貝類試料は水洗・乾燥後の貝殻総重量が、2,417gであった。その中から明らかになった貝類は、二枚貝類7種と巻貝類9種の計16種である(表1)。いずれの貝も食用になる種類であり、出土個体数の多い貝は特に食料として好まれた種といえる。その産出頻度を貝類群集の面から捉えると、内湾砂底群集が全体の96.9%とほとんどを占め、干潟群集が2.3%と僅か混じる(図4-①)。主な種類ではハマグリ(全体の48%、貝殻の重量1,450g)が最も多く、次いでシオフキ(16%; 418g)、イボキサゴ(13%; 15g)、ウミニナ(11%; 38g)、マテガイ(6%; 15g)、アサリ(3%; 44g)の順となっている(表1)。しかもこれらの種は、内湾砂底群集の主要構成種であることから、貝塚の位置する前面の根岸湾の砂浜海岸から採貝してきたことを示唆する。この点は貝塚遺跡の基盤となる自然貝層(後述の6)～8)で明らかになった貝類遺骸群)の貝類組成とよく似ており、同じ海岸環境が古墳時代以前から根岸湾沿岸で継続していたと判断できる。

2) 1号溝のB貝層の貝類組成

写真1の本貝層から出土した貝類試料は水洗・乾燥後の貝殻総重量が、3,813gであった。その中から明らかになった貝類は、二枚貝類9種と巻貝類7種の計16種である(表1)。この中でアワブネガイ(2%; 5g)を除けば、前述のA貝層と同様に食用となる貝類で占められる。産出頻度を貝類群集の面からみると、A貝層と同様に内湾砂底群集が95.2%とほとんどを占め、干潟群集が2.1%と僅か混じる(図4-②)。主な種類ではハマグリ(全体の40%; 1,980g)が最も多く、次いでイボキサゴ(18%; 86g)とシオフキ(17%; 450g)、マテガイ(7%; 16g)、カガミガイ(4%; 486g)、アサリ(4%; 90g)の順となり(表1)、A貝層とほぼ一致するように内湾砂底群



写真1 1号溝B貝層

表1 杉田東漸寺貝塚（4ヶ所5試料）と自然貝層（2ヶ所3試料）出土の貝類リスト

和名	貝層					自然貝層A	自然貝層B	自然貝層C	学名	貝類群集	食用
	A貝層	B貝層	C貝層西	C貝層東	D貝層						
二枚貝類									PELECYPODA		
コベルトフネガイ	-	1	-	12	2	-	1	-	<i>Arca boucardi</i>	内湾岩礁性群集構成種	△
サルボウ	-	2	4	1	1	1	1	4	<i>Scapharca subcrenata</i>	内湾砂底群集構成種	○
ハイガイ	-	-	-	-	-	-	-	1	<i>Tegillarca granosa</i>	干潟群集構成種	○
アズマニシキ	-	-	14	345	-	1	-	-	<i>Chlamys farreri</i>	沿岸岩礁底群集構成種	○
イタヤガイ	1	-	1	5	-	-	-	-	<i>Pecten albicans</i>	沿岸砂泥底群集構成種	○
ナミマガシワ	-	-	2	-	-	-	1	-	<i>Anomia chinensis</i>	干潟群集随伴種	?
マガキ	-	-	-	4	2	1	2	-	<i>Crossostrea gigas</i>	干潟群集構成種	○
イタボガキ	-	-	28	135	-	-	1	-	<i>Ostra denselamellosa</i>	岩礁底群集構成種	○
ウメノハナガイ	-	-	-	-	26	4	17	-	<i>Pillucina pisidium</i>	内湾砂泥底群集随伴種	×
トマヤガイ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Cardita leana</i>	内湾岩礁性群集構成種	?
ザルガイ科の1種	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Clinocardium</i> sp.		
シオフキ	67	112	211	266	258	248	288	8	<i>Mactra quadrangularia</i>	内湾砂底群集構成種	○
ミルクイ	-	-	-	1	-	-	-	-	<i>Tritus keenae</i>	内湾泥底群集構成種	○
クチバガイ	-	-	-	-	1	1	1	-	<i>Coecella chinensis</i>	内湾砂底群集随伴種	○
イチョウシラトリ	-	-	-	1	4	2	1	-	<i>Merisca capsoides</i>	干潟群集随伴種	?
ウシオガイ	-	-	-	-	14	14	10	-	<i>Moerella rutila</i>	内湾砂底群集随伴種	×
テリザクラガイ	-	-	-	-	-	-	12	-	<i>Moerella iridescens</i>	干潟群集随伴種	×
ヒメシラトリ	-	-	-	-	1	-	4	-	<i>Macoma incongrua</i>	内湾砂底群集構成種	?
ムラサキガイ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Soletellina diphos</i>	沿岸砂泥底群集随伴種	○
マテガイ	24	46	31	63	-	5	11	-	<i>Solen strictus</i>	内湾砂底群集構成種	○
タガソテガイ	-	-	-	-	-	1	-	-	<i>Trapezium sublaevigatum</i>	内湾岩礁性群集随伴種	?
ヒメコノアサリ	-	-	-	1	-	-	-	-	<i>Veremolpa micra</i>	内湾泥底群集構成種	×
カガミガイ	3	26	36	24	8	3	5	-	<i>Phacosoma japonicum</i>	内湾砂底群集構成種	○
アサリ	11	23	40	64	31	21	16	6	<i>Ruditapes philippinarum</i>	内湾砂底群集構成種	○
マツカゼ	-	-	-	-	-	1	-	-	<i>Irus nitis</i>	内湾岩礁性群集随伴種	?
ウチムラサキ	-	-	-	1	1	-	2	2	<i>Saxidomus purpurata</i>	岩礁底群集構成種	○
ハマグリ	208	275	766	772	678	155	215	17	<i>Meretrix lusoria</i>	内湾砂底群集構成種	○
オキシジミ	-	2	1	3	4	3	2	3	<i>Cyclina sinensis</i>	干潟群集構成種	○
オオノガイ	1	3	2	24	11	1	4	1	<i>Mya arenaria oonogai</i>	干潟群集構成種	○
クチベニテガイ	-	-	-	2	-	-	1	-	<i>Anisocorbula venusta</i>	内湾砂底群集随伴種	×
ニオガイモドキ	-	-	-	-	-	-	2	-	<i>Zirfaea subconstricta</i>	内湾岩礁性群集構成種	?
角貝類									SCAPHOPODA		
ヤカドツノガイ	-	-	-	3	5	3	1	-	<i>Dentalium octangulatum</i>	内湾泥底群集随伴種	?
巻貝類									GASTROPODA		
ツボミ	-	-	-	2	53	30	35	-	<i>Patelloida pygmaea lampanicola</i>	内湾岩礁性群集随伴種	×
イシダタミ	-	-	-	1	-	-	-	-	<i>Monodonta labio confusa</i>	沿岸岩礁性群集構成種	○
ヘソアキケボガイ	-	-	-	1	-	-	-	-	<i>Chlorostoma argyrostoma turbinata</i>	沿岸岩礁性群集構成種	○
イボキサゴ	56	117	1893	1493	2193	418	1158	8	<i>Umbonium moniliferum</i>	内湾砂底群集構成種	○
スガイ	1	-	6	4	1	1	4	-	<i>Lumella coronata corensis</i>	沿岸岩礁性群集構成種	○
サンショウガイ	-	-	-	1	-	-	-	-	<i>Homalopoma nocturnum</i>	沿岸岩礁性群集随伴種	×
アマガイ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Nerita japonica</i>	沿岸岩礁性群集随伴種	×
タマキビ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Littorina brevicula</i>	沿岸岩礁性群集随伴種	△
クビキレガイ科の1種	-	-	-	-	-	2	-	-	<i>Truncatella</i> sp.		
シラギク	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Pseudolittia pulchella</i>	内湾砂底群集随伴種	×
カニモリガイ	-	-	2	1	8	3	2	-	<i>Proclava kochii</i>	内湾砂底群集構成種	○
ヘナタリ	1	1	13	6	162	63	58	2	<i>Cerithideopsisilla cingulata</i>	内湾砂底群集構成種	○
カワアイ	1	-	-	-	-	-	-	-	<i>Cerithideopsisilla djadjariensis</i>	干潟群集随伴種	○
ウミナ	47	12	122	185	506	236	175	17	<i>Batillaria multiformis</i>	内湾砂底群集構成種	○
イボウミナ	7	4	56	42	725	50	35	6	<i>Batillaria zonalis</i>	干潟群集構成種	○
オオヘビガイ	-	-	-	31	-	-	1	-	<i>Serpulorbis imbricatus</i>	内湾岩礁性群集構成種	○
アワフネガイ	-	16	16	83	1	-	-	-	<i>Bostrycapulus gravispinosus</i>	内湾岩礁性群集随伴種	×
ツメタガイ (ホソヤツメタ)	3	5	25	16	10	4	4	13	<i>Glossaulax didyma</i>	内湾砂底群集随伴種	○
ヒメツメタガイ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Glossaulax vesicalis</i>	内湾砂底群集随伴種	○
アダムズタマガイ	-	-	-	2	3	-	-	-	<i>Cryptonatica adamsiana</i>	内湾砂底群集随伴種	○
アクキガイ科の1種	-	-	1	-	-	1	-	-	<i>Bedevina</i> sp.		
レイシガイ	-	-	-	2	-	-	-	1	<i>Thais bronni</i>	沿岸岩礁性群集随伴種	○
イボニシ	-	-	-	-	1	-	-	-	<i>Reishia clavigera</i>	沿岸岩礁性群集随伴種	○
アカニシ	1	-	5	8	-	1	1	5	<i>Rapana venosa</i>	内湾泥底群集構成種	○
ムギガイ	-	-	-	-	4	1	5	-	<i>Mitrella bicincta</i>	内湾砂底群集随伴種	×
マルテンスマツムシガイ	-	-	-	-	-	1	-	-	<i>Indomitrella martensi</i>	内湾砂底群集随伴種	×
ムシロガイ	-	-	2	1	29	16	9	-	<i>Niotha livescens</i>	内湾砂底群集随伴種	?
アラムシロガイ	1	5	52	29	229	70	93	4	<i>Niotha semisulcatus</i>	干潟群集随伴種	?
コゲマキモノシャジク	-	-	-	-	1	-	-	-	<i>Tomopleura poulonsis</i>	内湾砂底群集随伴種	×
シャジクガイ科の1種a	-	-	-	-	2	-	-	1	<i>Inquisitor</i> sp.		
シャジクガイ科の1種b	-	-	-	-	-	-	-	1	<i>Paradrillia</i> sp.		
シゲヤスイトカケギリ	-	-	-	-	1	-	-	-	<i>Turbonilla shigeyasui</i>	内湾砂底群集随伴種	×
キジビキガイ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Punctateon fabreanus</i>	内湾砂底群集随伴種	×
コムツツラガイ	-	-	-	-	-	-	1	-	<i>Didontoglossa decoratoides</i>	内湾砂泥底群集随伴種	×
キセルガイ科の1種	-	-	1	-	3	-	-	-	Clausidae		
オナジマイマイ科の1種	-	-	1	3	-	-	-	-	Bradybaenidae		
貝殻の総重量 (g)	2416	3813	5712	16875	6246	-	-	-			

※ 貝の食用について ○：食用可 △：可能性有 ×：食用不可 ?：不明

表2 杉田東漸寺貝塚および自然貝層出土の貝類リスト

和名	貝層						貝類群集
	A・B貝層	C貝層	D貝層	自然貝層A・B	自然貝層C		
二枚貝類							
コベルトフネガイ	1	12	2	1	-	内湾岩礁性群集構成種	
サルボウ	2	5	1	2	4	内湾砂底群集構成種	
ハイガイ	-	-	-	-	1	干潟群集構成種	
アズマニシキ	-	359	-	1	-	沿岸岩礁底群集構成種	
イタヤガイ	1	6	-	-	-	沿岸砂泥底群集構成種	
ナミマガシワ	-	2	-	1	-	干潟群集随伴種	
マガキ	-	4	2	3	-	干潟群集構成種	
イタボガキ	-	163	-	1	-	岩礁底群集構成種	
ウメノハナガイ	-	-	26	21	-	内湾砂泥底群集随伴種	
トマヤガイ	-	-	-	1	-	内湾岩礁性群集構成種	
ザルガイ科の1種	-	-	-	1	-		
シオフキ	179	477	258	536	8	内湾砂底群集構成種	
ミルクイ	-	1	-	-	-	内湾泥底群集構成種	
クチバガイ	-	-	1	2	-	内湾砂底群集随伴種	
イチョウシラトリ	-	1	4	3	-	干潟群集随伴種	
ユウシオガイ	-	-	14	24	-	内湾砂底群集随伴種	
テリザクラガイ	-	-	-	12	-	干潟群集随伴種	
ヒメシラトリ	-	-	1	4	-	内湾砂底群集構成種	
ムラサキガイ	-	-	-	1	-	沿岸砂泥底群集随伴種	
マテガイ	70	94	-	16	-	内湾砂底群集構成種	
タガソテガイ	-	-	-	1	-	内湾岩礁性群集随伴種	
ヒメカノコアサリ	-	1	-	-	-	内湾泥底群集構成種	
カガミガイ	29	60	8	8	-	内湾砂底群集構成種	
アサリ	34	104	31	37	6	内湾砂底群集構成種	
マツカゼ	-	-	-	1	-	内湾岩礁性群集随伴種	
ウチムラサキ	-	1	1	2	2	岩礁底群集構成種	
ハマグリ	483	1538	678	370	17	内湾砂底群集構成種	
オキシジミ	2	4	4	5	3	干潟群集構成種	
オオノガイ	4	26	11	5	1	干潟群集構成種	
クチベニテガイ	-	2	-	1	-	内湾砂底群集随伴種	
ニオガイモドキ	-	-	-	2	-	内湾岩礁性群集構成種	
角貝類							
ヤカドツノガイ	-	3	5	4	-	内湾泥底群集随伴種	
巻貝類							
ツボミ	-	2	53	65	-	内湾岩礁性群集随伴種	
イシダタミ	-	1	-	-	-	沿岸岩礁性群集構成種	
ヘソアキクボガイ	-	1	-	-	-	沿岸岩礁性群集構成種	
イボキサゴ	1739	3386	2193	1576	8	内湾砂底群集構成種	
スガイ	1	10	1	5	-	沿岸岩礁性群集構成種	
サンショウガイ	-	1	-	-	-	沿岸岩礁性群集随伴種	
アマガイ	-	-	-	1	-	沿岸岩礁性群集随伴種	
タマキビ	-	-	-	1	-	沿岸岩礁性群集随伴種	
クビキレガイ科の1種	-	-	-	2	-		
シラギク	-	-	-	1	-	内湾砂底群集随伴種	
カニモリガイ	-	3	8	5	-	内湾砂底群集構成種	
ヘナタリ	2	19	162	121	2	内湾砂底群集構成種	
カワアイ	1	-	-	-	-	干潟群集随伴種	
ウミナ	59	307	506	411	17	内湾砂底群集構成種	
イボウミナ	11	98	725	85	6	干潟群集構成種	
オオヘビガイ	-	31	-	1	-	内湾岩礁性群集構成種	
アワブネガイ	16	99	1	-	-	内湾岩礁性群集随伴種	
ツメタガイ (ホソヤツメタ)	8	41	10	8	13	内湾砂底群集随伴種	
ヒメツメタガイ	-	-	-	1	-	内湾砂底群集随伴種	
アダムスタマガイ	-	2	3	-	-	内湾砂底群集随伴種	
アウキガイ科の1種	-	1	-	1	-		
レイシガイ	-	2	-	-	1	沿岸岩礁性群集随伴種	
イボニシ	-	-	1	-	-	沿岸岩礁性群集随伴種	
アカニシ	1	13	-	2	5	内湾泥底群集構成種	
ムギガイ	-	-	4	6	-	内湾砂底群集随伴種	
マルテンスマツムシガイ	-	-	-	1	-	内湾砂底群集随伴種	
ムシロガイ	-	3	29	25	-	内湾砂底群集随伴種	
アラムシロガイ	6	81	229	163	4	干潟群集随伴種	
コゲマキノシャジク	-	-	1	-	-	内湾砂底群集随伴種	
シャジクガイ科の1種a	-	-	2	-	1		
シャジクガイ科の1種b	-	-	-	-	1		
シゲヤスイトカケギリ	-	-	1	-	-	内湾砂底群集随伴種	
キジビキガイ	-	-	-	1	-	内湾砂底群集随伴種	
コメツツラガイ	-	-	-	1	-	内湾砂泥底群集随伴種	
キセルガイ科の1種	-	1	3	-	-		
オナジマイマイ科の1種	-	4	-	-	-		

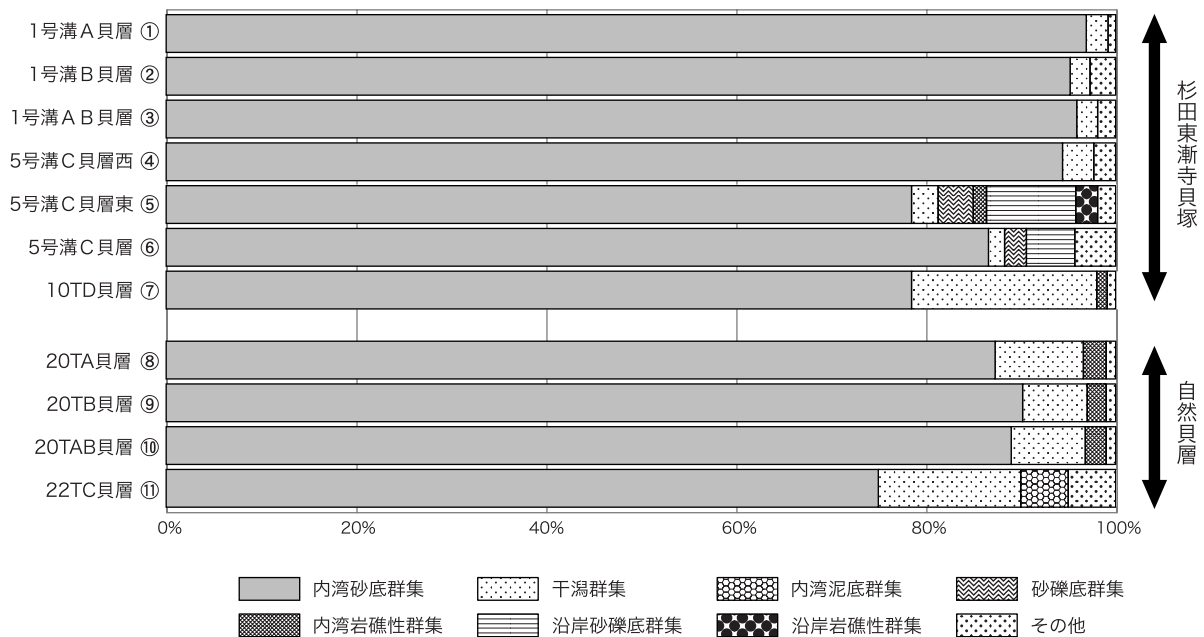


図4 杉田東漸寺貝塚貝層および自然貝層における貝類群集比率

集の主要構成種と随伴種とからなっている。したがって1号溝のA貝層とB貝層は、距離的に6mほど離れた地点であるが、出土した貝類はほぼ同じ貝類組成を示すことから、同時期に形成された貝層と判断できる。

その結果、A・B貝層を合わせた1号溝の出土状況をまとめると、種類数は二枚貝類10種、巻貝類10種の計20種となる(表2)。産出頻度は貝類群集の面で内湾砂底群集が95.9%とほとんどを占め、干潟群集が僅か2.2%混じる(図4-③)。種類別ではハマグリ(44.5%)が最も多く、次いでシオフキ(16.5%)、イボキサゴ(15.9%)、マテガイ(6.4%)、ウミニナ(5.4%)、アサリ(3.1%)、カガミガイ(2.6%)の順となっている。1号溝に捨てられた貝殻は、遺跡の東に広がる根岸湾へ行き砂浜に生息している、内湾砂底群集を構成する貝類を採貝してきて食べていたことを示している。

3) 5号溝のC貝層西の貝類組成

C貝層西は先に述べたように、5号溝のC貝層の規模が大きいため東半分と西半分に2分割した西側の貝類試料である。水洗・乾燥後の貝殻総重量は、5,712gであった。その中から明らかになった貝類は、二枚貝類12種、巻貝類14種の計24種である(表1)。その産出頻度を貝類群集の面からみると内湾砂底群集が全体の94.4%とほとんどを占め、干潟群集が3.3%と混じる(図4-④)。主な種類ではイボキサゴ(全体の57%; 854g)が最も多く、次いでハマグリ(23%; 2,430g)とシオフキ(6%; 752g)、ウミニナ(4%; 44g)、イボウミニナ(2%; 64g)の順となり、前述のA・B貝層とよく似た出土状況を示す(表1)。しかし、出土した種の中で個体数の少ないアサリ(1.2%; 238g)、カガミガイ1.0(1.0%; 108g)、イタボガキ(0.8%; 270g)、アズマニシキ(0.4%; 66g)などは、食用として優れており、これらの貝類を含む点が特徴である。なお、陸生巻貝のキセルガイとオジナマイマイの1種が僅か混じる(表1)。

4) 5号溝のC貝層東の貝類組成

C貝層東から出土した貝類試料は、水洗・乾燥後の貝殻総重量が最大の16,875gであった。その中から明らかになった貝類は、二枚貝類18種、角貝類1種、巻貝類19種の計38種である(表1)。その産出頻度を貝類群集の面からみると内湾砂底群集が全体の78.5%と大半を占め、続いて沿岸砂礫底群集(9.4%)、砂礫底群集(3.7%)、干潟群集(2.8%)、沿岸岩礁群集(2.3%)、内湾岩礁群集(1.4%)とな

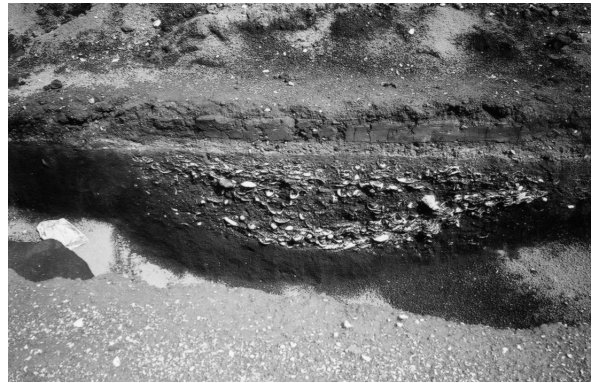


写真2 5号溝C貝層

っていて、他の貝層で明らかになった群集組成と著しく異なる(図4-⑤)。内湾砂底群集の少ない分を、生息環境を全く異にする沿岸砂礫底群集と沿岸岩礁性群集、砂礫底群集、内湾岩礁群集などの岩礁性貝類が満たしていることになる。主な種類はイボキサゴ(全体の41%; 882g)が最も多く、次いでハマグリ(21%; 3,445g)、アズマニシキ(9%; 1,950g)、シオフキ(7%; 1,255g)、ウミニナ(5%; 102g)、イタボガキ(4%; 1,255g)となっている(表1)。特に、アズマニシキとイタボガキの殻の出土量の多いのが目立ち、大量に採貝してきたことを示す。なお、陸生巻貝のキセルガイとオジナマイマイの1種が僅か混じる(表1)。このような貝類の出土状況は、上述のC貝層西と同じである。

はじめに述べたように、5号溝のC貝層は規模が大きく、全体の貝類組成を把握するため、貝層の中心から東西に2分割して調べた(写真2)。すなわち、図5に示すC貝層の貝層断面で明らかなように、本貝層は1~5層に細区分でき、各層の厚さが側方向のいずれもレンズ状に大きく変化している。しかもその中心部は東側か西側に偏っている。次々と食べた後の貝殻を捨てるのに一様に廃棄したのではないことを示している。そして東側に分布する層は貝殻の量が西側より多く、保存のよい個体も数多く混じっていた。そこで貝層東と貝層西をまとめた結果は次のようになる。

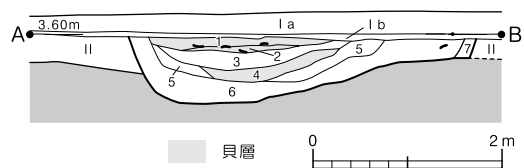


図5 杉田東漸寺貝塚5号溝C貝層断面

C貝層全体では二枚貝類19種、角貝類1種、巻貝類21種の計41種が確認できた(表2)。その産出頻度を貝類群集で見ると内湾砂底群集が全体の86.6%と大半を占め、続いて沿岸砂礫底群集(5.1%)、砂礫底群集(2.3%)、干潟群集(1.7%)の順となり、他の地点で確認された群集組成と著しく異なる(図4-⑥)。すなわち、内湾砂底群集が少ない分を沿岸砂礫底群集と砂礫底群集が満たしていた。そこで、主な種類で見るとイボキサゴ(全体の48.6%)が最も多く、次いでハマグリ(22.0%)、シオフキ(6.8%)アズマニシキ(5.1%)、ウミニナ(4.4%)、イタボガキ(2.3%)となっている(表2)。アズマニシキやイタボガキをはじめ出土個体数の少ないコベルトフネガイやイタヤガイ、イシダタミ、ヘソアキクボガイ、スガイ、サンショウガイなどの種は、東漸寺貝塚の立地する根岸湾の砂浜海岸には分布していない。これらの貝類の中で内湾岩礁性群集と砂礫底群集構成種は、根岸~間門にかけての岩礫底海岸、あるいは富岡~小柴にかけての岩礁海岸とその沖合いから採集してきた可能性が高い。それ以外のアズマニシキやヘソアキクボガイなどの沿岸砂礫底群集と沿岸岩礁性群集の貝は、東京湾内では生息していないこ

とから東京湾の外側、三浦半島沿岸まで出かけ採集してきたものと推定される。

5) 10TのD貝層の貝類組成

本貝層から出土した貝類試料で水洗・乾燥後の総重量は、6,246gであった。その中から明らかになった貝類は、二枚貝類7種、角貝類1種、巻貝類18種の計33種である(表1)。その産出頻度を貝類群集からみると内湾砂底群集は全体の78.5%と大半を占め、干潟群集が19.5%、内湾岩礁性群集が1.1%となる(図4-⑦)。主要な種でみるとイボキサゴ(全体の44%;644g)が最も多く、次いでイボウミニナ(15%;114g)とハマグリ(14%;1,186g)、ウミニナ(10%;98g)、シオフキ(6%;574g)、アラムシロガイ(5%;32g)の順となり内湾砂底群集構成種が圧倒的に優勢となる(表1)。その中で小形の巻貝の占める割合が他の貝層より高い。また、干潟群集のイボウミニナ、アラムシロ、マガキ、イチョウシラトリ、オキシジミ、オオノガイなどの貝類が他の貝層より多く出土しており、C貝層の貝類組成と大いに異なる。むしろ1号溝のA・B貝層に近い貝類組成となっている。中でも干潟群集がかなりの割合を占めることから、砂浜の発達する杉田海岸の一部には、泥質の分布する干潟が存在していて、そこに生息しているマガキやオキシジミ、オオノガイ、イボウミニナの干潟群集構成種などの貝を採集してきていたものと考えられる。

6) 20T東端の自然貝層Aの貝類組成

本貝層の貝類試料は杉田小学校校庭西側中央部の20トレンチ北壁に現れた自然貝層(貝塚遺跡の基盤となる海成沖積層で、その堆積年代は弥生時代より若干古い縄文後~晩期と推定される貝殻の密集層)から採取したものである。貝層の産状は粗~中粒砂層中に貝殻がはき寄せられ密集した層となっていた(写真3、図6)。試料は幅100cm×厚さ20cm×奥行き20cmの範囲の貝層を採取し、東半分を自然貝層A、西半分を自然貝層Bと2分割して分析試料とした。

写真4は自然貝層Aの部分である。ここから明らかになった貝類は、二枚貝類7種と巻貝類9種の計16種である(表1)。その産出頻度を貝類群集からみると内湾砂底群集は全体の87.3%と大半を占め、干潟群集が9.3%、内湾岩礁性群集が2.4%である(図4-⑧)。主要な種はイボキサゴ(全体の31%)が最も多く、次いでシオフキ(18%)、ウミニナ(17%)とハマグリ(11%)、アラムシロガイ(5%)、ヘナタリ(5%)、イボウミニナ(5%)の順となり内湾砂底群集構成種が圧倒的に優勢となる(表1)。



写真3 20T自然貝層

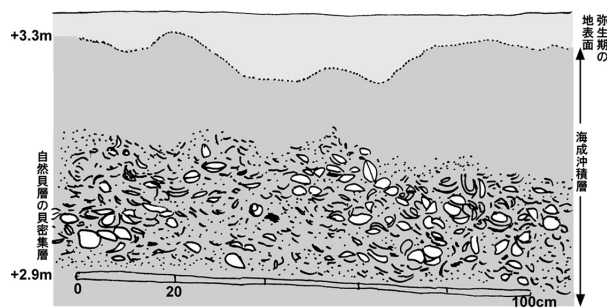


図6 20T東端の自然貝層露頭スケッチ

しかも貝塚の貝層と異なり中～小形の巻貝類が多く、食用となる二枚貝類が少なくなっている。さらにウミニナの殻表に付着する笠貝のツボミが多く産出している（表1）。

7) 20T東端の自然貝層Bの貝類組成

本貝層の貝類試料は、前述の2分割した西側の自然貝層Bである。明らかになった貝類は、二枚貝類7種と巻貝類9種の計16種である（表1）。その産出頻度を貝類群集からみると内湾砂底群集は全体の90.2%と大半を占め、干潟群集が6.8%、内湾岩礁性群集が2%となる（図4-⑨）。主要な種ではイボキサゴ（全体の53%）が最も多く、次いでシオフキ（13%）、ハマグリ（10%）、ウミニナ（8%）、アラムシロガイ（4%）、ヘナタリ（3%）、イボウミニナ（2%）、ツボミ（2%）の順となり内湾砂底群集構成種が圧倒的に優勢となる（表1）。自然貝層Aとほぼ同じ貝類組成となっている。

その結果、自然貝層A・Bの貝類組成をまとめると次のようになる。

20T東端の自然貝層から明らかになった貝類は、二枚貝類27種、角貝類1種、巻貝類22種の計50種である（表2）。その産出頻度を貝類群集からみると内湾砂底群集は全体の89.0%と大半を占め、干潟群集が7.8%、内湾岩礁性群集が2.2%となる（図4-⑩）。主要な種はイボキサゴ（全体の44.4%）が最も多く、次いでシオフキ（15.1%）、ウミニナ（11.5%）とハマグリ（10.4%）、アラムシロガイ（4.5%）、ヘナタリ（3.4%）、イボウミニナ（2.3%）の順となり内湾砂底群集構成種が圧倒的に優勢となる（表2）。しかも貝塚の貝層と異なり中～小形の巻貝類が多くなり、食用となる二枚貝類がやや少ない。貝層の産状が、沿岸流により貝殻が汀線付近に、はき寄せられて密集層となっていることから、この浜に生息している貝類の遺骸群集であると理解できる。松島（1984）が指摘する縄文中期以降の東京湾沿岸に発達した砂浜海岸を特徴つける貝類群集といえる。

8) 22T西端の自然貝層Cの貝類組成

本貝層の貝類試料は、22トレンチ西端の基底に現れた自然貝層の砂層表面に散在する貝類を採取したものである（写真5）。採取にあたっては、小形のものや殻が薄く壊れている二枚貝などはほとんど拾っていない。意識的に保存が良く破損していない貝類を採集したため、他の7試料に比べてその扱った量がかなり少なく、量的に比較するには無理で相対的に比べてみることにした。

この地点の貝殻の産状は前述の20T東端の自然貝層のようにはき寄せられ貝殻密集層となっているのではなく、粗砂中に貝殻が散在しており、まさに自然堆積であると判断される。その中から明らかになった貝類は、二枚貝類8種と巻貝類10種の計18種である（表1）。その産出頻度も貝類群集からみると内湾砂底群集は全体の75%と大半を占め、干潟群集が



写真4 20T自然貝層A地点（近接）



写真5 22T自然貝層C地点

15%、内湾泥底群集が5%となる（図4-⑩）。主要な種でみるとイボキサゴ（全体の53%）が最も多く、次いでシオフキ（13%）、ハマグリ（10%）、ウミニナ（8%）、アラムシロガイ（4%）、ヘナタリ（3%）、イボウミニナ（2%）、ツボミ（2%）の順となり内湾砂底群集構成種が圧倒的に優勢となっている（表1）。この点を東漸寺貝塚の10TのD貝層で得られた貝類組成と比べるとほぼ同じものとなっている。意図的に自然貝層の貝殻を採集したことが、偶然によく似た貝類組成になったのか今後の検討課題としたい。なお、本地点からはハイガイを1個採集した。

4. 貝類群集からみた杉田東漸寺貝塚出土の貝類の特徴

1号溝のA・B貝層は約6m離れた所に位置しているが、両層から明らかになった貝類の群集組成は同じで、しかも同じ産出頻度を示しており、同時期に捨てられた貝殻からなる貝層と判断できる。貝層の構成種はほとんどが内湾砂底群集構成種で占められる。これらの貝類はいずれも貝塚から東へ100～200m先（現在の国道16号線付近）に広がる砂浜海岸の潮間帯に生息している種で、その中から食用として優れたハマグリをはじめイボキサゴ、シオフキ、マテガイ、カガミガイ、アサリなどの貝類を採取している。

つまり貝塚遺跡の基盤をなす自然貝層A・Bで確認された貝類群集の中から、食用となる貝類を選択してみると、貝塚出土の貝類組成とよく合う。したがって当時の砂浜海岸の潮間帯には、弥生時代の堆積物と推定できる海成沖積層中の貝類群と同じ組成の貝類群が生息しており、東漸寺貝塚の人達は、主に最も近い浜に出かけ採貝していたことを示す。

5号溝のC貝層は内湾砂底群集が大半を占める。そのため採貝の活動域は主に近くの砂浜海岸であった。しかし、コベルトフネガイやイタボガキ、オオヘビガイ、スガイなどの貝は根岸湾の砂浜海岸では生息していない。これらの砂礫底ないし沿岸岩礁性の貝類がかなりの量を出土していることから判断して、貝塚付近の砂浜海岸ではない別の海岸へ採集に出掛けたことを現している。貝塚地点から近い海岸で、岩礁の発達していた場所は根岸～間門にかけての岩礫底海岸、あるいは富岡～小柴にかけての岩礁海岸であり、そこへ出掛け採貝してきた可能性がある。さらに、アズマニシキやヘソアキクボガイ、イシダタミなどの貝が出土しており、東京湾内では生息していないこれらの貝を採取していることからみて、東京湾の外側の三浦半島沿岸まで出掛け採貝してきたものと推定できる。5号溝のC貝層をもたらした人達の中には採貝行動において、かなり広範囲の活動をしていたことを示す。

10TのD貝層はC貝層と同様に内湾砂底群集が大半を占める。それに干潟群集と内湾岩礁性群集が出土して、全て内湾性種となっている。まさに貝塚の前面に広がる根岸湾沿岸に生息する貝類で占められていた。特に干潟群集では主要構成種のハイガイを欠く以外、マガキやオキシジミ、オオノガイ、イボウミニナなどが出土しており、杉田海岸の一部には泥質の干潟が存在していたことを物語る。ハイガイは横浜港周辺では約1,500年前まで生息し、その後消滅したことで知られる。この点から杉田海岸の泥質干潟では、ハイガイを欠く干潟群集が分布していても不思議ではない。つまり、約1,500年前以降の貝類群集が杉田海岸で生息していたことになる。東漸寺貝塚は古墳時代前期であることからみて、年代的にも対応し矛盾していない。

5. 貝塚出土のハマグリ、シオフキと自然貝層産出のハマグリ、シオフキとの比較

1号溝のA・B貝層と5号溝のC貝層からは、保存のよいハマグリとシオフキが多量に出土した。一方、東漸寺貝塚遺跡の基盤をなす自然貝層（A・B）からも多くの保存のよいハマグリとシオフキが産出した。そこで両層から得られたこの2種について、各貝殻の殻長（L）・殻高（H）・殻幅（C）をデジタルノギスで計測した。そして、統計学的に比べることにより、貝塚のものと自然貝層のものにはどのような違いがあるのか調べてみた。なお、測定に用いた貝殻は、破損の少ない個体を中心にランダム採取している。また、計測個体数を多くすることを優先し、ハマグリおよびシオフキについて左右の殻がほとんど等殻と考え、両殻とも混合して用いた。

1) 各貝層におけるハマグリ殻長サイズについて

杉田東漸寺貝塚におけるハマグリ殻長のサイズについて、殻長サイズの分布を示したヒストグラムを図7に示す。

1号溝のA・B貝層からのハマグリは、173個計測した（図7-①）。これらのハマグリ殻長の平均は、46.9mmで、最小は25mm、最大は98mmであった。殻長サイズ分布は、40～45mmサイズをピークとして1つの山のヒストグラムとなっている。殻長35mm以下の個数は少ないため、右下がりの山となっている。

5号溝C貝層からのハマグリは、202個計測した（図7-②）。これらのハマグリ殻長の平均は、45.5mmで、最小は20mm、最大は86mmであった。殻長サイズ分布は、30～35mmサイズをピークとして1つ

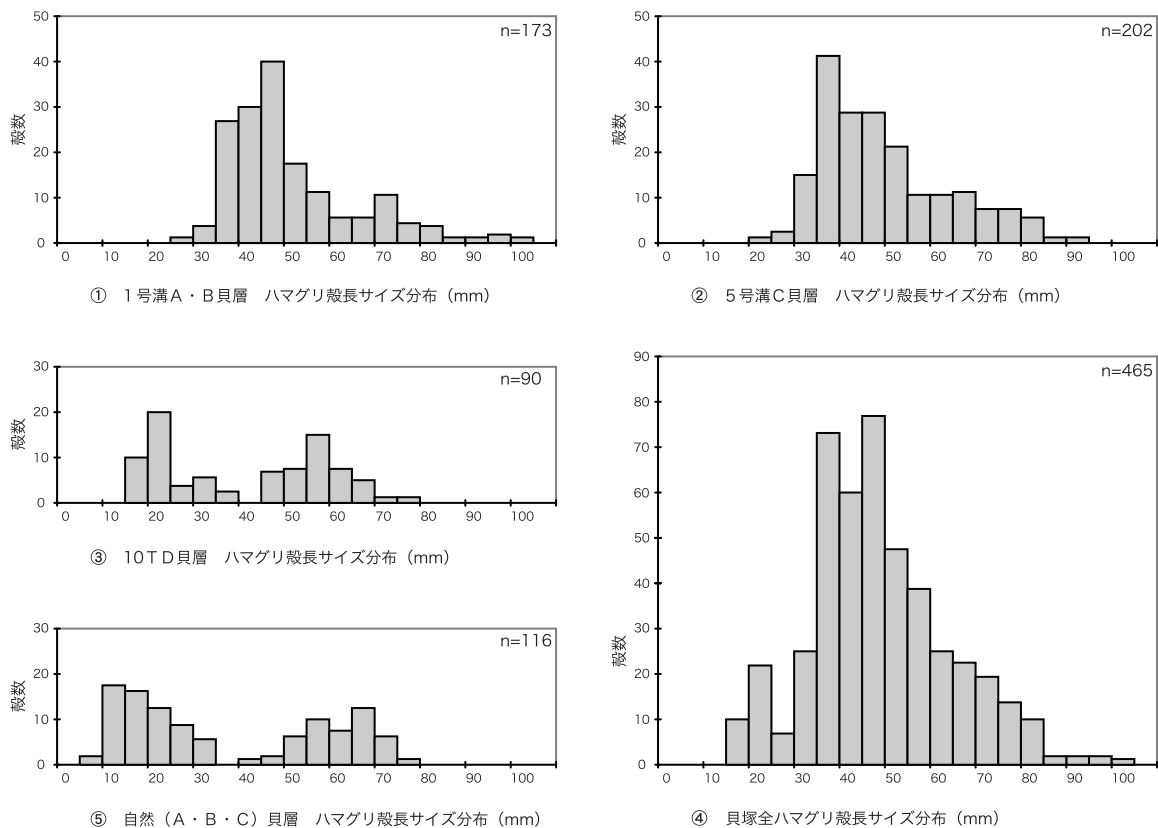


図7 杉田東漸寺貝塚および自然貝層出土のハマグリ殻長のサイズ分布

の山のヒストグラムとなっている。殻長30mm以下の個数は少ないため、右下がりの山となっている。1号溝のA・B貝層のハマグリと同じ1つの山のヒストグラムを示すことが明らかになった。

10TD貝層からのハマグリは、90個計測した（図7-③）。これらのハマグリの殻長の平均は、36.9mmで、最小は11mm、最大は72mmであった。殻長サイズ分布は、10～15mmサイズと50～55mmをピークとする2つの山のヒストグラムとなっている。これは1号溝のA・B貝層と5号溝C貝層から明らかになったヒストグラムと全く異なっている。

自然貝層A・B・C層からのハマグリは、116個計測した（図7-⑤）。これらのハマグリの殻長の平均は、33.4mmで、最小はmm、最大は72mmであった。殻長サイズ分布は、5～10mmサイズと60～65mmをピークとする2つの山のヒストグラムとなっている。

自然貝層からの貝を除いた貝塚からの上記のハマグリは、計465となる（図7-④）。これらのハマグリの殻長の平均は、44.3mmで、最小は11mm、最大は98mmであった。殻長サイズ分布は、30～45mmサイズをピークとしておよそ1つの山のヒストグラムとなっている。

以上のことから、貝塚貝層と自然貝層のハマグリのサイズ分布を比べると、貝塚貝層のハマグリでは殻長25mm以下の個体数が少ないことに比して、自然貝層のハマグリで殻長25mm以下の小型個体が多い。また、殻長5mmサイズの幼貝までも自然貝層では保存している。この結果は、人の手によって選択採取されたハマグリの貝殻によって構成される貝塚の貝殻群と、堆積物中に保存された貝殻遺骸群である自然貝層の貝殻群との差が現れたといえる。しかし、貝塚貝層である10TD貝層では、殻長サイズ11～35mmの小型ハマグリも見られ、2つのピークをもつ殻長サイズ分布を示した。同様に自然貝層のハマグリについても殻長サイズ分布について10TD貝層と同様の2つのピークを示した。この点は、興味深いデータであり、他のデータをあわせて今後の検討課題として、解釈を保留する。

2) 貝塚からのハマグリと自然貝層からハマグリの形態について

貝塚貝層と自然貝層からのハマグリについて、殻幅（C）、殻高（H）、殻長（L）を用い H/L 、と C/L の相関関係を求めた結果を図8に示す。これは殻の形の個体変異を示している。自然貝層のハマグリは、貝塚貝層のハマグリに比して、 C/L が低い値を持つものが多くなった。 C/L の低い個体は、幼貝など小型のハマグリである。すなわち、小型のものは殻の膨らみが弱く、大きい個体は膨らみが強いことを示している。しかし、この結果については、幼貝など小さい殻は測定誤差が生じやすいことを考慮する必要がある。

3) 各貝層におけるシオフキの殻長サイズについて

上述のハマグリ同様、杉田東漸寺貝塚におけるシオフキのサイズについて、殻長サイズの分布を示したヒストグラムを図9に示す。

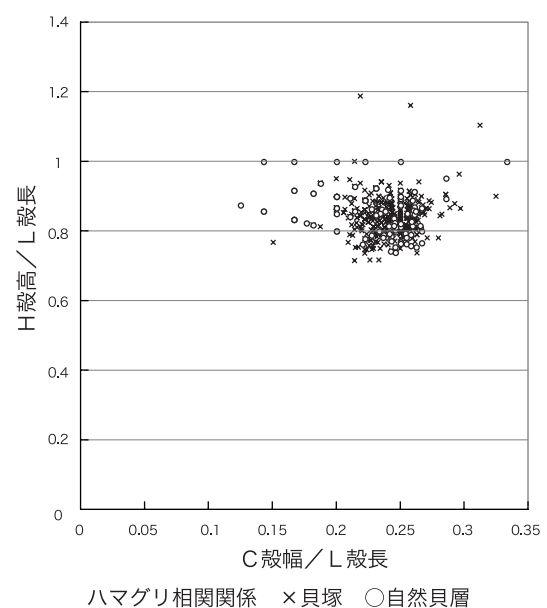


図8 杉田東漸寺貝塚の貝層と自然貝層からのハマグリの形態

1号溝のA・B貝層からのシオフキは、69個計測した（図9-①）。これらのシオフキの殻長の平均は、43.6mmで、最小は34mm、最大は52mmであった。殻長サイズ分布は、42.5~45mmサイズをピークとして1つの山のヒストグラムとなっている。ハマグリと同じヒストグラムを示すことが分かった。

5号溝C貝層からのシオフキは、108個計測した（図9-②）。これらのシオフキの殻長の平均は、43.4mmで、最小は30mm、最大は54mmであった。殻長サイズ分布は、42.5~45mmサイズをピークとして1つの山のヒストグラムとなっている。1号溝のA・B貝層と同じであることが明らかになった。

10TD貝層からのシオフキは、70個計測した（図9-③）。これらのハマグリ（シオフキ）の殻長の平均は、43mmで、最小は32mm、最大は57mmであった。殻長サイズ分布は、大きく見れば42.5~45mmサイズをピークとして1つの山のヒストグラムとなっている。細かく見れば、32.5~35mmサイズにも小さなピークがあり、2つのピークを持つと見ることもできる。ハマグリが示すヒストグラムほど明瞭でないが、確かに2つのピークを表しているといえる。

自然貝層A・B・C層からのシオフキは、165個計測した（図9-⑤）。これらのシオフキの殻長の平均は、43.3mmで、最小は24mm、最大は54mmであった。殻長サイズ分布は、42.5~45mmサイズをピークと

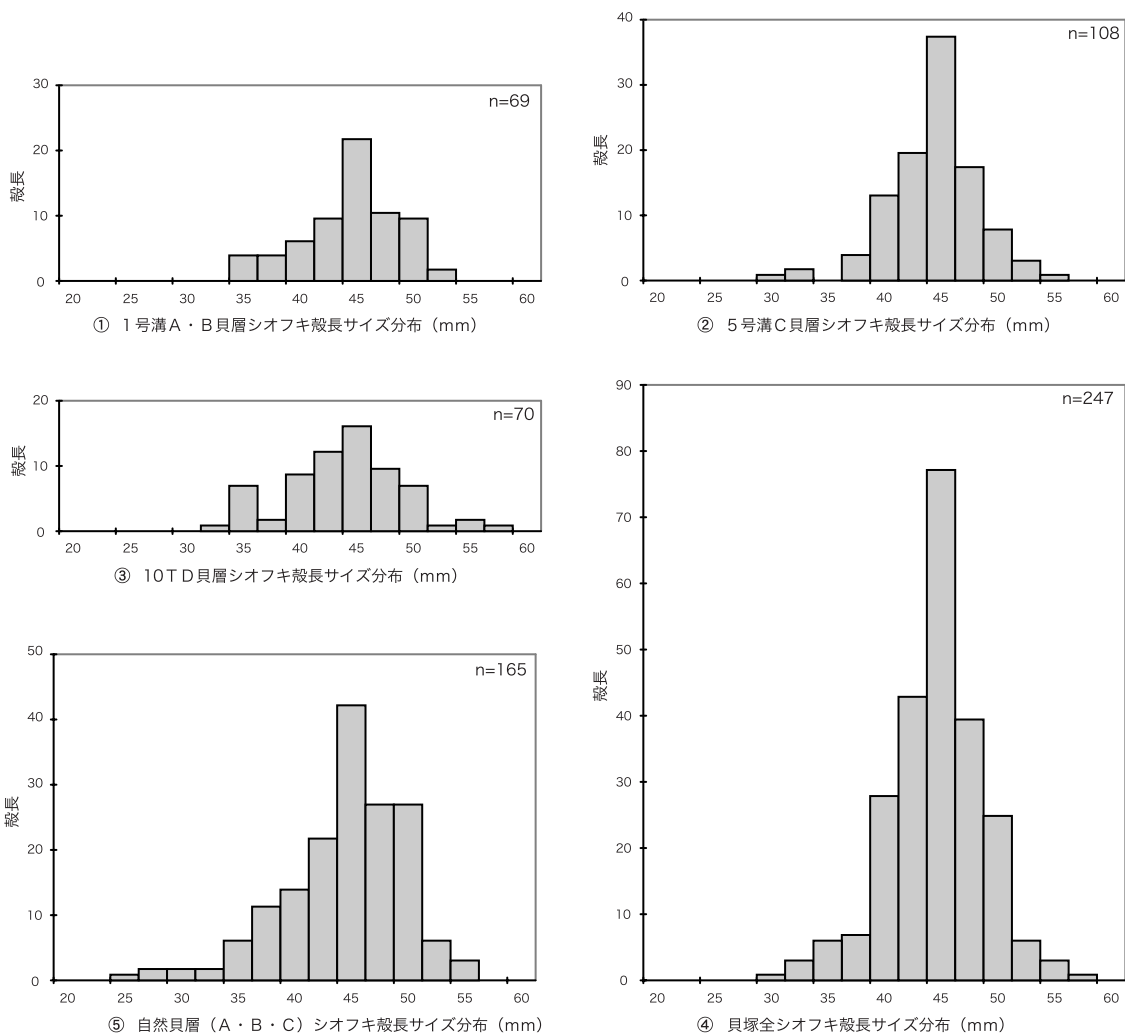


図9 杉田東漸寺貝塚および自然貝層出土のシオフキのサイズ分布

して1つの山のヒストグラムとなっている。

自然貝層からの貝を除いた貝塚からの上記のシオフキ(図9-④)は、計247となる。これらのシオフキの殻長の平均は、43.3mmで、最小は30mm、最大は57mmであった。殻長サイズ分布は、42.5~45mmサイズをピークとして1つの山のヒストグラムとなっている。

以上のことから、貝塚貝層と自然貝層のシオフキのサイズ分布を比べると、貝塚貝層のシオフキは殻長30mm以下の個体数が少ないことに比べて、自然貝層のシオフキではさらに小さい殻長24mmまでの個体が含まれている。また、この幼貝が貝塚には相対的に少ないという結果は、ハマグリの場合と同様である。人の手によって選択採取されたシオフキの貝殻によって構成される貝塚の貝殻群と、堆積物中に保存された貝殻遺骸群である自然貝層の貝殻群との差が殻長サイズ分布の差に明瞭に示されたといえる。

4) 貝塚からのシオフキと自然貝層からシオフキの形態について

貝塚貝層と自然貝層からのシオフキについて、殻幅(C)、殻高(H)、殻長(L)を用いH/L、とC/Lの相関関係を求めた結果を図10に示す。自然貝層のシオフキは、貝塚貝層のシオフキともほぼ同じ分布を示した。貝塚貝層のシオフキ、自然貝層のシオフキに形態的な差は無いといえる。

6. まとめにかえて

第3次杉田東漸寺貝塚本発掘調査で貝塚出土の貝類は、貝塚1号溝A貝層とB貝層、5号溝のC貝層、10TのD貝層の4ヶ所から採取した資料、さらに杉田東漸寺貝塚遺跡の基盤を構成する自然貝層の2ヶ所から採取した資料について調べた。

・1号溝のA貝層とB貝層は、約6m離れた地点であるが、出土した貝類組成はほぼ同じであることから、同時期に形成された貝層といえる。したがって1号溝に捨てられた貝殻は、貝塚の東に広がる根岸湾へ行き砂浜に生息している、内湾砂底群集構成種の貝を採取してきて食用としていた。

・C貝層では二枚貝と角貝、巻貝を合せ41種が確認できた。その産出は内湾砂底群集が大半を占めるが、沿岸砂礫底群集や砂礫底群集、干潟群集が含まれ他の貝層の群集組成と異なる。内湾砂底群集が少ない分を沿岸砂礫底群集と砂礫底群集が満たす。主な種はイボキサゴ、ハマグリ、シオフキ、アズマニシキ、ウミニナ、イタボガキなどである。個体数は少ないコベルトフネガイやイタヤガイ、イシダタミ、ヘソアキクボガイ、スガイ、サンショウガイなどが出土した。これらは東漸寺貝塚前面の砂浜海岸には分布していない。一部の貝は根岸~間門にかけての岩礫底海岸、あるいは富岡~小柴にかけての岩礁海岸とその沖合いから採集してきた可能性が高い。アズマニシキやヘソアキクボガイなどは、東京湾内では生

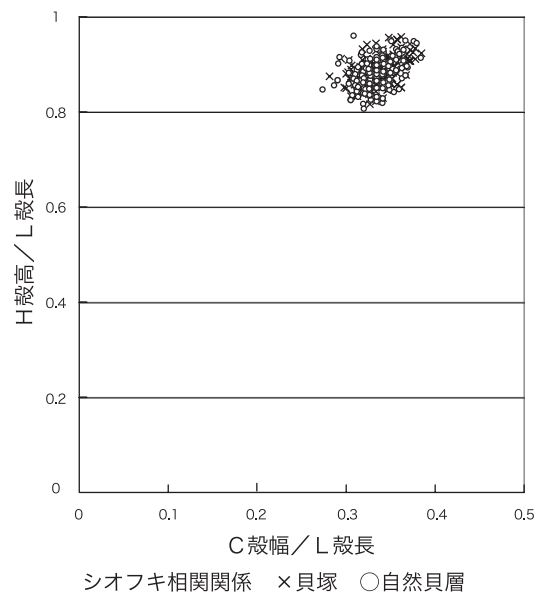


図10 杉田東漸寺貝塚の貝層と自然貝層からのシオフキの形態

息していないことから東京湾の外側、三浦半島沿岸まで出かけ採集してきたものといえよう。

・10TのD貝層の貝類は内湾砂底群集が大半を占めるが、干潟群集もかなり混じる。イボウミニナ、マガキ、オキシジミ、オオノガイなど干潟群集の貝がかなり出土していることから、砂浜の発達する杉田海岸の一部には、泥質の干潟が存在していたことを示し、そこまで採集に出かけていた。

・20T東端の自然貝層の貝類は、すべて内湾性種からなり50種を確認した。産出は内湾砂底群集が圧倒的優勢であるが、干潟群集と内湾岩礁性群集も混じる。この自然貝層の特徴は、前述の貝塚貝層と異なり中～小形の巻貝類が多く、食用となる二枚貝がやや少ない。貝層の産状の一部に汀線付近ではき寄せられた貝殻が密集層となっている。この海浜で生息している種の遺骸群集である。縄文海進最盛期以降の海面低下に伴う沿岸流の発達と、河川の搬出する土砂によって東京湾沿岸では砂浜海岸が急速に発達した。根岸湾も同様に縄文中期以降になって砂浜海岸が形成され発達し、この環境に適した内湾砂底群集が繁栄することになった。台地上の立地する杉田貝塚の貝層（山田、2001）がこの点を示している。杉田海岸の砂浜海岸は縄文中期～後期・晩期、その後弥生時代～古墳時代にかけて発展し、さらに進んで1965年以前の根岸湾埋立までは、遠浅な砂浜海岸となっていて内湾砂底群集が広く生息していた。

・貝塚出土のハマグリ、シオフキと自然貝層産出のハマグリ、シオフキとの比較をすると、両種とも貝塚からは小さい個体を出土せず、自然貝層においては小さい個体から大きな個体までを産出した。これは採貝による選別を受けた結果と考えられる。しかし、貝塚のD貝層出土のハマグリについては、比較的小さい個体を含み、貝サイズ分布が異なっている。

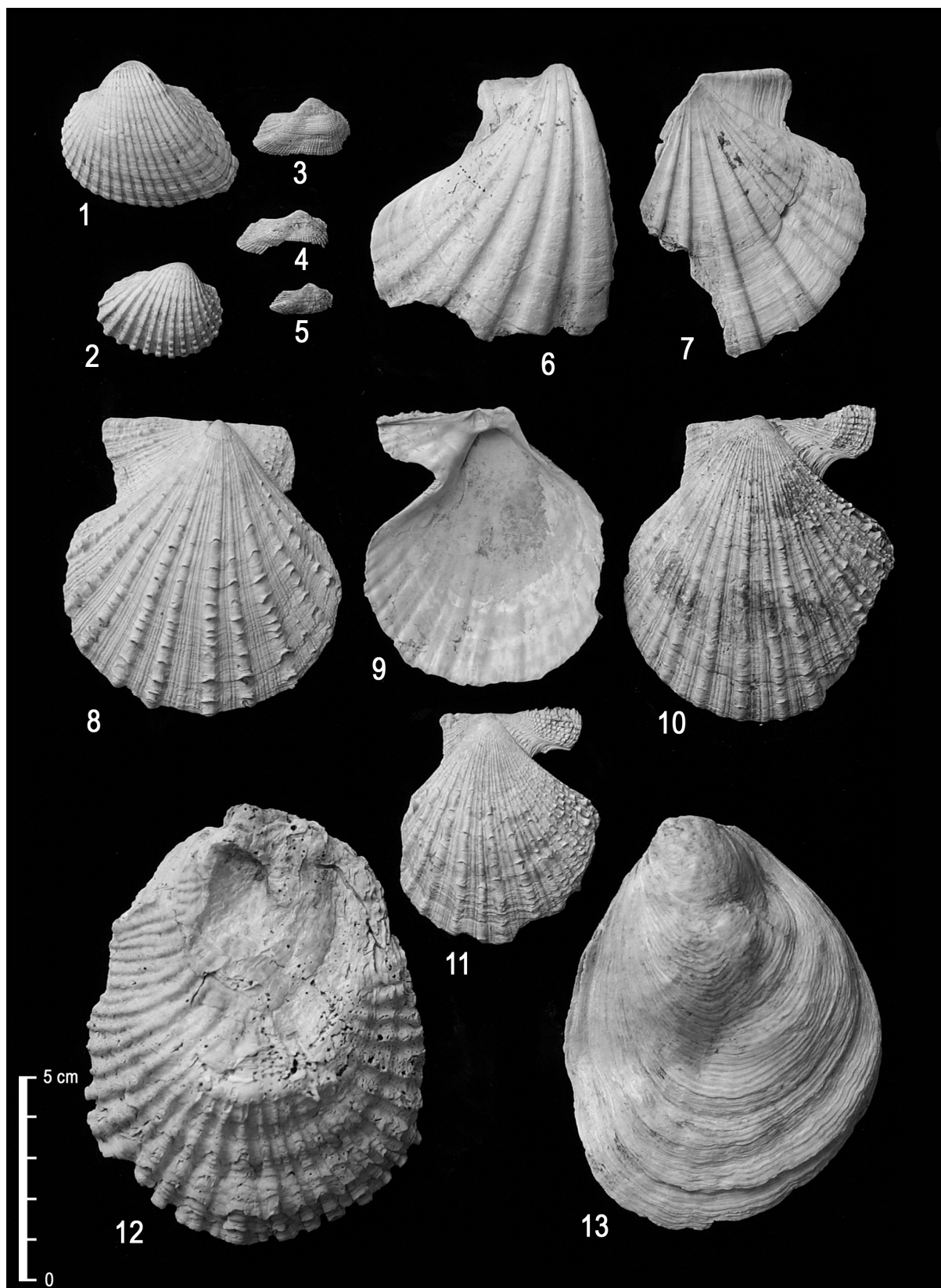
謝 辞

本稿をまとめるに当たり、今回の杉田東漸寺貝塚遺跡発掘調査により出土した自然遺物に関する情報を頂き、調査の機会を与えて下さった横浜市教育委員会文化財課の広瀬有紀雄氏、さらに現地において出土した貝類資料や関連資料の提供を頂き、公表する機会を与えて下さった財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの鈴木重信氏と鹿島保宏氏、現場で協力を頂いた調査団の方々に対し記して、謝意を申し上げる。なお資料の採集にあたっては神奈川県立生命の星・地球博物館の大島光春氏と樽創氏の協力を得た。ここに記して感謝する。

*松島義章（神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員）、**田口公則（神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員）、***川名ひろみ（神奈川県立生命の星・地球博物館ボランティア）

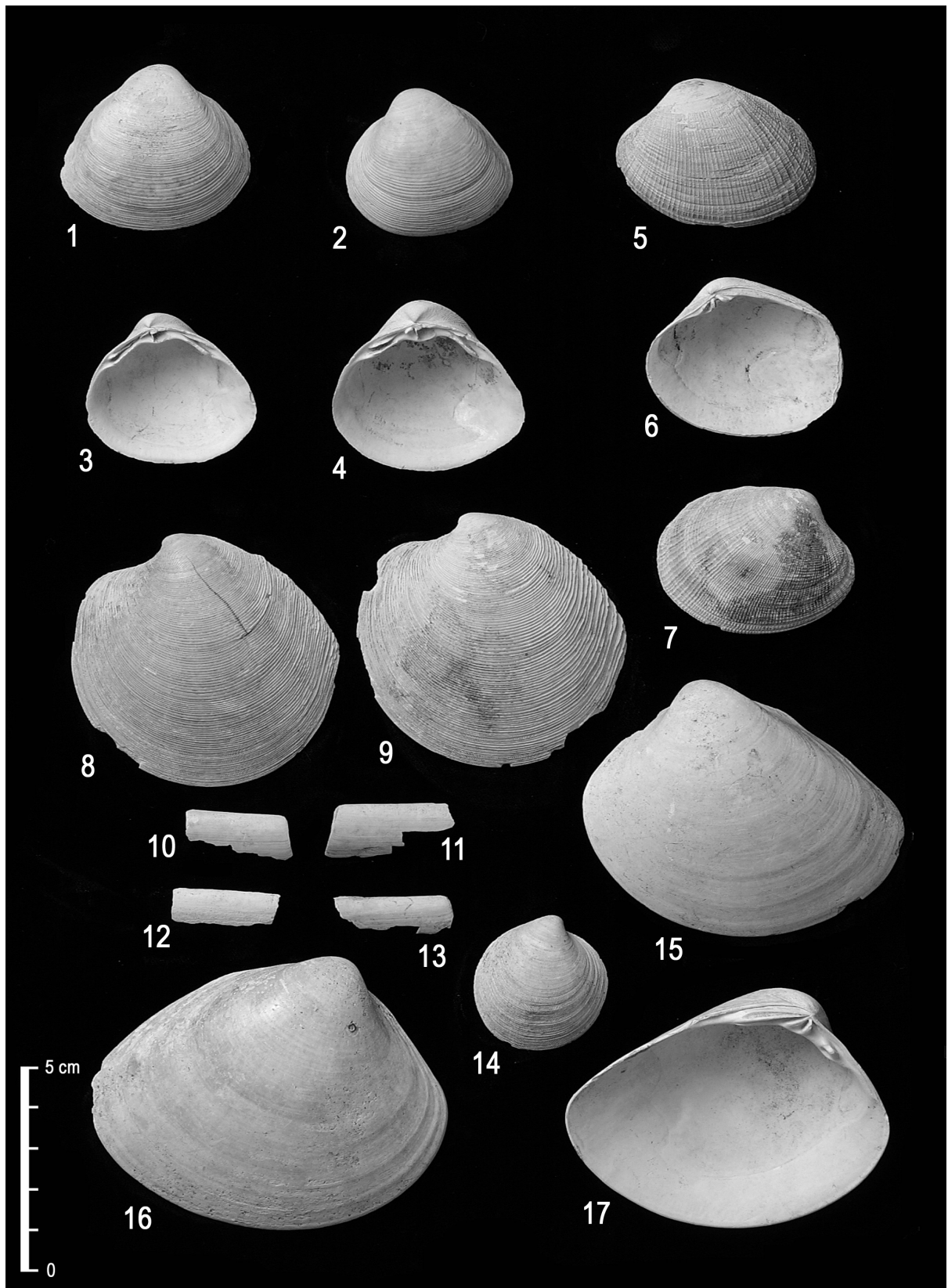
文 献

- 神奈川県立生命の星・地球博物館 2005 企画展ワークテキスト「+2℃の世界～縄文時代に見る地球温暖化～」. 46p.
松島義章 1984 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集—特に環境変遷に伴う時間・空間的変遷—. 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）, 15, 37-109.
横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団 2004 杉田東漸寺貝塚発掘調査報告—横浜市立杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—. 98p.
山田仁和 2001 横浜市磯子区 杉田貝塚—縄文中期～晩期にわたる貝塚—. 第25回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨, 31-36.
財団法人横浜市ふるさと歴史財団 2005 杉田東漸寺貝塚埋蔵文化財発掘調査概報.



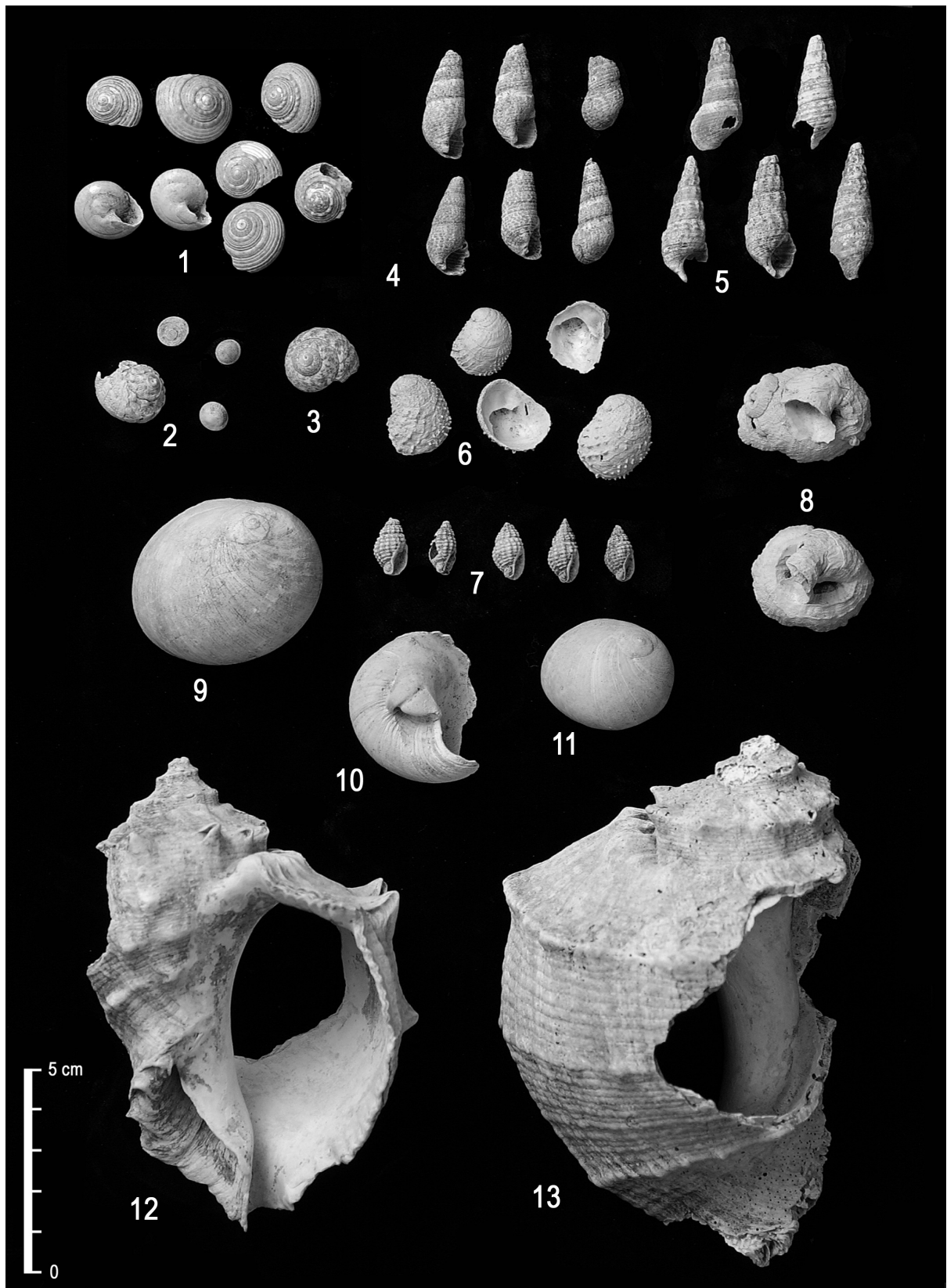
図版1 東漸寺貝塚5号溝C貝層出土の貝類I

1, サルボウ. 2, ハイガイ. 3, コベルトフネガイ. 4, コベルトフネガイ. 5, コベルトフネガイ. 6, イタヤガイ. 7, イタヤガイ. 8, アズマニシキ. 9, アズマニシキ. 10, アズマニシキ. 11, アズマニシキ. 12, イタボガキ. 13, イタボガキ.



図版2 東漸寺貝塚5号溝C貝層出土の貝類II

1, シオフキ. 2, シオフキ. 3, シオフキ. 4, シオフキ. 5, アサリ. 6, アサリ. 7, アサリ. 8, カガミガイ. 9, カガミガイ. 10, マテガイ. 11, マテガイ. 12, マテガイ. 13, マテガイ. 14, オキシジミ. 15, ハマグリ. 16, ハマグリ. 17, ハマグリ.



図版3 東漸寺貝塚5号溝C貝層出土の貝類III

1, イボキサゴ. 2, スガイ (殻と蓋). 3, ヘソアキクボガイ. 4, ウミニナ. 5, イボウミニナ. 6, アワブネガイ. 7, アラムシロガイ. 8, オオヘビガイ. 9, ツメタガイ. 10, ツメタガイ. 11, ツメタガイ. 12, アカニシ. 13, アカニシ.

写真



扉写真 貝層調査風景



写真1 校庭部分調査前全景（北東より）



写真2 体育館裏調査前全景（北東より）



写真3 調査区設定風景



写真4 表土除去作業風景



写真5 遺構確認作業風景



写真6 測量風景



写真7 1トレンチ（北より）



写真8 2トレンチ（南東より）



写真9 3トレンチ (北より)



写真10 4トレンチ (西より)



写真11 9号溝状遺構 (西より)



写真12 5トレンチ地業面 (西より)



写真13 10号溝状遺構 (南より)

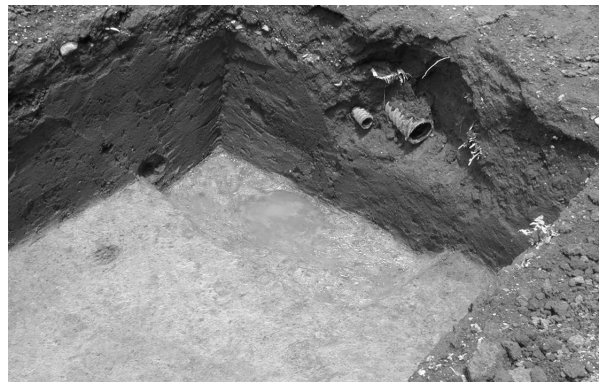


写真14 5トレンチ完掘 (西より)



写真15 6トレンチ (西より)



写真16 10号溝状遺構 (南より)



写真17 7トレンチ (西より)



写真18 8トレンチ (東より)



写真19 12・13号溝状遺構 (東より)



写真20 9aトレンチ (北より)



写真21 9cトレンチ (西より)



写真22 10号溝状遺構 (北より)



写真23 11号溝状遺構 (東より)



写真24 12号溝状遺構 (西より)



写真25 13号溝状遺構（東より）



写真26 10トレンチ遺構掘削前（東より）



写真27 D貝層（北より）



写真28 D貝層遺物出土状況（東より）



写真29 3号竖穴状遺構（東より）



写真30 3号竖穴状遺構P030出土状況



写真31 4号土坑（南より）



写真32 5号土坑（北より）

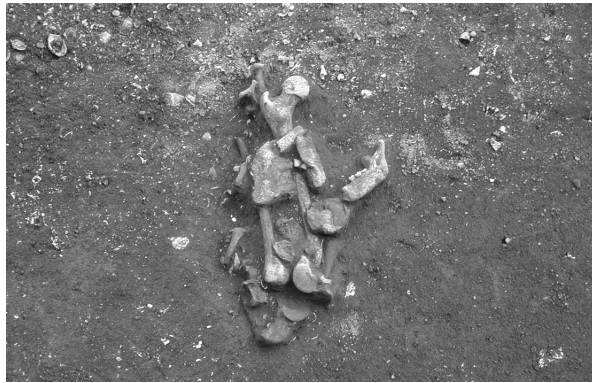


写真33 1号墓 (北より)



写真34 10トレンチ西側ピット (西より)



写真35 10トレンチ中央ピット (西より)



写真36 10トレンチ完掘状況 (東より)



写真37 11トレンチ (北より)



写真38 12トレンチ中央 (東より)



写真39 12トレンチ東側 (東より)



写真40 1号遺構 (南より)



写真41 12トレンチ西側（東より）



写真42 13トレンチ西側（南より）



写真43 13トレンチ中央（南より）



写真44 1号溝状遺構（北より）



写真45 A貝層堆積状況（西より）

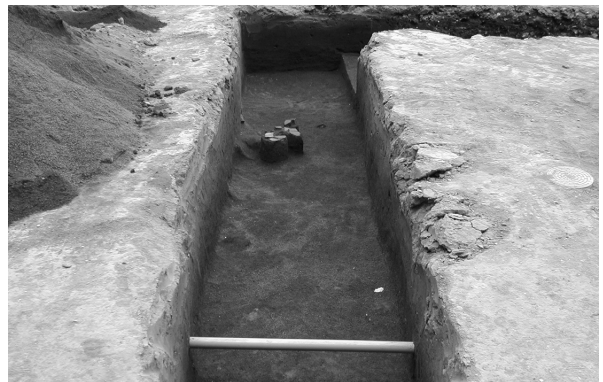


写真46 14トレンチ [1号縦穴状遺構]（西より）



写真47 15トレンチ [1号溝状遺構]（北より）



写真48 B貝層堆積状況（西より）



写真49 16トレンチ (東より)



写真50 2号竖穴状遺構 (南より)

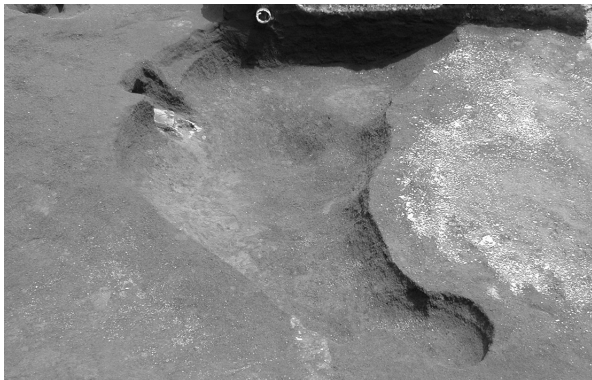


写真51 1・2号土坑 (西より)



写真52 2・3号溝状遺構 (北より)



写真53 18トレンチ (北より)



写真54 19トレンチ (東より)



写真55 20トレンチ遺構掘削前 (北より)



写真56 20トレンチ完掘状況 (南より)



写真57 3号土坑（南より）

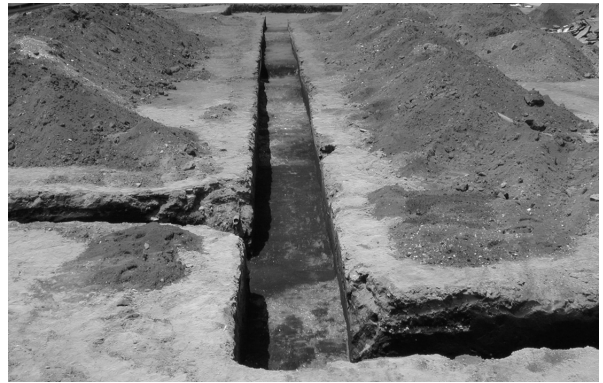


写真58 21トレンチ（東より）



写真59 C貝層検出状況（北東より）



写真60 5号溝状遺構（西より）



写真61 1号住居址（南東より）



写真62 1号住居址カマド（南より）



写真63 2号住居址（東より）



写真64 7号溝状遺構（南より）



写真65 22トレンチ遺構掘削前（南より）



写真66 22トレンチ完掘状況（南より）



写真67 23トレンチ（南より）



写真68 6号溝状遺構（南より）



写真69 見学会の様子



写真70 クジラの下顎骨出土状況（南より）



写真71 クジラの下顎骨取り上げ状況



写真72 出土遺物保管状況

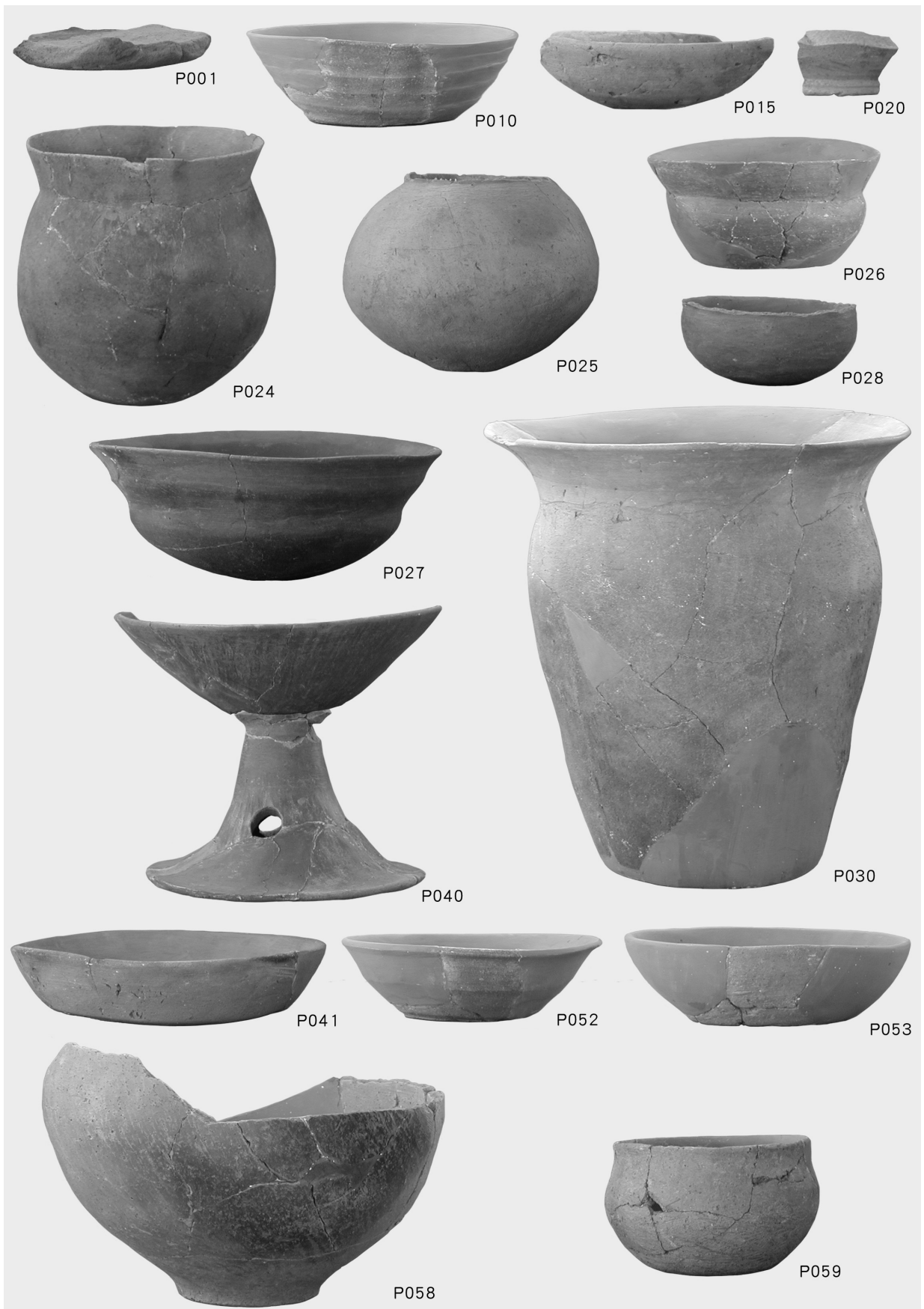


写真73 出土遺物1 (土器1)

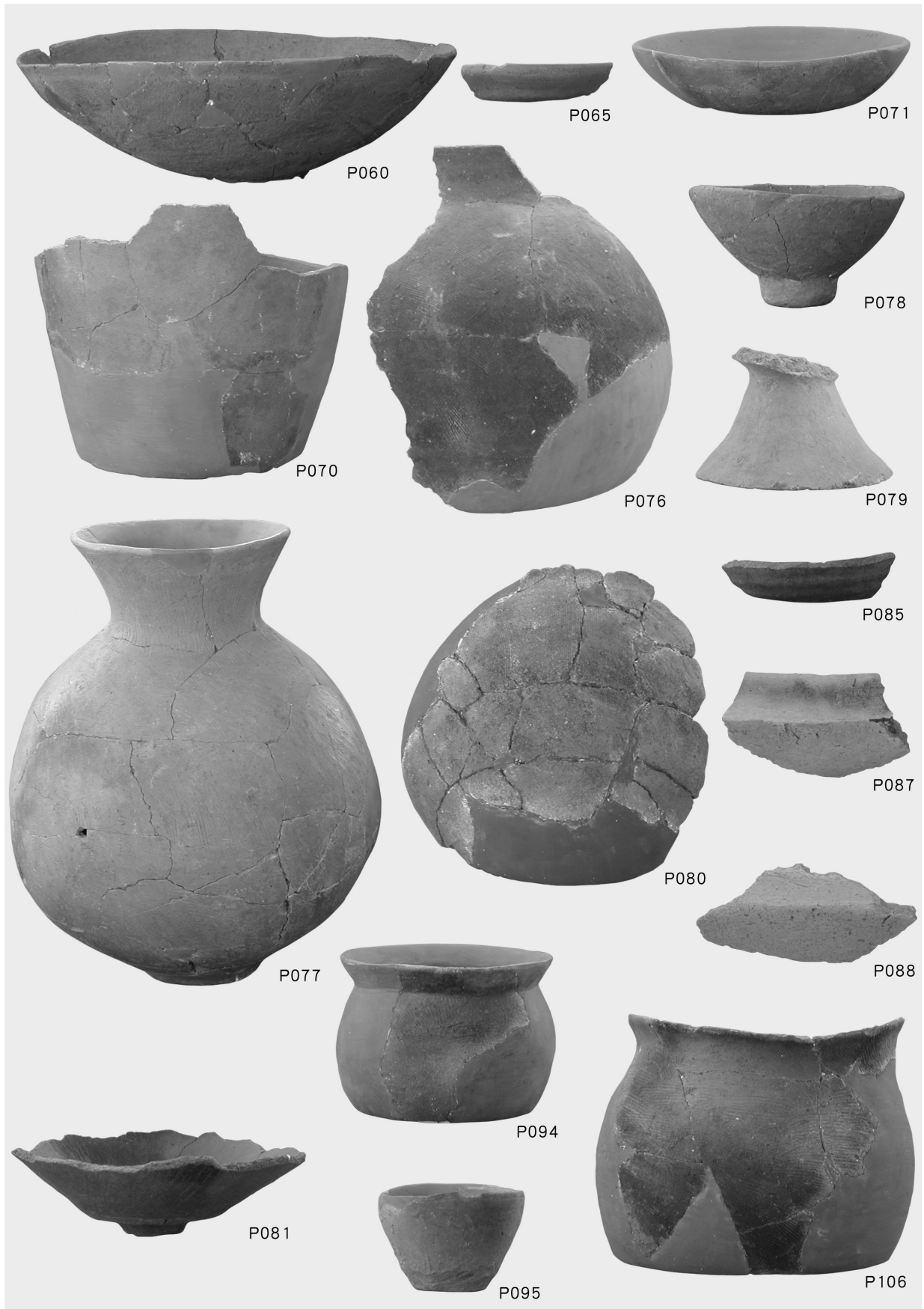


写真74 出土遺物2 (土器2)



写真75 出土遺物3 (土器3)

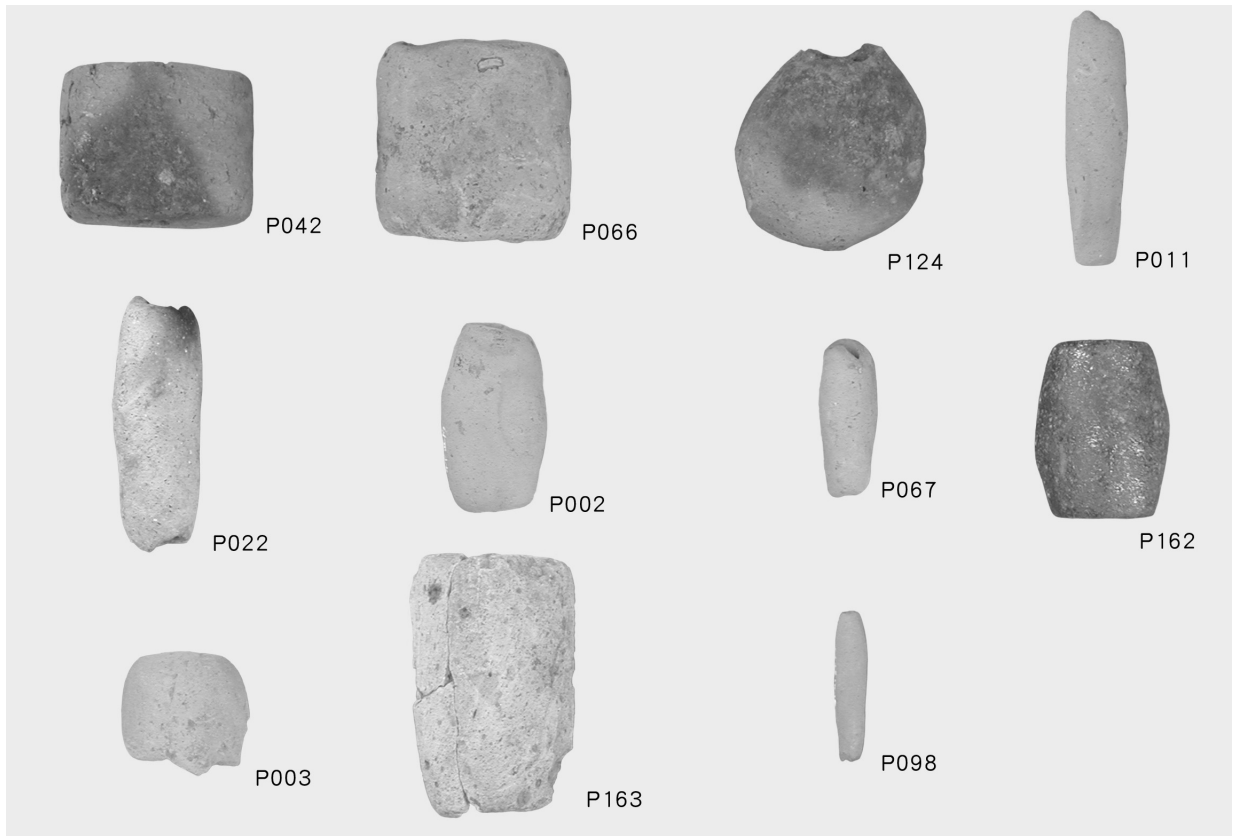


写真76 出土遺物4 (土器4)

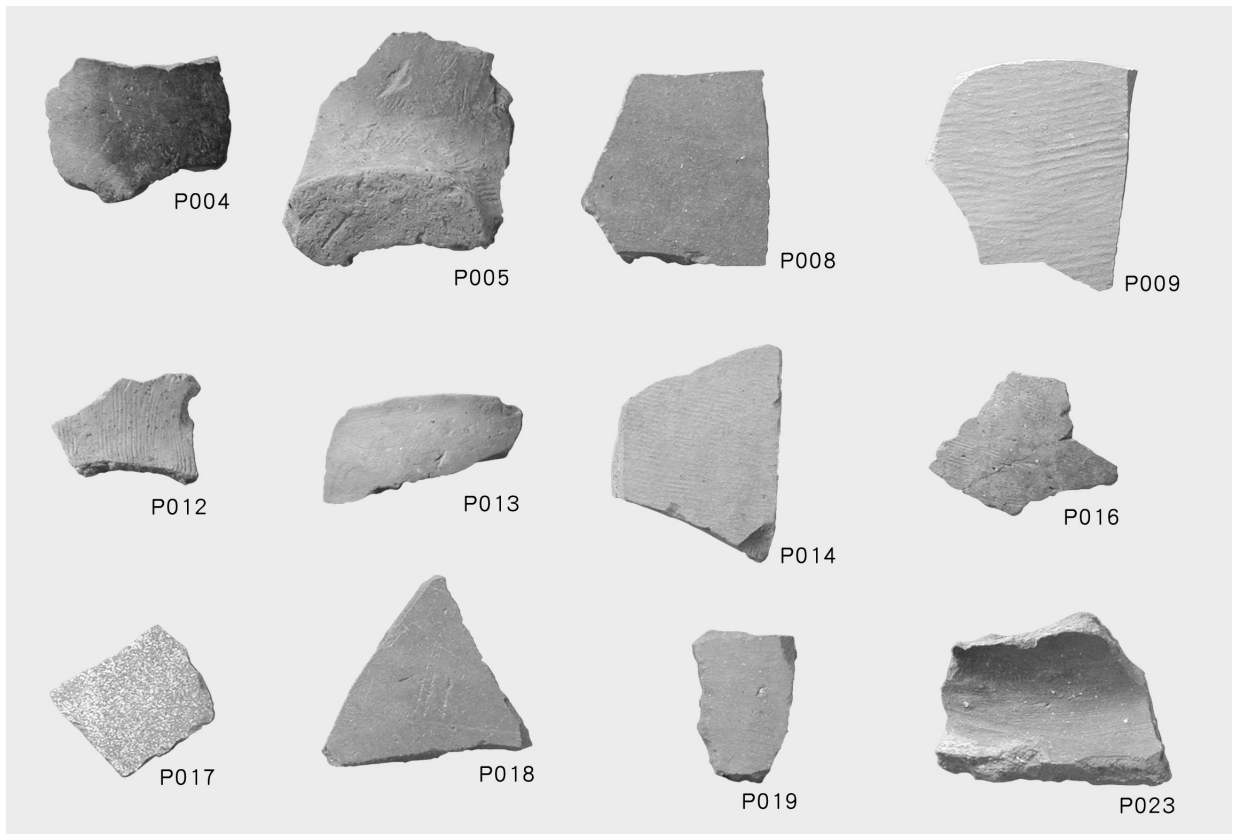


写真77 出土遺物5 (土器5)

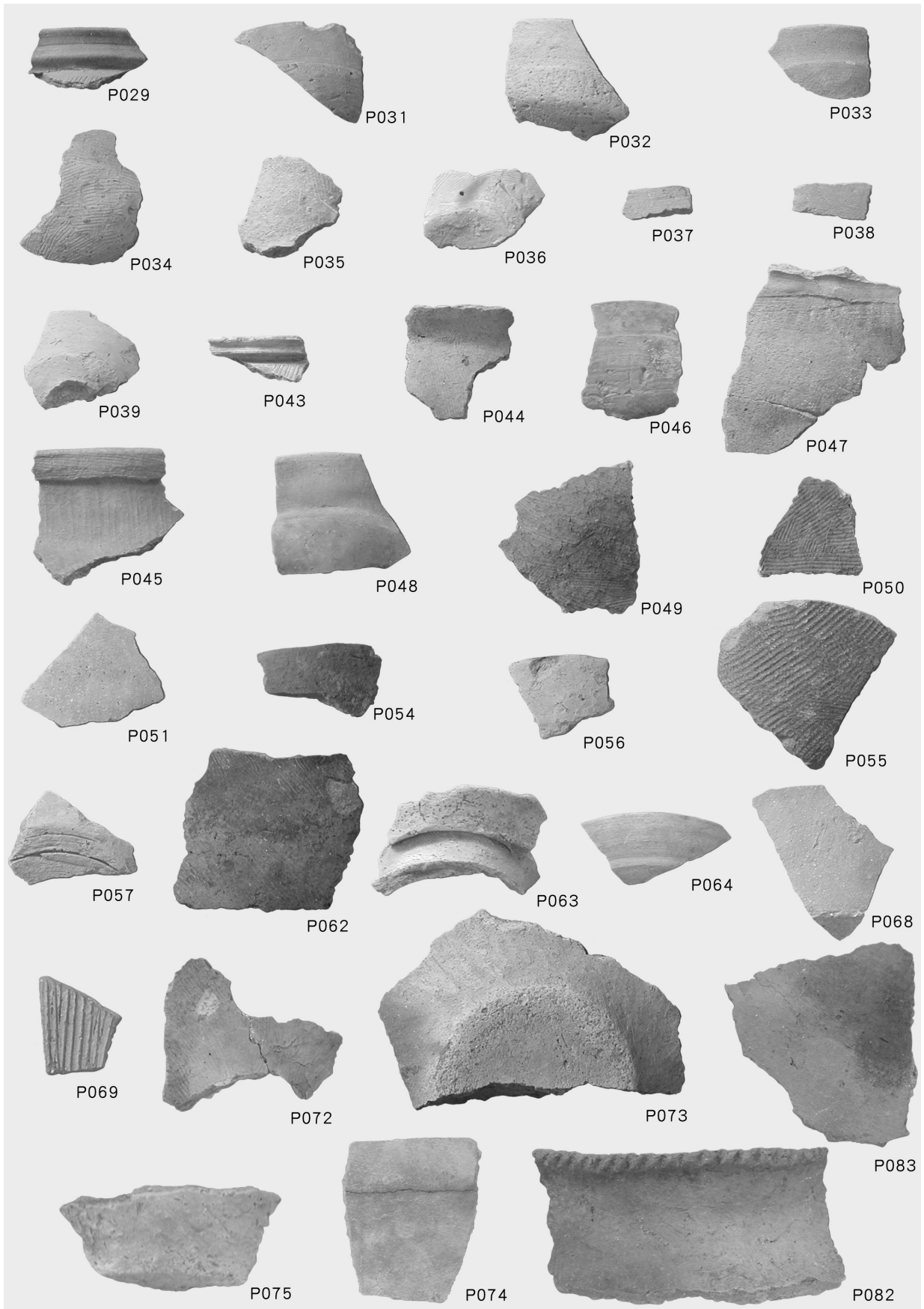


写真78 出土遺物6 (土器6)

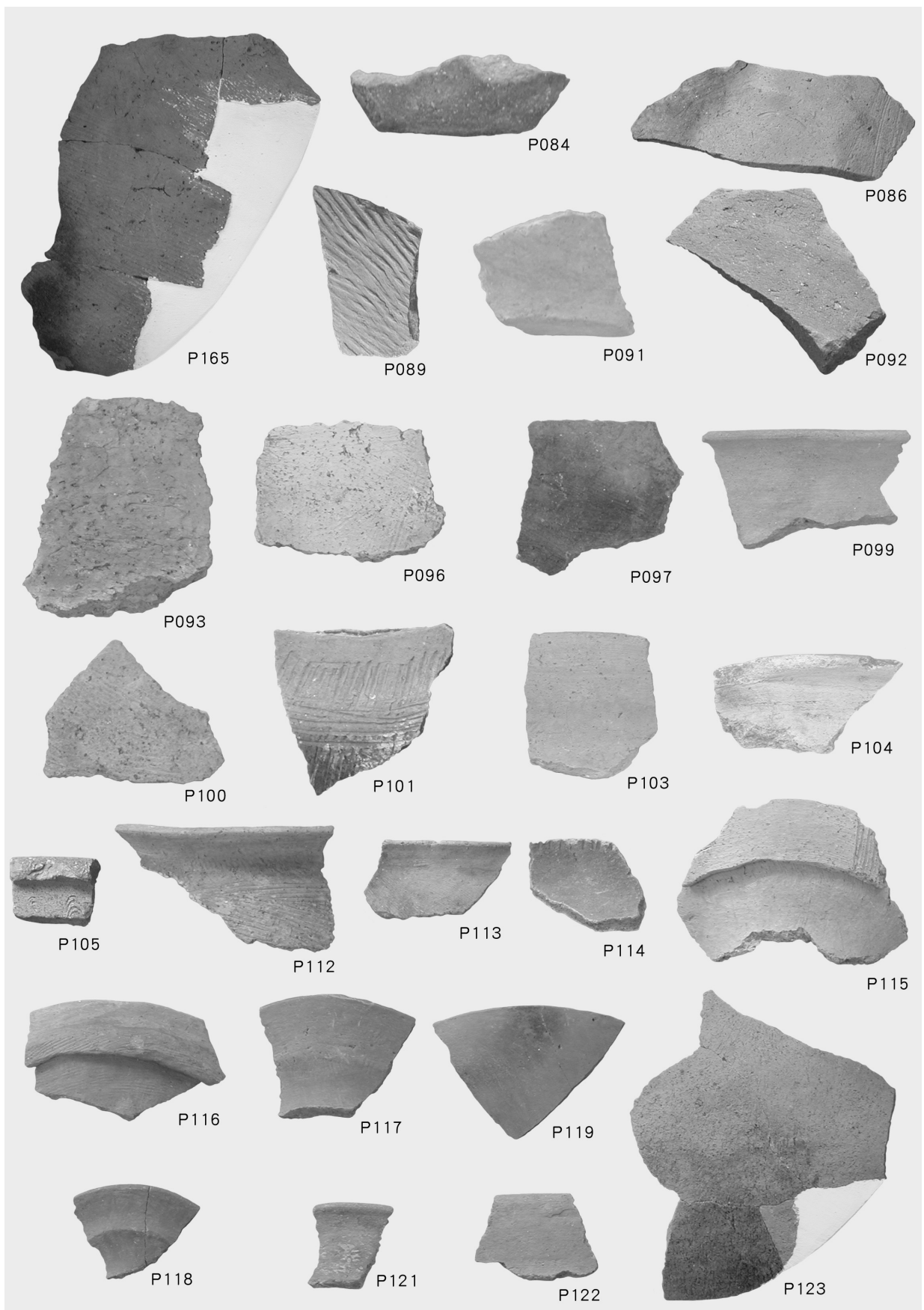


写真79 出土遺物7 (土器7)

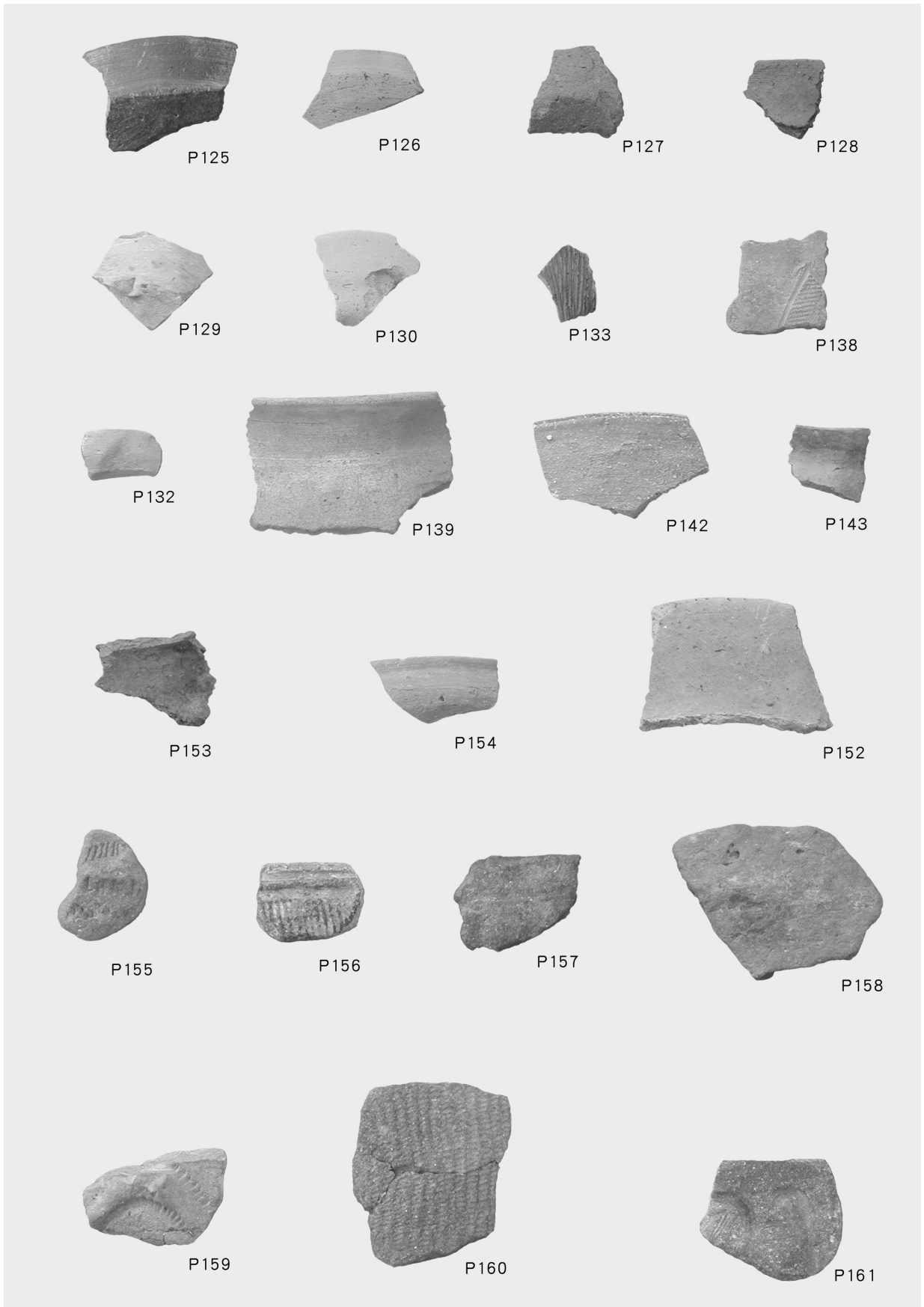


写真80 出土遺物8 (土器8)

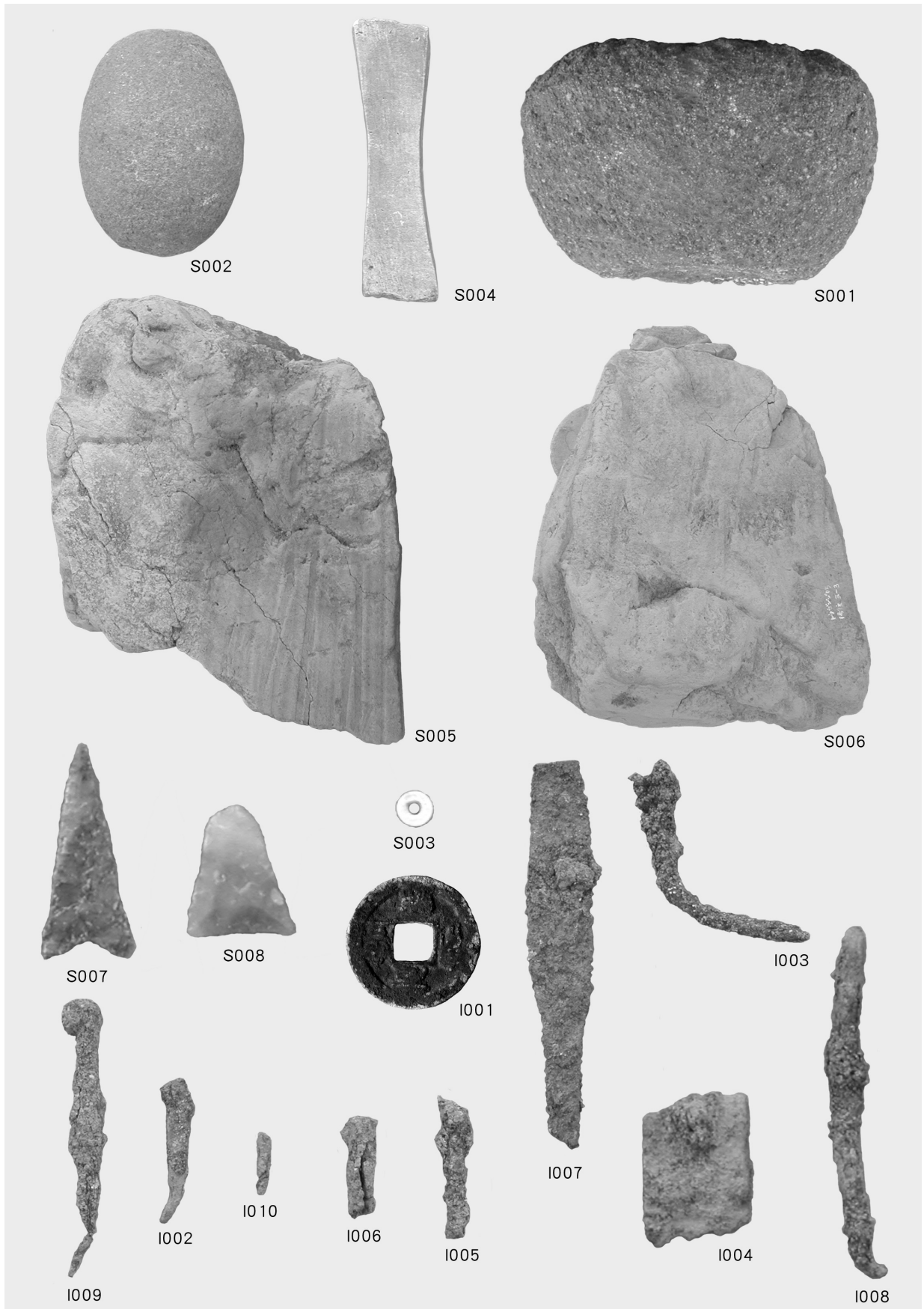


写真81 出土遺物9 (石器・金属器)

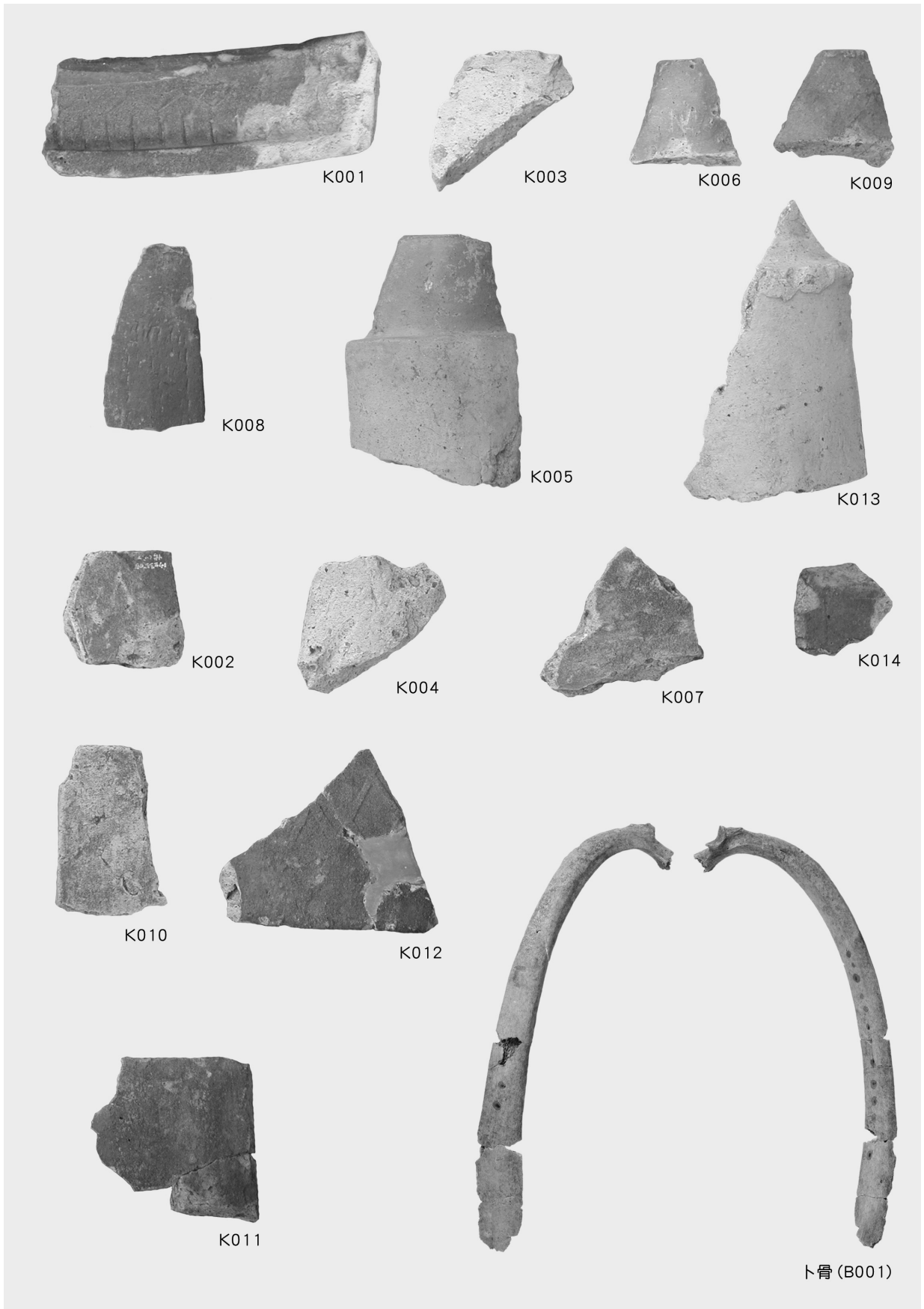


写真82 出土遺物10 (瓦・卜骨)

抄 録

ふりがな	すぎたとうぜんじかいづかほんはつかつちょうさほうこくに		
書名	杉田東漸寺貝塚本発掘調査報告2		
副書名	横浜市立杉田小学校校庭整備事業にともなう埋蔵文化財本発掘調査報告書		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	鹿島 保宏・橋本 昌幸		
編集機関	財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター		
所在地	横浜市都筑区勝田町760		
発行年月日	西暦2006年2月24日		
ふりがな	すぎたとうぜんじかいづか	ふりがな	よこはましそごくすぎたちょう
所収遺跡名	杉田東漸寺貝塚	所在地	横浜市磯子区杉田町一丁目8-1
市町村コード	141071	遺跡番号	磯子区No.31
北緯	35° 23' 07"	東経	139° 37' 00"
調査期間	2005年4月12日～2005年6月30日	調査面積	694㎡
調査原因	校庭整備事業		
所収遺跡名	杉田東漸寺貝塚		
種別	集落址・墓地・散布地	主な時代	古墳時代・中世
主な遺構	竪穴住居址2軒（古墳時代後期） 竪穴状遺構3基（奈良時代） 溝状遺構15条（古墳時代・中世） 貝塚4か所（古墳時代） 土坑5基（中世） 墓1か所（中世） 地業面2か所（中世）	主な遺物	古墳時代前・後期土器 （甕形土器・壺型土器・坏形土器 高坏形土器など） 古墳時代金属器・石器 奈良時代土器 （甕形土器・坏形土器） 中世かわらけ・陶器・金属器・瓦 ・古銭
特記事項			

杉田東漸寺貝塚本発掘調査報告 2

－横浜市立杉田小学校校庭整備工事に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書－

編 集 / 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター

☎ 224-0034 横浜市都筑区勝田町760 TEL.045-593-2406

発 行 / 横浜市教育委員会

発行日 / 平成18年 2月24日

印刷所 / 株式会社ナデック
